祖母の初恋

三浦　安臣

良一が、リビングの奥の部屋にいる祖母に声を掛けた。
「おばあちゃん、美代子さんが来たので、お茶を入れてくれませんか？」美代子は、良一のフィアンセである。
「はーい、すぐに行くね」祖母の芳枝は七十三歳で、七年前に夫を亡くしているが、明朗快活で白髪のショートヘアーがよく似合うモダンなおばあさんだ。孫の良一は、両親が揃って公務員で共働きだったので、幼い頃からおばあちゃん子で育った。幼稚園の送り迎えから、入学・卒業式、運動会、授業参観などは、いつも祖母が母親代わりを務めてくれた。
「美代子さん、いらっしゃい」祖母が笑顔で迎えた。
「うちの祖父の馴染みのお店に、秋の和菓子〈栗抹茶だいふく〉が売り出されたので、おばあちゃんに買って来ました」絞りの紫風呂敷を解いて、菓子箱を差し出した。
「嬉しいわ。いつもお心遣いありがとうございます。後でご一緒に頂きましょう」祖母はお茶の支度をしながら言った。
「結婚式場が、決まったそうですね」
「はい、良一さんと宇都宮市内の式場を下見して、ＨＮホテルに決めました。父も母も賛成してくれましたので」
「うちの両親も了解したので、今日は、式場との打合せに行ってくるよ」良一が、美代子と見つめ合って言った。
「良一もそうでしたが、美代子さんも異性とのお付き合いは、初めてだそうですね」祖母が、優しく訊ねた。
「私は、奥手なものですから、初めての恋が実って、とても嬉しいです」美代子は、目を輝かせて言った。
「俺も男子校で野球に明け暮れていたから、建設会社に就職して美代子さんと知り合うまでは、女性を意識することは全くなかったなぁー」良一が、照れくさそうに言う。
「良一さんは、おばあちゃん子だと自慢していましたよ」
「両親が働いていたので、私が親代わりでしたからね」
「あぁ、そうだ。以前に話してくれた、おばあちゃんの初恋の話を美代子さんにも聞かせてあげてよ。忘れられない思い出があるんだよね」良一が言った。
「青春時代の実らなかった恋の話は、希望に溢れているお二人さんには、似合わないですよ」祖母は、笑いながらお茶を入れた。みんなで美代子が持参した和菓子を食べながら暫くの間、談笑した。それから二人は、予約してあるホテルに出掛けて行った。一人になった芳枝は、好きな紅茶を飲みながら、良一が話した遠い日の切ない恋を、思い浮かべていた。

あれは、芳枝が十七歳の高校二年生の時だった。クラブ活動の合唱部で一年先輩の部長、高杉富雄と出逢い、淡い恋心が芽生えた。登下校は、いつも一緒で楽しい高校生活を過ご

し、富雄が大学を卒業してT銀行に就職した頃には、二人の愛は育まれ、生涯のパートナーとして意識していた。満月の夜の公園で、虫の音を聞きながらプロポーズを受けた時、初めて甘い口づけを交した。芳枝は、感動で心身が震えた。

その夜、帰宅した富雄は母に芳枝との交際を打ち明けた。

「その話をお父さんが聞いたら、吃驚するわよ。明子さんとの事はどうするの?」宮原明子の父は、富雄の父と幼い頃から無二の親友である。幼稚園から大学まで一緒で、今でも兄弟の様な付き合いをしている。許嫁ではないが子供同士が結婚して親族になることを望んでいた。富雄は、幼い頃は明子とよく遊んだが、高校生になってからは、会う機会もなく疎遠になっている。遅くに帰宅した父に、母が富雄の交際相手の話をした。父は母の話を聞いて、不機嫌な表情を見せた。

翌日の夕食後、家族で話し合った。

「明子との事は子供の頃から話していたよな。お前の嫁さんになるつもりでいると思うよ」父は穏やかに言った。

「俺にとっては、明子は妹のような存在だよ。恋愛や結婚の対象には、どうしても考えられないよ」

「だけど、長い間の付き合いで親達も認め合っている。お前がどうしても明子と結婚出来ないというのなら、今、付き合っている彼女との交際を一旦、中断してくれ」

「それは、何のためなの?」富雄は強い口調で訊いた。

「お前に彼女が出来たから、あの話は無かったことにしてくれとは、宮原にも明子にも、俺は言えない!」

「父さん、分かってよ。俺は本気なのだ。芳枝はいい娘だよ。きっと、父さん、母さんにも気に入って貰えるよ」

「俺は、お前を信じている。お前が本気で惚れたならきっといい娘だろう。だが、この話には長年の経緯がある。宮原も、俺と同じように期待を持っているはずだ」

「それは親達の考えで、俺は了解していないよ」富雄は、これまで、親子の諍いなど一度も無かった。両親と初めての意見の衝突だ。一週間程経って、富雄は考え悩んだ末、芳枝に逢って事情を話した。芳枝は、予期せぬ話に一驚し、涙で頬を濡らしながら、声を震わせて言った。

「私は、富雄さんと結婚したいけど、女はその家に嫁いで、家族に暖かく迎えられて幸せがあるのよ。ご両親の反対があっては、幸せな夫婦にはなれないと思うわ……」

「もう少し時間をくれ。親を説得するから。俺の気持ちは変わらないので、芳枝も少しの間、堪えて欲しい」

「分かったわ。富雄さんを信じているわ」富雄は、芳枝の胸を抱き寄せ、二人は熱い唇を重ねて愛を確かめ合った。

数日後、芳枝は考え貫いた末に、富雄宛に手紙を書いた。それは、『円満な親子の関係が、私の為に亀裂が生じてしまっては申し訳ないです。辛く悲しいが、私は身を引きます。良い想い出として、これでお別れします』という内容だった。

その後、富雄から何度も電話や手紙があったが、芳枝の決心は変わらなかった。こうして芳枝の初恋は終わった。

その後、芳枝は、伯父の紹介で見合い結婚をして一男一女をもうけ、現在、息子家族と平穏に暮らしている。

良一の挙式は、十一月の美代子の誕生日に決まった。

結婚式の当日は、小春日和に恵まれ、式場の教会には五十人ほどが招待された。司会者が案内した。

『新郎入場』扉が開いた。そこに良一と祖母が並んで立ち、深く礼をした。良一は真っ白いタキシード、祖母のコバルトブルーのロングドレスは、良一の父からのプレゼントで胸に

は手作りのカトレアの花が飾られてある。芳枝は強く辞退したのだが、良一からの達ての願いで入場することになった。

一瞬、会場が響いた。奇想天外だが、微笑ましい光景でもあった。司会者がアナウンスした。

『新郎のご希望で、新郎のおばあさんが人生の道案内人として、ご一緒に入場です』二人が腕を組んで静かに進むと、暖かい拍手が教会のドームに鳴りわたった。

『続いて、新婦とお父様の入場です』美代子が父と一緒に歩調を合わせて、バージンロードをゆっくりと歩み、その先で新郎にバトンタッチされ、新郎・新婦が牧師の前に進んだ。それから先は、讃美歌斉唱、結婚宣言、指輪交換、誓いのキスなど、結婚のための厳粛な儀式は進行した。

閉式三十分後に、同ホテルで披露宴が開かれた。招待客は友人、同僚、親族で百人程だ。媒酌人の挨拶は、良一の勤務先の取締役社長が、乾杯の音頭は直属の上司が執り、ケーキ入刀、友人達のスピーチと続き、余興に入った。新婦の友人が、ピアノ独奏でバッハの「G線上のアリア」を披露した。新郎の友人五人が、仮装して「てんとう虫のサンバ」を歌いながら踊って盛り上げた。その後は、演芸やカラオケが続き、余興の締め括りは、新郎の父が「黒田節」を朗々と歌い、留袖に着替えた祖母が扇を翳して舞い踊り、見事な親子共演で喝采を浴びた。芳枝がテーブル席に戻り一息入れていると、白髪でタキシード姿の老人が、挨拶に見えて、話かけた。

「花嫁の祖父です。見事な踊りでしたね。これからも孫娘の美代子を、どうぞよろしくご指導をお願いします」

「こちらこそ、良いお嬢さんと結ばれて喜んでおります」

芳枝は、椅子から立って丁寧にお辞儀して老人の顔を見た。痩せ型の長身で、色白で優しい眼差しは、どちらかで会ったことがあるような、喋る声にも微かな記憶があるー。

「えぇー　どちらでお会いしましたかしら……　お勤めしていた頃かしら、社交ダンスの会、いえ、茶会のお席……」

芳枝は、直ぐには思い出せなかった。次の瞬間、

「あぁ……あなた様は……」芳枝は驚嘆し、言葉を失った。

「芳枝さんですね。高杉富雄です。舞台で踊っているお姿を拝見して、もしやと思いまして、ご挨拶させて戴きました」

「本当に……富雄さん?」何という運命の巡り合わせか。五十年前にプロポーズを受諾しながらも、悲しい別れをした初恋の人が、偶然にもお互いの孫同士の結婚式場で再会し、今、目の前にいるとは、芳枝の目に涙が溢れ出た。

「その折は……我が儘を、お許し下さいませ……」芳枝は泣きながら若い時の身勝手な行為を、何度も詫びた。富雄も感涙して芳枝の背にそっと手を回して、繰り返し頷いた。

披露宴は、新郎新婦の花束贈呈、新郎及び新郎の父が御礼の挨拶を述べてお開きとなった。二人の新婚旅行は、良一の仕事の都合で、翌月に遅らせることにした。

新生活は、近くの賃貸マンションでスタートした。

十二月になって、新婚旅行でエジプトに旅立った二人が無事帰国して、元旦に、新年の挨拶で顔を見せた。

「おばあちゃん、おじいちゃんと連絡取っているの?」

「二度お会いしたわ。今日も二荒山神社に初詣に行く約束よ」

「おじいちゃんは十年前から独り身だから元気づけてね」

「はい、はい。仲良しこよしにしていますよ」と笑った。

祖母は、新春の清々しい陽光の中を、初恋の人と肩を並べて初詣に出掛けた。孫の新婚夫婦が、老いたニューカップルを笑顔で見送っていた。

キンモクセイ

嶋　均三

むかし、山々に囲まれた長閑な集落があった。
山の南側に面した傾斜地の少しばかりの畑と沢水を利用した狭い田んぼ、そして大自然の山の幸が生活の糧となり、村人達は静かに暮らしていた。
ある年、秋の取り入れがすんだ頃、その穏やかな山間の村に小さな事件が起こった。
馬をひく次作という中年の男は働き者だが酒好きで、夕方にはいつも酔っていた。
ある日の夕方、次作がほろ酔い気分で馬を小屋に入れ、戻ろうとすると隣の納屋の方から子供が駆け出すのを見た。
動きが鈍く、でっかい身体をみて「俵太」だと思った。俵太はおとなしく、気のやさしい子供だったが、親が無く叔母さんに引き取られてひっそりと暮らしていた。
このとき次作は別に気にもせず、戸を閉めて納屋のひさしを見上げると、そこに吊るしておいたはずの干し柿がなくなっていた。
次の日の夕方、酒に酔って仲間達に得意に話をする次作の言葉に「干し柿泥棒」のうわさは、たちまち村中に広まって行った。
俵太は泥棒だとうわさされ、村の小学校でも後ろ指を指された。村人たちから注がれる視線を子供ながらに感じとった。
友達が一人二人と離れて行った。教室でも校庭でも俵太は一人で過ごすことが多くなっていった。
たった一人、四郎だけが近づいた。
「俵太よぉ、今度アケビ取りに行くべ、なっ！」
「うん！」
「俵太よぉ、カキシメジ知ってっか？」
「知ってら、オレ山から取ってきてやるよ」
四郎と俵太は同じ集落だった。二人はよく一緒に遊んだ。
ある日、校庭でキンモクセイの木の下にしょんぼりと立っている俵太に担任の先生が近づいた。
「どうした、元気ねぇな」
「オラ、悪いごどしてねぇ・・・」
「何かあったのか？」
「オラ、悪いごどしてねぇ」
それだけだった。
そして、そのうわさも消えはじめたころ、今度は鶏小屋から卵が盗まれ、台所に置いた大豆がザルごと無くなったというわさが広まった。
その時、やはり身体のでかい俵太を見たと言われた。
その夜、俵太は叔母さんに呼ばれ、いろりの側に正座した。
叔母さんは泣きながら俵太の頭を殴った。

「オラ、悪いごどしてねぇ」
俵太は悲しそうに叔母さんに答えた。ひざに置いた手の甲に大粒の涙がこぼれた。何を言ったらいいのかわからなかった。
俵太にはだれーもいなくなった。たった一人になった。
次の日の夕方、俵太が四郎の家に行くと、
「こら一緒に遊ぶんじゃねぇぞ！友達が悪いと、オメも悪くなっちまうから」
と、四郎の母親がどなった。
俵太は黙ってそこを離れた。
「オラ、悪いごどしてねぇ」
さみしく、みじめな気持ちが胸いっぱいに広がり、トボトボと歩いた。庭の端に干された地下足袋の色と白い菊の花が子供の目に対照的に写った。
四郎は複雑な気持で座敷からじっと庭の方を見ていた。しょんぼりと去って行く俵太の背中を悲しい目で追った。
しばらくして、四郎の母親が畑に出たあと、また俵太がやって来た。そして台所の方に入った。
四郎は座敷から、ずっと俵太の動きを追った。
（やっぱり俵太は泥棒か！）
すると台所のカマドの上に何かを置いて帰って行った。四郎が急いで台所に下りてみると、それは山で取った「カキシメジ」だった。
俵太はキチンと約束を守ったのだ。
それから数日後、俵太は叔母さんとともに静かにこの村を離れた。叔母さんに仕事がみつかったからだ。隣の県の温泉旅館で働くことになったという。
俵太はだれにも見送られずに、淋しく転校して行った。
何と！俵太が去った翌日、また鶏小屋の卵が盗まれ、隣村の中学生が捕まった。常習犯だった。村中に衝撃が走った。
四郎は大切な友達をなくしたことを子供ながらに恥じた。
そして、毎日夕方になると裏山に上り、俵太が住んでいる隣の県の方角に向かって、大声で俵太の名を呼んだ。
「俵太よぉー・・俵太ぁー」
しかし、夕日の中を虚しくこだまが返って来るだけだった。
馬引きの次作も、それを聞いて深く反省し、酒をやめたという。
キンモクセイが散りはじめていた晩秋のことだった。

なれば雪の声にも耳をふさぎ

福冨　陽子

それまで長野の山間で代々続く暮らしを守ってきた祖父母は長寿を全うし、相次いで亡くなった。住み手の絶えた大きな萱葺きの家屋を廃墟にするわけにはいかないと、父は一念発起し東京から移り住むと決めた。勤めあげた会社をこの春定年退職するのをきっかけに故郷に戻り、畑仕事をやりながら夫婦でのんびり暮らそうと母にもちかけた。当初は「気が進まない」と言っていた母も、最近では田舎の暮らしに馴染んできた。

私は大学を卒業し都内の証券会社に勤め、大学二年になった妹のまり子と二人で暮らしている。盆や年末に長野の父たちのもとに行く程度である。

祖父母が健在だった頃、父の二人の妹家族も帰省し、それはそれは賑やかな年末年始となるのが恒例だった。

私が高校二年のときだった。例年と変わらず新年を迎えようと祖父母の家に泊まっていた大晦日の昼過ぎ、大きなリュックを背負った伯父がひょっこり帰ってきた。

「ただいま戻りましたぁ！」

その声を聞いて、祖父母の顔がパッと明るくなった。

伯父は「冷たすぎて足の感覚がないわぁ」と言いながら三和土で帽子に積もった雪を掃った。いつも無精髭を伸ばし、見てくれはこざっぱりともしなかったが、私たち姪は子ども好きの優しい伯父が大好きだった。姪たちは伯父を「アキオジ」と気軽に呼んでいた。雪道を歩いてきたせいで頭から足の先まで濡れ、「どえりゃあ冷えてから。ちょうど沸いとるだに、風呂に入ってきな」と祖母に急かされ浴室に向かった。

新年を前に久しぶりに長男が戻り、祖父母はこの上なく満足そうな顔をしていた。

風呂から上がり、アキオジは首にタオルを下げたまま仏間に行き先祖に線香をあげた。私たちはクスクス笑いながらアキオジが神妙な顔で手を合わせているのを襖の隙間から見ていた。それが終わると、祖父母に北海道の土産だといって鮭の塩引きや正月用のかまぼこをリュックから出し、「まだ年は明けていないが、ほれ、お年玉な」と、姪たちに皺くちゃの千円札を一枚ずつ手渡してくれた。

「はるかぶりだぁ。どこに行っとった?」

「釧路だに。漁師の手伝いさ」

小さな山間の村では、「風来坊のアキ」と伯父は人からあだ名されるほど、若い頃から思いつきで家を出て行っては暫くもどってこないのが常だった。長い時は二年も三年も音信不通だった。かといって、帰ってくれば家の仕事を熱心に手伝って過ごした。田舎の家に居つかない反面、村の誰かの家

の屋根や縁側が壊れたと聞けば大工道具を抱え、無償で直してくるといった面倒見のいい伯父でもあった。

「アキオが結婚でもして家を継いでくれれば、俺らはもうなんの心配もないだに」と祖父はよく言った。祖母も、「なんで家に腰を据えようとせんのかのぉ」と嘆いていた。

伯父の行動は、生まれ持った習性のようなもので、父や父の妹たちはあえて伯父に家に居るよう苦言することはなかった。伯父はもともと自分は家の後を継ぐ資格はないと心得ていたようだ。むしろ、血のつながりのない自分を、長兄として扱ってくれる父たちに気後れしていたのかもしれない。

物心がつき、真実を聞かされるまでは私はアキオジは父の実兄だと思っていた。

まだ若く独身だった祖父が岐阜の繊維工場で働いていたころアキオと出会った。雪が降り出したある日、三歳ほどのアキオが工場の敷地内で腹をすかせて泣いていたのだという。親は見当たらなかった。戦後の混乱の時代である。

その後、知人の紹介で祖父は祖母と長野で所帯を持つことになる。跡取りだった長男を戦争で失い、一人娘だけが残った。それが祖母である。受け継がねばならぬ大きな屋敷と広い田畑を守るため何もかもに目をつぶり、どこの誰ともわからない子どもを連れた祖父と結婚したと聞いただけである。

当時、身寄りのないアキオを憐れに思った祖父は、かつて病死した実弟をその小さな姿に重ね合わせ、手放せなくなったのだろうと親類が話しているのを聞いたこともある。

周りから、そんなふうにアキオジの秘話を聞かされたところで、アキオジはまぎれもなく私たちの伯父だったし、父も「兄貴」と慕うのは変わらなかった。

アキオジから北海道の土産話をさんざん聞き、除夜の鐘を聞く前に私たち子どもは先に寝床に入った。私は妹のまり子と同じ布団で寝た。従姉妹の祥子は離れの部屋に寝泊まりしていたので、祥子は親たちを待たずひとりで眠りについた。

日付が変わり新年を迎えた深夜、まだ広間でおとなたちが呑んでいたころ、離れに続く渡り廊下のほうで奇妙な叫び声と物音を聞いた気がしたが、まどろんでいたからわざわざ見には行かなかった。

元旦の朝、あたりは降り続いた雪に覆われていた。

「これでは山の神様まで行かれんのぉ」

祖父は窓越しに広がる白銀の光景に目を細めていた。

参道も雪に埋め尽くされ、近くの山腹にある神社の初詣は取りやめになった。祖父母と子どもたちは雑煮を食べ、テレビを見て過ごした。両親や叔母たちも降り積もった雪を見ながら炬燵で過ごした。アキオジはなかなか起きてこなかった。相当からだが疲れているからまだ寝ているのだと思った。

「もう昼になるで、誰か起こしてきてくれんか」と祖母が言うので、私はアキオジが寝ているはずの部屋に行ったがそこにはいなかった。布団も敷かれてはいなかった。

離れに続く渡り廊下で叔母さんが、

「アキオさんなら私たちの部屋に寝ているわ。まだ寝かせておいてあげましょう」と言ってきた。叔母の顔は雪の反射のせいなのか、妙に青ざめているように見えた。

「僕と朝まで呑んでいたから暫く起きないかもしれません」

居間で祥子の父親が祖父母にそう言っているのが聞こえ

た。祥子の父親とアキオジは二人で酒を呑むほど気が合っていたのか。違和感があったが、気にもせず私も炬燵に入った。
祥子は祖父の横に座りテレビを見ていた。人気のお笑い芸人が出ている正月番組だが、笑っているのは祖父だけで、祥子は無表情でただ画面を見つめていた。
その日の夕方、さすがにアキオジは起きるだろうと思い、離れに呼びに行こうとすると、叔母が廊下に立っていて、「アキオさんはさっき、急用ができたって荷物を持ってまた出て行ったわ」と言う。祥子もすぐ傍にいて黙っている。
「お正月はずっとここにいるって、昨日は言ってたのに」
そう言いながら私は叔母の横を通り過ぎようとした。その瞬間、叔母は私の腕を掴み、「出て行ったって言ってるでしょう！　もうアキオさんはいないから！」と大きな声で制した。
びっくりした。ふだんもの静かな叔母が声高になったものだから、驚くというより怖かった。掴まれた腕も痛かった。
「まったく鉄砲玉のようだに。正月くらい家にいて雪下ろしでもやってほしいもんだわ」と祖母が言い、祖父も「まんず」と小さく呟いた。私にさよならも言わず出て行ったことが悲しかった。アキオジにとって、私だけは特別だと思っていた。
「きっと誰かに呼ばれたんじゃないかしら。アキオさん、誰かが困っていればいても立ってもいられない性分だから。その用事が済めばまた帰ってくるでしょう」と母が明るく言ったが、祖父のうなだれた様子を見るなり涙があふれてきた。
私も祥子も大学受験を控えていたために、翌年の年末年始に祖父母の家には行けなかった。帰省したのは父だけで、「雅代の家族も風邪をひいて来られないって。結局、じいちゃん、ばあちゃんと俺の三人だけの正月になった」と電話をかけてきた。相変わらずアキオジからの連絡はないと父は言った。
あれから年末が近づくたび、祥子の親たちは体調がすぐれないといって、ついには祥子の家族が帰省することはなくなった。あの年以来、祥子と会ったのは祖父母のそれぞれの葬儀のときだけで、いつしかすっかり疎遠になってしまった。

夕間暮れ迫る山を窓越しに眺めながら風呂に入った。かつて祖母がいつも笑顔で立っていた厨房で母と妹と私とで簡単な夕食を作り、その晩遅くまで家族と話した。
「お父さんたち、田舎に来てよかったことは何？」
「そうだなぁ、携帯電話から解放されたのがなによりだな。家の電話で用は足りる」と父は言い、ごろんと横になった。
その言葉にハッとした。アキオジはあの頃、携帯電話を持っていなかった。やはり、誰かに呼び出されたわけではない。
依然として帰らない伯父。ずっと、気がかりで不安だった。案じていた通り祥子の親たちがあの夜、人の道を外してしまったのか。だから、祥子の家族はあの年以来泊まりに来ることもなくなった――。想像すべきではない負の憶測がこりとなり喉の奥で喘ぎ続けている。両親にも言えずにきた。
あの日、雪に深く刻まれていたであろう足跡を辿ってでもなぜ、アキオジを追いかけなかったのか。悔やみきれない。
叔母に強く阻まれた離れ。その床下。――私はいまにもそこを掘り起こす衝動に駆られるのか。からだが震えた。
意を決し、廊下を渡り恐る恐る引き戸を開けてみると、古い畳は一掃され真新しい頑丈な床材に張り替えられていた。
「ここを兄貴の部屋にしたんだよ」
いつのまにか父と母がにこやかな顔で後ろに立っていた。

むくろ樹

紙屋　里子

おお、さむい寒い。雪が降って来たのう。
こんな寒い雪の日にあの娘は、わしの枝で首をつったのじゃった。わしは奈良公園の南の端に立っているむくろじじゃ。
もう今年でたぶん四百年ぐらいこの場所にいるが、正確なことは自分でも分からない。人はわしのことを『骸樹』というておるそうじゃ。
わしの体の真ん中の穴から三本の青竹が生えて、はじめて見る人を驚かせている。長い間同じ場所に立っていればそんなことぐらいは当たり前なんじゃが、初めてみる者はそう思わないらしい。
それでは、みんなわしの話を聞いてくれ。
もうずいぶん昔のことになったのう。どれぐらい経つかのう。この辺りではちょっと有名な大きな旅館があるんじゃ。名前は何だって、それは言えん。今もその旅館は続いているのじゃ。その旅館には若旦那が二人いた。
下の若旦那はまだ十四歳の子供じゃった。上の若旦那は、二十三歳で男前の脊のすらりとした若者じゃった。働き者で優しいので下働きの者からも好かれ、旅館の跡継ぎと目されておった。
その上の若旦那が、秋の月のいい晩、仕事が一段落して散歩に出てきた。ちょうどわしの近くまで来た。
すると、歳のころなら一七、八であったろうかのう。美しい娘が、侍女と二人で通りかかった。親戚からの帰りじゃったようだが、遅くなったので急いでいた。ところが、あんまり急ぐので、石につまずき履いている草履の鼻緒が切れてしまったのじゃ。
「困ったわ。どうしましょう」と嘆いておった。若旦那は、たまたまそれを見ていた。
「草履を、かしてみなさい。私がなおして上げましょう」と言って、娘の草履を手に取ると自分の持っている手ぬぐいを裂き器用に直してやったのじゃ。
「有り難うございますおかげで助かりました」と娘は礼を述べた。若旦那は、娘があまりに美しく可愛いので、名前を聞いた。娘は、自分の名前を答えておった。
「私は三日後この時間にまたここに来る」と若旦那は言うと娘は頷いた。
三日後、娘は一人でやって来た。若旦那もやって来て待っておった。
「先日は、ありがとうございました」と娘は礼をいっていた。
二人は傍のベンチで楽しそうに話し込んでいた。
娘の父は神官だという。それもこの奈良でも指折りの大き

な神社の主だ。
それから二人は二、三回わしの木の根本で会っていたが、しばらくしたら来なくなった。わしはどうしたのだろうと思っていた。
わしの足許に来ていつもタバコをふかしている年寄りが、二人を茶店の前で見かけるようになったと話してくれた。その男は以前若旦那の旅館で働いていた番頭だった。
その男が話したことじゃ。
二人は、人目を避けて茶店通いをしていたという。それから二人はそれぞれの親に打ち明けたそうだ。ところが、二人の親達は大反対をした。
若旦那の親は、息子に云った。
「先代の嫁をその娘の家からもらったが、その嫁には奇妙な癖があり離縁した。その嫁の姉も、そのまた親戚の娘にもよく似た奇妙な癖があったということじゃ」と神妙な顔つきで話したという。
「どんな癖があるのですか」
若旦那が尋ねても両親は決して答えようとしなかった。
「そんなことは、どうでもよい。ただあの家の娘達はだめだ。相性が悪いのだ」
終いに、そんなことを言いがんとして聞き入れようとはしなかった。
一方、娘の家でも同じような状態だったと言う。娘の親達も若旦那のことを反対した。
「あの家の息子はだめだ。あの家とは相性が合わない」
相性が合わないと言われても、何のことか分からない。若い二人は途方に暮れた。
だが、二人は人目を避けそっと会っていた。とうとう娘は若旦那の子供を身ごもってしまった。子供が出来たことを知った若旦那は、決心したように娘にいったそうだ。
「二人で遠くに行って暮らそう」
駆け落ちの約束をしたのだ。
ところが、何故か、駆け落ちの約束が若旦那の親にばれてしまった。彼は座しき牢に入れられた。娘に知らせることも出来ない状態じゃったのだ。
駆け落ちの約束の日になった。今日のようにさむい寒い日じゃった。朝から雪がチラチラ舞っていた。そんなにさむいのに、娘は一人で約束の場所に来た。わしの根本じゃ。
しばらくして約束の時間になった。ところが、若旦那がなかなか来ない。凍えながら娘は待っておった。何時間待っていたじゃろうか。
娘は若旦那が待っても待っても来ないので、泣きながらとうとうわしの木の枝で首を吊ってしまったのじゃ。その娘に雪がかかっておった。
次の日、骸になった娘は捜していた親達に発見された。その時、娘は、頭の上から足の先まで真っ白じゃった。まるで白無垢を着ている様じゃった。
座しき牢から出された若旦那は、娘が死んでしまったことを奉公人から知らされた。若旦那は悲しみのあまり何も出来ずとうとう病気になった。それから一月して娘の月命日に後を追うように亡くなったのじゃそうな。
若旦那の葬式の日も、雪が降っていたという。
番頭だった男が話してくれたことはこれで終わりじゃ。

その後、しばらくしてから、わしの木の真ん中のむろに三本の青竹が生えて来たのじゃ。

まるで親子三人が仲良く手をつないでいるようじゃ。この世で果たせなかった幸せを得ようとするようにのう。

神官の若い娘が首を吊ってから、わしの枝で自殺する若い娘が後を絶たんのじゃ。

わしの枝は丈夫で一寸やそっとでは折れたりしないからのう。それでこのわしを誰言うとなく『骸樹』と、言うようになったんじゃよ。良い呼び名じゃないのう。

じゃがな、わしは春になると白い美しい花を咲かせる。「ほう、目が覚めるような綺麗な花が咲いている」と、いって見る者を驚かすほどじゃ。

秋には丸い茶色い実を落としている。その実は、今は油や苛性ソーダが作られているので使われなくなったが、石けんに使われたりしたこともあるんじゃ。

その実の中には黒い固い種が入っているんじゃ。その種は正月に女の子達が遊ぶ羽子板の羽の芯や数珠に使われるのじゃよ。

あの二人が夫婦になって女の子が生まれていたら、わしの落とした実を拾って、羽子板で遊んだかも知れんのう。

カエルの王子様

水樹　涼子

学生時代、東京の杉並区で下宿生活をしていた。

大学の学生課で紹介されたその部屋は、まさに私のために用意されていた、と小躍りしたくなるような物件だった。

正確に言えば、最寄り駅は中央線の阿佐ヶ谷ではあったけれど、住所の上では「杉並区下井草」であった。通称早稲田通りから一歩脇道に入れば、閑静な住宅街だった。いわゆる「お屋敷街」とまでは言えないが、見るからに古そうな大きな家が所々に散在し、私が借りた部屋も、実はそんな大家の庭に設えられた一戸建ての「離れ」だった。

床の間付きの六畳一間と三畳くらいの板の間、そして小さな台所とお手洗いだけではあったが、ぽっきり一万円という破格の家賃は、当時から貧乏学生だった私には願ってもない代物だった。

「こっちの母屋の方は、築百年は経っているのよ。でもこの離れは、二十年ほど前におばあちゃんの隠居所として建てたものなの。でもそのおばあちゃんも数年前に亡くなって、〇〇女子大は近くだし、おばあちゃんの一人娘、つまり私の主人の妹もあの女子大出身なのよ。だから今は、女子大生限定の入居者斡旋欄に登録しているのよ」

大家の奥さんは、こう説明していた。その「離れ」とか「隠居所」と呼ばれていた私の新しい棲み家は、実に私好みのものでもあった。

一つに、板の間のすぐ目の前の手が届く程の縁先に、白花のカキツバタが植えられていた。その鮮やかで柔らかな翠色の葉と真っ白な花弁との取り合わせが何とも美しく上品で、私はこの花の虜となった。「女君」と秘かにあだ名を付けた。

二つに、六畳の庭前の西側の隅に、大きな百日紅の木があった。木肌の手触りのなめらかさと、その何とも表現しがたい幹のうねり具合には、見る者をちょっとドキリとさせる雰囲気があった。「六じょう」に引っ掛けて「御息所（みやすんどころ）」とでも名付けようかと考えて、ハッと気付いた。何かに似ていると……。

それは作家の三島由紀夫が好きだと書いていた西洋の宗教画のモチーフだった。架刑にされた若く美しい聖者が後ろ手に縛られ、裸体をくねらせながら苦悶の表情を見せている。その感じが当の作家ならずとも何とも言えない気持ちを起こさせる。

しかもなめらかな美肌のこの大木は、初夏になると細やかな葉を夥しいほどに付けて、西側の庭の一角と私の棲み家とをすっぽりと包み込んでしまう。文学部の授業から戻り、大都会の炎天の下を三十分以上も歩いて帰って来た私にとって一歩踏み入れた部屋の中は、「ここは天国」なんていう月並

みなものではなく、翠色の淡い光につつまれたまるで異界の癒やし場だった。

「下井草で思い草」などと意味のないことを、洒落たつもりで短冊に毛筆書きし、床の間に飾ったりした。ただ、梅雨に入ってから一つだけ困惑するようなことに遭遇した。こと、というより、もの、いやモノでもない。

ある初夏の夕暮れ時、篠突く雨が上がり、ほっとして家に戻ると玄関ドアに鍵を差し込んだ。と、その時、少し大ぶりの石ころだと思っていた黒っぽい物体が、突然動いた。ぎょっとした。雨に濡れたコンクリートブロックの半分サイズくらいの褐色が、私の目の前でおもむろに飛び跳ねたのだ。

「ぎゃあぁぁ……」という、厚地の木綿を引き裂くような下品な叫び声を上げかけた。が、かろうじて途中で止めた。

それは、大きなヒキガエルだった。当の本人も自分の姿を鏡で見れば油汗が流れるほどとの伝説もある通称「ガマ」の見事なお姿である。慌てて私は木製の玄関ドアを開けると、部屋の中に飛び込んだ。しばらくは胸の動悸が収まらなかった。幸か不幸か田舎育ちなので、子どもの頃それを目にした経験はあった。だからわかったのだが、でも、こんなことは一回きりの偶然だと思った。思いたかった。

しかし翌日の夕方、学校から戻るとまた、部屋の入り口のある裏庭のドアの前に、例の「ガマ」がうずくまっていた。まるで私を待っていたかのように……。たまらなくなって大家の奥さんに声をかけた。彼女は勝手口から出てきて、いとも涼しい顔でおっしゃるではないか。

「あら、今年もまた出てきたのね。そうなのよ。もう何年も前からうちの庭に棲みついている主(ぬし)みたいなヒキガエルなのよ。死んだおばあちゃんがよく言ってたわ。毎日夕方になると決まって出てくるのは、餌にする昆虫が捕まえやすいからですって」

私は内心、冷や汗ならぬガマの油汗をかきそうになりながら、恨めしくそれを見遣った。

しかし、3秒と持たずに目を背けた。

翌日も同じだった。でも、直視することは極力避けつつ、そのガマがわが部屋のドア前から撤退してくれるのを辛抱強く待った。決して邪険になど扱ってはいけないのだと思ったのだ。

なぜならそのとき私は『カエルの王子様』という小学生時代に読んだ絵本の物語を想い出していた。この話の筋書きは、かつて少女であった人たちなら、大概知っているはずだろう。原作となった伝説があるのかないのか定かでないが、西洋のある国の美しいお姫様が、それにふさわしい花婿を探していた。求婚者は数々いたが、なかなか話はまとまらなかった。

と、ある日のこと。一匹のヒキガエルがお姫様の部屋の窓辺に現れて、「自分に親切にしてくれればきっと良いことがある」と不可解なことを言う。お姫様は内心いやでいやで仕方なくとも、そのカエルに食事を与え、求められるままに一緒に散歩などしながら必死に耐えていた。

しかし、もうガマンの限界とばかりにヒキガエルを自分の手で振り払った瞬間、それはまたたく間に美しい王子の姿に変わった。もちろん王子は悪い魔法使いによって醜い姿に変身させられ、誰かの愛情を受ければその魔法は解けるという、よくある設定の話である。

ちなみにディズニー映画で有名になった『美女と野獣』も

同じパターンの話だろう。当時はまだ映画化もされず、私自身は預かり知らないことではあった。でも私は『カエルの王子様』の物語を思い出したのだ。それで、このヒキガエルがもしやそんな魔法をかけられた人間ならばと、バカバカしくも半分だけ願望を込めて考えてしまったのだ。

もちろん言うまでもなく、このヒキガエルが美しい青年に変わることもなければ、私に初めての「彼」ができることもなく、彩りの少ない学生生活はさみしく終わった。やがて平凡な見合い結婚をした私は、夫になったその人について大した不満を抱くこともなく、今でも幸せに暮らしている。

ただ、夫の唯一の悩みは、夏になると背中といわず二の腕といわず全身に、夥しいあせもができることだった。生まれつき肌がとても弱かったのだろうか。

早めのシャワーを浴びてまだ水気の残る夫の背中に、私は夕方毎回、せっせとあせも用の軟膏を塗ってやるのを役目としている。赤くかぶれて粒々のできた背中は、痛々しいことこの上ない。

そんなときにふと思い出すのは、決してあの下宿時代の小動物でもなく、また、あのたわいない外国の物語でもなく、別の古い日本の伝説である。奈良時代の朝廷に咲いた一輪の大花。病で膿みただれた老人の背中を手ずから洗ってやったという高貴な女性のお話……。

畏れ多くて名前などとても口にできないが、そんなことを夢想してしまう私は、相当おめでたい人間（イキテ）である。ニィッと笑ったその顔こそ、カエルにそっくりだというのに。

生還（絶望の淵から）

高杉　治憲

「俺も今日、還暦になったのか」と、本来なら家族と共にささやかな祝宴をしている筈である日の夕方、溜息交じりに時計を見る父の邦博は息子の夕食を部屋の前まで届けるにもおどおどしながら階段を上った。県庁で総務部長まで務めて五十四歳で勇退後、乞われてK市の副市長を四年間やり遂げ、次期市長候補として出馬要請まで求められた人生は外見には輝かしい経歴の筈であった。が、裏腹に家庭の内情は、誰にも言えない地獄の沙汰だったのだ。

「勇一、ご飯だよ」と、優しく声を掛けても返事すらなく悪くするとドアが開いていつものように殴られる恐怖があったが今日は何もなかったことに安堵して足音を忍ばせ階下に下りた。こうして台所で息を殺して待つ妻の慶子と二人だけの夕食を静かに食べるようになってから二年近く過ぎていた。

河上邦博は三十五歳で係長の時、当時の大井副知事の紹介で慶子と見合い結婚し、三年後に長男の勇一が生まれその二年後に妹の裕美子を授かった。家族が健康で、子ども二人は明るく成績もよく県立高校を経て長男は理系の国立大学への進学をめざした。長女は宇都宮大学教育学部に入学が決まっていた。誰が見ても、羨ましがられる家庭だった。その筈だった。ところが、勇一だけは第一志望校に落ちたことから予備校に入って二浪している内に部屋に閉じ籠るようになっていった。暫くして、最初の犠牲者は妹だった。隣合わせの部屋であるため、音楽がうるさいとどなられ顔を合わせる度に平手で殴られたり蹴られることが増えていたのだった。元々、仲のよい兄妹だったことから、母は裕美子の涙の訴えに、

「辛いだろうけど、お兄ちゃんが来春、志望校に入学できるまでだから我慢してやってね」と、慰めていた。が、勇一の暴力は増々エスカレートし裕美子の顔が腫れあがるほどになり、母娘が邦博に泣きながら訴えたのである。

「何故、今まで俺に黙っていたのだ。勇一に今後、絶対に暴力を振るわないように話すよ」と、父親らしく言い切った。

その翌日、母娘が買い物で外出した中で、父と息子の対面が行われた。邦博は、勇一が小中学生の頃から作文や発表会などで「父を尊敬しています。大人になったら父のような人になりたい」と語っていたことを想い出し、ちゃんと話せば分かるものと説得し始めた。すると、想定外な大反発と共に思い切り殴られて転倒してしまったのだった。

「うるせぇ、てめぇにそんなことを言われる筋合いはねぇ。裕美子が俺を馬鹿にしたから殴ってなにが悪い。余計なことをすれば、また家族全員ぶん殴るぞ」

息子に何が起きたのか、気が狂ったのではないか。自分に何が起きようとしているのか、気が動転していて何も考えら

れなかった。帰宅した妻と裕美子に顔の傷を見せて事の成り行きを話すと二人は恐怖に慄き抱きあって泣くばかりだった。

そして、次ぐ日から邦博が留守の場合に勇一の暴力の捌け口はエスカレートし、やがて家族三人が代わる代わる被害者になっていった。日を置かず父は知り合いの信頼できる精神科の医師に相談し診断を依頼した。すると医師はカウンセラーと偽って家まで出張診断してくれた。結果は予想通りうつ病の診断で、過度な劣等意識から生じた孤立感を深めているので家族はどんなに辛くとも逆らわず受け容れることを指導された。また、裕美子を大学近くのワンルームの貸マンションに転居させ、母の慶子の逃げ場とすることを示唆され、精神安定剤を処方された。

そんなある日、ぼんやり見ていたテレビのワイドショーで惨たらしい事件が取り上げられていた。大阪で、息子の家庭内暴力に耐えかねた父親が息子を金属バットで殴り殺したというのだ。しかも、その父親は公務員出身の団体役員であった。(似ている、今の自分はこの事件の父親と同じ境遇だ)と、邦博は、このままでは自分達が殺されるか、勇一を殺すしかなくなるのではないかという切迫した自意識に追い込まれていった。

その数日後、勇一の好みの昼食をそっとドアの前に置いて玄関の施錠をして外出し市街地のマロニエ並木の通りをぼんやり歩いていると、

「河上副市長、暫くでした」と、スポーツ刈りの精悍な男性から声を掛けられた。よく見れば、それは自らがK市の副市長現職の折に体育祭イベントで協力してもらった酒主徹だった。彼は元S学院高校生時代に国体のボクシングバンタム級で三位になりその後、プロボクサーになって日本チャンピオンにまで上り詰めたプロアスリートだ。引退後、永年の夢が叶ってこの近所で古い建物を借りてボクシングジムを開設したという話から、以前読んだ地元紙の記事を想い出していた。

「ジムはあそこに見える倉庫を改造した建物です」

その一階は、プロを目指す若者やS学院ボクシング部から委託されて後輩部員を指導しているリングであるという。二階は健康と美容や減量を希望する中高年者や若い女性と主婦のボクササイズフロアと説明された。

「よかったら、見て行きませんか」と勧められるままにジムに足を向けた。少ししてマスクをとった邦博の顔を見た酒主は、それが殴られた傷であることを直ぐに気付いていた。練習中の溌溂と躍動する会員たちの動きに圧倒されながらも、邦博の胸中には全く別の発想が浮かんでいた。そして、帰りしな、思い切って酒主トレーナーに事情を説明して相談すると、「失礼ですが、私が想像した通りでした。お辛いでしょうが、お役に立てるかもしれない。明日から、ストレッチ体操とボクササイズから始めましょう」と、話がまとまり、週四回体操をしながらの練習が開始されたのである。酒主が考案したその特訓メニューは、『上手に殴られ、被害を最小限にする避け方』から始まった。三カ月ほど経過すると、第二クールでは両手の拳を額の両側に構え相手の攻撃をグローブで受け止めて防御しながら相手の動きをしっかり見据えて、いつでも反撃できる構えを習得した。次いで頭を左右に振って相手の胸倉に飛び込んでから直ぐに二、三歩後退する動きを何度も何度も繰り返して行った。これは、家族の命を守る

ためと共に息子を殺してしまうことを回避するための正にぎりぎり命がけの練習であった。

暫くしたある日、勇一から指示された買物が気に入らないと、執拗に殴られることが起きた。この時、邦博は両手で顔面をガードして耐えていた。すると、これまで殴られるままだった以前と違う変化に勇一が気づいた。

「てめー、何しているんだよー。その構えはなんだ」といって今度は自室から木製バットを持ち出して殴りかかって来た。もはや、これまでかと思った次の瞬間、邦博の身体が無意識に反応した。相手の身体に身を寄せると、サンドバッグで練習した右フックが勇一の顎に命中してしまい、まさかのノックアウトだった。その刹那、頭を過ぎったのは、勇一が復讐してきて今度こそ殴り殺されるという恐怖だった。勇一はショックからか暫くの間、床に座り込んだまま荒い息をして黙っていた。

「勇一、ごめんな。殴るつもりはさらさらなかったが、昔、高校と大学で剣道部にいたものだから、咄嗟の時に防御する動きが出たのかもしれない。許してくれ」

「うーん、てめーよくも・・うー、よくも・・・」と、勇一は呻いていたが、少し間を置いて小さな声で呟いた。

「親父は、本当はこんなに強かったのか。これまで、それを俺に隠して殴られるままにしていたのか」

それが独り言なのか、父である自分に語り掛けているのか定かではなかった。が、少なくとも度重なる暴力に何らかの歯止めが掛かっていることを感じた邦博は、様子を見て慎重に話題を変えた。「今晩の夕食はすき焼きにするけど、下で二人一緒に食べないか?」と、断られるのを承知で誘ってみた。勇一は未だ夢の中から覚めていないらしく、無言でゆっくりと壁を伝って二階の自分の部屋に戻って行った。

邦博は、このハプニングがもし凶とでれば復讐されて今度こそ殴り殺されると考え、慶子にメールで「俺が電話かメールするまで裕美子の処にいなさい」と伝えてから、夕食の準備を終えて時計を確認した。夕食時間の午後七時丁度に、二階のドアが開いて階段を下りる足音が聞こえてきた。緊張して、次の展開を待った。すると、思いも掛けなかったサプライズが起きた。

「俺、下で飯を食うから」(え、どうして?)

「じゃ、その間、父さんは外出してこようか」(その方がいいだろ)、「いや、親父と一緒がいい。すき焼き一緒に食うよ」(え、ほんとうに本当か?)それでも邦博は未だ信じられず、再び襲って来るかも知れないと心の中で防御の構えを崩すことはなかった。しかし、二年ぶりの父子の夕食は何事もなく終わった。そして、勇一が先に口火を切った。

「何故か分らねぇけど、親父は何か今までと違う。どうしてだ?」と問われて、旧知の元プロボクサー酒主徹との再会で、彼のジムに通い、いつ殴られても対応できる心身を磨いてもらったことを正直に説明した。すると、聞いていた勇一は以前の息子の表情で穏やかに父の目を見て話しかけてきた。

「ふーん、俺、もう大学に行かなくていいよ。親父と一緒にジムに通って身心を鍛えながら、好きな建設関係の会社に就職活動するよ」何かの魔力から解放された父と息子がこの世で初めてお互いの存在を認め合った瞬間だった。

勇一のような鬱病による閉じ籠りは、日本全国に大よそ六十万人存在しその多くは家族を絶望に陥れているという。

葡國の風

安西　悠子

日光連山から吹き来る香ぐわしい五月の風は爽やかである。

しかし、その朝のテレビの画面は、恐ろしい事故を写し出している。

遥子（ようこ）は、愕然とした。夫、恒之（つねゆき）の宿舎、ロンドン郊外、イーリングにあるアパート火災の惨状のニュースである。スプリンクラーも無い老朽化した古い九階建てのアパート全焼の報である。テレビは更に、相当数の死者がでている模様、と報じている。

遥子は、直ちに、恒之の勤務する会社の東京支社へ電話するが、詳しい状況はわからないとの事、恒之はじめ、日本から派遣されている五人の社員の安否は判らず、最悪の状態であることを繰返し述べるだけで埒があかない。すぐに、ロンドンに馳けつけたい。が、遥子には、危険な病状にある恒一郎がいる。恒之のたった一人の肉親、父、恒一郎が危篤状態にあるのだ。度重なる人工透析で命を繋いでいるのだ。医者から、最悪の事態が間近であることを宣告されているのだ。心は、ロンドンに飛んでいても、身動きがとれぬ。ロンドンの本社からの連絡も〝生死不明〟との言葉の繰り返しである。あまりの惨状に、遺骨の識別さえ出来ないとの事である。

やがて、恒一郎が、病に苦しみながら昇天した。必死に看病した甲斐もなく、遥子は、日本で、たった一人になってしまった。

淋しい恒一郎の葬儀も終えた。四十九日の法要を済ませると、遥子は、その日のうちに成田を飛び立った。ロンドンの何処かに、この現世の何処かに、恒之が生きているように思えるのだ。

ヒースロー空港に降り立った遥子は、イーリングの焼け跡に向った。先頃、遥子は、恒一郎の容態が安定していた時、ほんの僅かの時間、ロンドンの本社に勤める恒之を尋ねたことがあった。その折は、バンデンプラスプリンセスの小型の赤い車で出迎えてくれたが、もう、そんな事は無いのだ。

ヒースロー駅から地下鉄に乗った。ボストンマナーの駅で降りると、大通りを横断し、赤いポストのある小路に入る。そこにアパートがあったのだ。焼け跡は、まだ、立入規制の、ブルーと白のテープが張り繞らされている。この焼け跡の爛れた瓦礫の中に恒之は閉じこめられているのかと思うと、遥子は涙が溢れて眼前が真暗らになった。

遥子は、逃げるように再び、地下鉄に乗って、ヒースローに戻った。ここから、ポルトガル国営機に乗った。イーリングの宿舎の焼跡に苦しむ恒之の姿を打消したかった。過ぎ

去ったあの日、恒之が連れて行ってくれたポルトガルに、恒之の姿を求めた。恒之が現われるというような事は、あるわけが無いのは、はっきりとわかっているのだが、やり場の無い悲しみは、全身を震わせた。

ガタガタと揺れる小型機は、リスボンの空港に着いた。この前、訪れた折は、恒之と一緒にタラップを下りたのだ。

リスボンの大通りは、今日も、美しい。アズレージョに敷きつめられている。

ホテルは、リスボン警察署の斜向いにあった。

翌朝早く、ホテルを発った遥子の車は、市街地を馳け抜け、コルク樫の森を通る。なだらかな丘を過ぎ小さな村に着いた。

大樹が繁る静かな集落の中に、突然、壮麗な石造りの伽藍が現われた。バターリヤ修道院だ。入口の銅像は、ジョアン一世王子である。隣国、スペインと戦って国を護ったのだ。修道院の壁を覆う石は繊細な唐草風のアラベスク模様と天使の姿が刻まれている。礼拝堂の中は、昼間なのに薄暗い。ジョアン一世と王妃と、その息子、エンリケ航海王子の柩が安置されている。正面の壁は高い。ステンドグラスが嵌め込まれている。突然、雲の切れ間から陽光が射し込んだ。灰色だった礼拝堂は、赤や青、緑、黄など虹の色に覆われた。祭壇のキリストの像を鮮やかに浮び上らせた。遥子は、「天国の色だ」と驚いた。そして、円型の柱に支えられた廻廊の向うから、「遥子」と、呼びかける恒之の声を聴いた。

バターリヤ修道院に心を残したまゝ、車は走った。なだらかなオリーブ畑を走り抜ける。

「ファティマに着きました。」

運転手の声にうながされて車を降りる。今日もまた膝行の祈りの人々が、頭を垂れて静かに礼拝堂へ進んで行く。この前、恒之に連れられて来た時、遥子は、心ない言葉を発してしまったのだ。膝行して進む人達が居た。それは、深い信仰心の為、立って歩行しないのだ。それがわからぬ遥子は、恒之に、

「ファティマは、私の様に脚の不自由な人が多いのね。」と言った。

恒之は、小さく笑って、

「膝行しているのは、肉体的に脚が悪いのではなくて、神への信仰からなのだよ。」

と、教えてくれた。

そして、教会の事務所に寄って、日本語のパンフレットをもらって来てくれたのだった。ファティマの教会に関するものである。

それによると、

〃ロザリオの聖母のご出現〃という見出しで、次の様に書かれていた。

〃一九一七年五月十三日、三人の子供達、ルシア、ディ、ジェズミー、十歳・フランシスコ、九歳・ジャミンダ、七歳・は、羊の番をしていた。正午頃、いつもの様にロザリオの祈りを終えた時、突然、稲妻の様な激しい光が現われた。閃光が走り、ひいらぎの木の上に、まばゆいばかりの貴婦人が、ロザリオを手に持って立っておられた。貴婦人は、三つの予言をなさった。その後、二つの予言は現実となって現われた。最後の一つは、重大な事なので公表することがため

らわれた。二人の羊飼いの子たちは他界し、最後に残った一人は、三つ目の予言を伝えることに躊躇したという〃

純粋な心、深い信仰の上におこった奇蹟である。ロザリオの聖母の聖地、ファティマで神に祈りを捧げるため、大勢の人々が巡礼するのだ。

ファティマを後に、車は、平坦な道をリスボンへと向う。静かな田園が途切れると、コルク樫の森が広がる。農家の屋根が見え隠れする。通り過ぎようとしたある家の庭先きの緑の繁みの中に、赤い葩を見た。名も知らぬ花であった。その赤き葩を眼にした一瞬、呼吸が止った。遥子には、その赤い花は、チュウリップの葩に見えたのだ。恒之の姿がオーバーラップした。いつの日だったろうか、恒之が、まだ、東京支社に勤務していた頃、少しの休暇がとれたから、と、遥子を室生寺に連れて行ってくれたことがあった。室生寺の桧皮葺の勾配の美しい五重塔に心を奪われながら言葉もなく振り仰いでいた二人であった。突然、恒之は、

「遥子、何の花が好き?」

と、問うた。

遥子は、深く考えもせずに、突嗟に、

「チュウリップ」

と答えた。室生寺の五重塔を見上げながらの質問だから、梅とか桜とか藤の花とか答えればよかったのだろうが、遥子は、育ててくれた祖母の大好きだった花の名を答えてしまった。恒之は、

「随分、散文詩的な花が好きなんだな。」

と、笑った。遥子も、場ちがいの言葉だったかな、と不安になった。しかし、それから、今市の恒之と遥子の家の狭い庭の片隅みに、毎年、赤い葩や、白い葩の、数本のチュウリップが美しく咲いた。

今、ポルトガルの農家の庭に咲いていた名も知れぬ赤い葩を見た瞬間、あの赤い花は、無口な恒之から、遥子へのいたわりの想いであったことに気付いた。日常の忙しい時間に押し流されて遥子は、永い時間、恒之の心に気付くこともなく過したことが、今更のように悔やまれた。チュウリップは、開花後、梅雨時に球根を掘り起こし、再び、紅葉の候に花壇に植えなければならない。手数のかゝる花なのだ。

過ぎし日に思いをめぐらせながらの道中は夜になっていた。リスボンに戻った遥子は、かつて恒之と訪れたファドの店に行った。夕闇が訪れ、店の灯は暗く悲しげにゆらめいていた。古い木の枠に区切られた小窓からは、海が穏やかにうねっている。灰暗い舞台からは、うめくような低音のメロディが流れ胸に滲みる。

「サウダーデ」

思わず遥子は呟く。亡き人を慕う悲しみの言葉である。

今市の大空を乱舞する晩春の風に、遥子は、葡国の風の薫りを感じた。その風の中に恒之の幻影を見た。この世に居ない恒之が、宙から手を差し延べている様に思った。その手に縋ろうとした遥子の体は、木のベンチから転り落ちた。遥子は、次第に意識を失ってゆく。

おどり場

島田トミ子

ぼんやりと眼が覚めた。
九月も半ばになるのに蒸し暑い空気が肌に絡まる。何時だろうか、人の声が聞こえない。生活の雑音も響いてこない。時折救急車のサイレンの音だけが静寂を破って流れていく。
上瞼に力を入れて眼を開け、枕元の右側にある目覚まし時計をやっと見た。午前十時を少し過ぎたところだ。
部屋の隅にある低くて丸いテーブルの上には、朝ご飯を食べた跡が残っている。
みんなが仕事をしている時間なのに、今日も私だけがこうして取り残された。娘のかずえはどこへ行ったのか。きっといつものように外で遊んでいるに違いない。
もう少し眠ろう。どれだけ寝ても眼をつむるといくらでも眠れる。覚醒しているのは眼の表面だけ、脳の真髄はうつらうつらとしている。
すぐまたまどろみの中へ入った。夢の中、真っ白な雲の道を歩いている。右へ行くかそれとも左か、坂道を上るか下るか。これまでの荒れた生活が、これから行く道を迷わせる。後悔の足あとを見ると、攻撃したい相手がいないことにも気づく。攻めるか反省か複雑な心情になっている。
「愚痴はもうやめよう、すでに過ぎたことだ」
話すのを止めるとそれを追うように、
「語り始めたのだからもっと喋れ。誰にも遠慮はいらない、もっと吐き出せ。喋れよ、話せよ」ともう一人の私が心の奥底を開かせようと挑発してくる。二人の自分が鬩ぎあっている。
「私は男運がないんだ」
男運がないのではない。人間を見る目がないという方が適確だろう。
最初の結婚は二十四歳、二度目は二十八歳のとき。偶然どちらの夫も二歳年上であった。最初はわずか十カ月で協議離婚、マザコン男だった。二度目の夫は結婚三年目にアルコール性の肝臓病に罹り、入院半年足らずで、一歳の娘と私を残してあっけなく旅立った。
これは現実なのか、なぜ神様は私にばかり試練を与えるのだろう。その衝撃を受けて立ち上がれないでいる。何も考えられないし、やる気も起きない腑抜けだ。
振り返っても仕方がないのはわかっているのだが、こうして昼間一人でいると過ぎていったことばかりが頭の中を駆け巡っている。
時々誰かがアパートの部屋のドアをノックするが一切反応しない。もちろんドアは施錠したままで開けないから、誰が来たのかもわからない。ただ、トントンという無機質な金属

音だけを耳で確かめているだけだ。
布団の中が一番幸せだ。誰からも文句は言われない。安心して気持ちも身体も投げ出していられる。今寝ている六畳一間の部屋は、戸籍上何の縁もゆかりもない三人目の男性の部屋、そこへ転がり込んでいる。
アパートは栃木の県北の街、二人目の夫の出身地にある。葬儀のあと半年近く経ったころ、舅がかずえの養育のためにと、百万円を持って来た。受取人が父親となっている生命保険に入っていたらしい。証書も見たことがなく、受取人名の変更もしてなかったようだ。その金もいくら質素に暮らしても養育費と月々のアパート代、生活費でみるみる減っていく。
何か仕事を探さなければと、子を背負い髪は振り乱して化粧っけのない女が必死でハローワークへ通ったが適当な仕事は見つからなかった。
疲れ切った顔でやっと歩いているような哀れな私を見ていた男がいた。隣の部屋に住む章夫であった。
章夫は時折、コンビニでおかずを買ってきてくれたり、子ども向けの駄菓子を持ってきてくれることもあった。かずえを可愛がってくれたし、かずえも章夫になついてきている。
いつも薄緑色の作業着姿の章夫は、建設現場の足場を組んだり解体する仕事をしていると言った。私より三歳若かった。語調も接するときの態度も柔らかく、外見とは大きくかけ離れていた。これまでの二人の夫たちとは性格も考え方も、物腰も違ってまるで逆の人に見えた。私も緊張感を持たず、思ったことを気軽に口にすることができた。
「部屋代が大変だろう。いっそ引き払って、仕事が見つかるまで俺の部屋にいたらどうだい」
「そんなの悪いわよ」
「元気になるまでだよ、休養も仕事のうちだ」
本当は何でもいい、誰でもいい、寄りかかるものが欲しかった。思いがけない章夫の言葉に吸い込まれるように心を決めた。
大家が、「九月半ばだけど十月分までは払って貰うよ」というので仕方なく応じた。
結局、アパートの二〇一号室は解約した。十月の日曜日に隣の二〇二号室へ移った。荷物は小ぶりの整理箪笥と薄い布団一式、台所用品少々だけであったから、移動の作業は半日もかからずに済んだ。
幼い子が一人で時々近くのパチンコ店の中や店先で遊んでいて危険だとの噂がたち、アパートの近くに住む民生委員の知るところとなった。
トントン、トントン、誰かがドアを叩いているがいつものように響く音だけを聞き、やがて人気がなくなるのを待つ。この日はドアを叩いた人が帰った後、ドアの下に茶封筒が半分顔を出しているのが見えたのでそっと引っ張ってみた。
『山口伸子様　本日お伺いしましたが残念ながらお会いできませんでした。お身体の具合はいかがでしょうか。部屋が変わったのですね。かずえ様と二人の生活のことでお話したいと存じます。場合によっては親御さんにご連絡をしようかとも考えていますがいかがでしょうか。返事をいただきたいです。また伺います。』
市役所の福祉課の職員と民生委員であった。担当者の名前と電話番号が書いてあり、民生委員の名刺も同封されていた。
親に連絡するかもしれない、面倒なことになりそうだ。気がかりではあった。それでも何かを始める力が出ず昼も夜も

毎日、布団の中にいた。行動する気力が失せていた。
狭い流しとガスコンロ、章夫はそこでインスタントのラーメンや簡単な料理を作ってくれた。明日こそ洗濯でもして役に立とうと思うが、朝になるとやっぱりできない。それどころか床の中で瞼を合わせると、起き出し洗濯機の前で衣類を区分けしスイッチを押している自分の姿が見える。頭の中ではしっかり働いている。行動のイメージだけが離脱している妙な感覚、眼を開けるとなんだまだ寝たままじゃないか……。その繰り返しの日々。

「伸子、お母ちゃんだよ、お米を持ってきたから開けて」
平日の午後、郡山から母が来た。さすがに、ドアを開けざるを得なかった。市役所へ寄ってきたと言った。
「かずえのためにもこのままじゃしょうがない。家へ帰ろう。福祉の人も親元へ帰った方がいいと言ってたよ」
「帰らないよ私は。ここがいいんだから」
母と何度か同じ会話を繰り返したあと、
「今付き合っている男の考えはどうなの？　泣くのは女だよ」
母は質素すぎる部屋を見渡しながら呟くように言った。
「大丈夫だよ何とかなるから。もう帰って」
「いつでもそう言うね、後になって困るくせに。今度はお父ちゃんと一緒に来るから」
母は強く言い放し十キロの米を置いて帰っていった。米だけは非常にありがたかった。
母が帰ったあと、私は入口に細工をした。内側のドアノブに荷造り用の白いビニールの紐をぐるぐる巻きにして十センチくらいの輪を作った。その一方の壁に大きいフックをボンドで貼り、輪になったビニール紐を引っかけた。鍵をかけなくてもドアは完全には開かなくなった。章夫とかずえのときだけ輪っかを外せばいい。
二週間後、再び母がやって来た。完全には開かない五、六センチの隙間から母は声を落として言った。
「お父ちゃんは、もう子供じゃないから本人の意思に任せるって言ってる。牛や馬じゃああるまいし首に縄付けて引っ張っていけないからね。でも私は心配だからやっぱり来たよ。よーく二人で話しな。何かあったら帰っておいで。市役所にはそう報告して帰るから」
ドアを開けようとゆっくり入口に近づくと、隙間から、母が肩を落として帰っていく後ろ姿が見えた。からだ中に溜めこんでいた涙があふれてきて止まらなかった。「母ちゃん、ごめん」自然に頭が下がった。
晩夏から秋へ時が流れた。冷たい風が吹き始めたころ、かずえの三歳児健診の通知が届いた。洗いたての作業衣を着た章夫が健診に連れて行ってくれた。
「ちょっと小柄だけど成長は心配ないそうだ。いっぱい話しかけるようにと言われた」
章夫は母子手帳を広げながら、顔を崩して嬉しそうに私に報告し、ひと息つくとこう言った。
「戸籍もちゃんとしなくちゃなあ。年明けに郡山へ行こう」
年末の陽ざしが南の窓から差し込む。私は布団から這い出してドアのビニールテープを切り落とした。そして窓を開け、布団を干した。窓越しの新鮮な景色を見ながら、「ゆっくりでもいいから、前だけ向いて生きよう」と誓った。

還る

鈴木あぐり

午前十時、電話相談員をしている史代の一日が始まった。留守番電話を解除するやいなや電話が鳴り、史代は身を引き締めた。

「こころの相談室です」

「……」

静まり返った空気のなか、微かな吐息が漏れたが、言葉は発しない。

「お話できるようになりましたら、またかけてくださいね」

二十八秒間の無言電話である。

間を置かず二本の電話が。いずれも子育てに悩む母親からのものだ。誰かに聴いてほしい、わかってほしいという、ワンオペ育児をしている様子がうかがえる。

窓の外はいつのまにか雨が降っていた。向かいの道路の端、叢のなかに捨てられた空き缶を雨が叩いている。

三十分を過ぎたころ再び電話が鳴った。

「こころの相談室です」

「こんにちは。ねぇ、おねえさんいくつ?」

「申し訳ございません。そのような質問にはお答えできないことになっております」

「わかったアラフォーだね」

「この電話は、悩みをお聞きするのが目的でして、相談員のプライバシーに関することをお答えするわけにまいりません。どうぞご理解ください」

「うるせぇー気どるな! ババァーが」

捨て台詞を吐いたかと思うと、ガチャンと切れた。史代はどんな電話でも、冷静にと自身に言い聞かせてきた。だが「捨て台詞」のなかには、得体のしれない怖さを感じるものもある。そんな時は全身が泡立つ。これに比べたら卑猥な電話の方がましと感じてしまう。慣れは怖い。初めて卑猥な電話を受けたときは胸が早鐘のようになったものである。

そんな電話を長年受けていると、一体この人の生い立ちは、来し方はなどと思いを巡らせてしまう。特に同僚たちの間で「六年選手」と呼ばれる男性は、その名の通り、六年かけ続けてきていた。卑猥なことを言い、相手の反応を楽しむタイプと違い、心の闇の深さはいかばかりかと思いやる。

長い梅雨が明け、季節が廻り猛暑の夏も終わった。夏の火照りを内包しながらも朝夕しのぎやすくなってきた。

九月の二週目の週末、史代は午後から旧知の友人、景子と彼岸花を見に出かけた。

田園を縫うように流れる川の両岸を、夥しい彼岸花が群生している。川の中の養分を十分吸い育っているのだろう、

三十センチほどの花茎は、どれもしっかりと根を張っているのが見てとれた。ふたりは美しさに息をのみしばし見入った。

独特な形状をしているが、この花はいくつもの名を持つ。景子に別名を知っているかと尋ねると、

「曼殊沙華でしょう。あと天蓋花と聞いたことがあるわ」

「さすが景子さん。あとね、死人花と捨て子花、他にもまだまだあるわ」

「こんなにわたしたちを癒してくれる花なのに異様な名前よね」

「ほんとうにね」

史代は気をとり直して、出がけに淹れてきたアイスコーヒーを二つのカップに注いだ。

一息つくと周辺を散歩した。刈り入れ前の稲穂が重たげに弧を描き、今年の豊作を約束してくれている。

三時を回ったところで帰路に着くと、景子はわが家には上がらずに帰った。

ほどなくしてインターフォンの音が響いた。小さな画面をのぞくと、新聞の集金員の姿が映しだされている。

「〇新聞の集金のものですが」

史代は思わず「あっ！」という声が漏れそうになった。聞き覚えのあるかすれ声は、「六年選手」に酷似している。こんなことがあるのだろうか。史代は相手に悟られまいと、呼吸を整え財布を手に玄関ドアを開けた。

「あ、はい、二千円のお返しです」

先月は史代の留守の時に来た。先々月はと史代は記憶の糸を手繰り寄せた。先々月は庭仕事をしているときに来たのだ。そのため声を意識しなかった。インターフォンと言う機器を通した声の方が、あの声似ているのだ。間違いない。あの声の主だ。

果たしてあの集金員の男性は気づいただろうか。いや気づいたに違いない。

一週間後「六年選手」からの電話を受けた。史代は身構えながらもいつもの習慣で、受話器を耳から離し気味に持った。だが今日の電話はいつもと違っていた。

「ボクは電話依存症みたいで、やめられないのです。どうしたらいいでしょう」

「そうですか、お悩みなのですね」

「何度もやめようとしたのですが、しばらくするとまたかけてしまいます……」

「日常生活のなかで好きなことは何ですか。趣味とか」

電話が切れ単調な音だけが耳に虚しく残る。史代は自分の的外れな対応に落ち込んだ。今度かかってきたらなんと言おうか。明日にでも一年先輩の森さんと、ロールプレイイングをしよう。

九月末になり、ホットコーヒーが無性に飲みたくなった史代は、豆を買いに出かけた。焙煎だけでなくカフェコーナーのある店に着くと、鼻孔をくすぐる香りに誘われて、コーヒーを注文した。カフェテラスに出ると先客がいた。〇新聞の集金員の男性だった。

「こんにちは。休憩時間ですか」

「はい、週に二、三度来てコーヒーを楽しんでいます」

「コーヒーがお好きなのですね」

「無類のコーヒー好きでして、ずっと京都にいたせいでしょ

うか。暇さえあれば喫茶店に入っていました。ではお先に」
　自分の話が終わると足早に帰った。
　十月に入るとまもなく「六年選手」から電話がかかってきた。
「どうしても電話がやめられず、またかけてしまいました。六年前に大切なものを失い、喪失感のなかで受話器を握ったのが始まりで、以来やめられずにかけています」
「悩みはないのにかけてしまうのですね」
「そうです。心の相談だからどんなことでも内面を吐露してもいいのですよね」
　確かにそうだが、作話や卑猥な電話はタブーなのは暗黙の了解の筈。史代は相談員失格としてもどうしても伝えたいという思いが抑えられなかった。
「電話がやめられないとのことですが、もしかして卑猥なことは話されていませんね」
「……」
「そういう電話をなさる方は、ご自分のストレスや欲求不満を解消できるかもしれません。でも相談員をセクシャルハラスメントにさらすことになりませんでしょうか」
「……」
　タブーを破ったのはわたしかもしれないと史代は思った。
「すみませんでした。ほんとうに」
　史代は戸惑った。だがまたかけてくださいとは言えない。
「わたしこそ申し訳ございません。相談員失格ですね」
　静かに電話が切れた。
　史代は後味の悪さが拭えずに悶々とする日々を送った。気分転換に美味しいコーヒーでも飲もうとカフェに出かけた。
　もしかすると集金員の男性に会えるのを、微かに期待をしていたのかもしれない。
　カフェテラス席に着いた。両隅にパンジーが植えられた素焼きの植木鉢があるだけで、誰もいなかった。コーヒーの酸味だけが舌に残った。
　粛々と電話を受け続けたある日、「六年選手」から電話がかかってきた。
「今日が最後の電話になります。今までご迷惑をおかけしました」
「いいえ、わたしこそ何の力にもなれず心苦しく思っています」
「そんなことないですよ。明日、京都に還ります」
　いつになく晴れやかな声だ。
「どうして急に？」
「前から考えていました。わたしは以前、小学校の教師をしていましたが、わけあって京都から逃げてきました」
「そうでしたか。再出発でいいのですね」
「母の農園で、ブルーベリーの栽培をします。収穫したらジャムにして送ります」
「気持ちだけいただきます。それに物をいただくのは規則違反でして」
「では自宅の方に送りますよ」
　あまりにもあっけらかんとしていて、史代は返す言葉を失い口ごもった。

山人の村

相馬　龍久

峠を目指し名もなき社（やしろ）の裏手の道を登りだしたのは、日が昇りはじめたころだった。まだ夜露も晴れきらぬころで、登り口の樹木に覆われた廃屋同然の社はただならぬ湿気に覆われていた。忘れられた古道のような道からは麓（ふもと）を見渡す所もなく深い樹林が続いていた。秋分の頃だというのに麓は少し汗ばむようだった。小一時間も登ると爽やかな乾いた空気とつくつく法師のなき声に包まれていった。

峠に立って振り返ってみると、よくもこんな入り組んだ樹海を登ってきたものだと感心した。標高は低いのだが海辺から歩いて二日はかかりそうだ。はるか遠くに海が見える。少ししか見えない水平線ほど無限の想像力を掻きたてるものはない。絵に描くとしたら、たっぷりと濃い緑の絵の具をぶ厚く塗った油絵になるだろう。そして淡い水平線を遠くに描こう。しかしその想いに浸っている時間はなかった。登りに時間を喰ってしまった。私は焦っていた。峠を越えて行く予定の村までどうやら日没の時刻にかかりそうだった。来た道と同じような樹海の中を縫うように走る道であった。一層濃い深緑の入り組んだ谷が行く手に待ち構えていた。

この忘れられた峠には何塔かの石積みや風化した石塔などがあった。昔はここで物々交換でもしていたのであろうか。そん事を思いながら急いで昼飯を食べた。そうしている間にも陽は西の沈むべき稜線めがけて傾きはじめていた。

嫌な予感がした。このまま引き返そうかと思った。しかし根拠の無い思いを不合理的と断じ峠を下りはじめた。

私は父と大喧嘩をして家を飛び出して旅に出た。軽い山あるきをしようと思って支度をしてきた。学生の私は気ままだった。六十年安保を前に世の中は騒然としていた。旧体制への反発であった。その構図は我が家にもあった。代々庄屋の家を父は継いでいた。それも祖父が戦前に他界していたため家父長制のもと長男相続であった。立派な門構えもあり家の外も中も旧弊そのままであった。父はこの家を無事私に継がせる事だけを考えていた。仕来たりを忠実に守る事だけを考えていた。小さい頃、何を訊いても「昔からそうなっている」「神様の決まり事だ」としか答えなかった。高校生になったころから理由なき反抗が始まった。とにかく古いものは反発しなければ気が済まなかった。戦前の否定に止まらず古典的なものまでも批判的な目で見るようになっていた。つまり日本的なるものは全部否定した。父と話をする度に口論となった。

母は毎日、家の内外に祭ってある神棚や祠そしてお稲荷さんに仏さんへと供え物をしたり水をあげたりしていた。旧家には古い仕来たりがはびこっていた。我が家は寺の檀家、神社の氏子それぞれの総代も兼ねていた。訳も分からなくなっ

た風習や仕来たりを日々、季節ごとに忠実に行っていくことに私は反感を覚えていた。日々学生同士の青臭い議論のなかで不合理に反発していた。

どうやら道に迷ったらしい。バス停の小屋で寝ようと思って寝袋を持ってきたし非常食と昼飯のおにぎりを一つ残しておいたので最悪の状況ではなかった。まだ日没までは時間はある。沢に沿って下り、どうにもならない時は日没前に安全な寝ぐらを探すことに決めた。

気のせいか先ほどから動物の気配のようなものを感じている。熊か猿かと思い大きな声を出して威嚇した。いよいよ焚き火の支度でもしようと思ったとき太鼓のような音が微かに丘の向こうから聞こえてきた。私はいそいで丘に登る。遥か遠くに人家が見えた。なんとか日没まで行けそうだ。

薄暮となった。闇となってはどうにもならない。

篝火が炊かれていた。私は吸い寄せられるようにその村へと丘陵を下って行った。幸いなことに陽が沈む方向にその村はあった。吸い寄せられるように村へ急いだ。最後に坂を下って行くと大きな石があり、その横を通って行くと篝火が焚かれている広場にでた。

老婆が私を見つけてやってきた。

「おやおや、こんな時間にどうなすったかね」

「道に迷い、この村に降りてきてしまいました」

「今日は丁度お祭りじゃから、お泊りなさるがよろしい」と言った。そして祭に参加するように勧められた。とにかく泊めてもらいたいし断わる理由もなかった。

「お疲れのようだからお風呂にでも入って少し休みなされ」老婆に意味深に勧められた。

五右衛門風呂だった。湯気が充満していて熱い霧のなかにいるようだった。

中年の妖艶な女性が白い浴衣で入ってきた。

「背中をお流しいたします」

私は気が動転した。

「いえいえ結構です」と断ったが、ここからもう祭りは始まっていますと毅然と言われた。

「仕来たりです」ときっぱりと言われると、素直に従うしかなかった。

私は前を隠していたが両手を解かれ、そこも洗われた。まるで身体検査をされているようだった。風呂からあがると女はかしずいて私の身体を拭き浴衣を着せた。

「お着物はお預かりしてお洗濯いたします」

靴も荷物も預かったと言われた。もう逃げられないという事か、少し違和感を覚えたが、冒険心というか興味本位でこの祭りに参加する覚悟を決めた。

「このお祭りの間、私がお世話させていただきます」

その女は畏まって言った。

軽い夕食をすすめられた。そして祭りだからと、にごり酒を飲まされた。その女は乳母か付き人のように甲斐甲斐しく世話を焼いた。私は酒が入って饒舌になっていた。女はそれとなく私の出自や生い立ち、そして今の様子など聞いてきた。注がれるままに酒を飲み私は問われるままに上機嫌で答えた。

どれほど時間が経ったであろうか、時間の感覚が無くなり虚ろになったころ鼓と鈴の音が聞こえてきた。

私は鬼の面を付けさせられた。村人に顔を見せてはならな

いと言われた。私は社の奥の掛け軸の前の床几に座らせられた。掛け軸は二本対になって掛けてあり、一幅は読めない文字ばかりで親王の字だけ読めた。もう一幅は宮廷のような高貴な建物と貴人が描かれていた。

二階建ての家ほどある大きな石のまえに社があった。その前の広場で神楽が舞われていた。若く美しい三人の女性が幽玄に舞っていた。舞が終わると翁のような面をつけた者が謡曲のような節回しで謡い舞った。やがて翁が静かに去ると、おかめとひょっとこが出てきてひょうきんな身振り手振りで踊りだした。鉦や太鼓が早く激しくなり卑猥な動作をするようになった。そうなると見物の村人も入り乱れて踊り広場は大騒ぎとなった。おかめとひょっとこが鬼の面をつけた私を広場の中心へと誘い出した。私は祭りの激しい興奮の中に入っていった。教わった単純な手振り身振りで踊りの中心に入ると、祭りは最高潮となった。

体中から躍動感ある力が漲り、それを放出するように踊った。それは村人には神の力が乗り移った鬼が踊り狂っているように見えただろう。

どうやら大きな石がご神体のようであった。祭りが終わると村人は大石を拝んで帰って行った。

夜中、若い娘が神の夜伽に来るという。契りを結んで欲しいという。女の話によると古代より峠で異郷の男女が出会い歌垣を行い結婚相手を決めていたという。いつしかその風習も廃れて、もともとの信仰と重なりまれに来る貴人や良民に血分をしてもらっていたという。里の同族婚で血が濃くならないようにする風習なのだろう。すでに私のなかに憑依した抗えない神の力が漲っていた。

その後あの村の祭りは夢だったと言い聞かせ自分の胸にしまい込んだ。しかし村はずれのお地蔵さんに自然と手を合わせてしまう自分がいた。受け継がれてきた習慣に体が従っているようだった。何事もない何事も考えない形通りに生きていく、そして連綿と受け継がれていく習俗。そういう世界もあるのかと思い東京の大学へもどった。

数年たったある正月のこと屋敷のあけずの門を開いておくと、そこから庭に祝い人が入ってきた。仕来たりどおり中門の跡でぴたりと止まり正月を寿ぐ祝言を語りだした。一行は翁のような面をつけた者と老女と着飾った稚児だった。鈴の音にあわせて祝いの言葉を述べ、少女は舞った。祖母はアヤツコを額に書いてあるから稚児に触れてはいけないと私たちに言った。祖母が米と味噌、それとお金を渡した。それは与えるのではなく返礼の意味が込められていた。

私は門を出るまで見ていたが最後に少女が振り向き深々と頭を下げて行った。

祖母は昔から伝わっている「ほかいびと」の話をしだした。ほかいびとたちは昔むかしの古代には高貴な方たちに舞いを舞っていたのだが、その役目を大きな寺社に奪われ流浪の芸人となった。次第しだいに山へ山へと移り住むようになったが昔を忘れず里で祝い事があると山奥から祝福しに里へやってきてくれるのだと。だからお礼をしなければならないと。

どうしてお祖母さんはそんなこと知っているのと聞くと「お婆ちゃんはお婆ちゃんから聞いたんだよ。そのお婆ちゃんもお婆ちゃんから聞いたんだとさ」

祖母は永遠の時空を生きているようだった。

評　論

爛漫（らんまん）と咲く桜に恋情と無常を
―桜は西行にとって恋人であり依代―

宇賀神　忍

古今東西、西行ほど桜を愛し狂おしいまでに桜に恋いこがれた詩人はいないのではあるまいか。人口に膾炙した歌に「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃」と言う有名な歌があるが、この歌一つとっても彼がいかに桜と共に生き、桜を愛でその懐深く帰依し、桜に憧れ陶酔していたかが伺い知れよう。

春風の花を散らすと見る夢はさめても胸のさわぐなりけり

桜は、古来から日本人がこよなく愛し続けて来た花ではあるが、西行の桜への思いは尋常を逸して狂気のさたと思われる程で、まるで恋人を恋いこがれる様に桜に執着しているのである。その事は右記の歌でも推察できるが、西行が歌った花の中で圧倒的に多いのが桜である事からも伺い知れよう。

ちなみに西行が桜を詠んだ歌は二百三十首にも及ぶが、梅の歌は二十五首、橘の歌が十二首、卯の花は九首で山吹に至っては二首だけである事からも立証されよう。

では、西行の狂おしいばかりの桜への思いはどこから来たのであろうか。西行はご存知の様に若くして世を捨て家を捨て妻子さえも捨てて、心の安寧を求めて流浪し、歌に生きた遁世者である。そんな彼が桜にどんな思いを託し、何を求めていたのであろうか。いくつかの歌を手がかりに西行の思いのあり様を検証してみたい。

世の中の柵（しがらみ）や我執からの脱却

西行の心の移ろいを探る上で大変都合の良い事に『山家集』の中に〝落花の歌あまた詠みけるに〟と言う詞書のある歌群がある。そこには、在俗中の歌と出家後の連作が並記されており、前後を比較して読むと自ずと西行の心の変化を読みとる事ができる。

在俗中の歌では、

勅（ちょく）とかや下（くだ）す帝のいませかしさらば恐れて花や散らぬと
波もなく風も治（おさ）めし白河の君の折もや花や散りけむ

と歌っているのに対して、出家後の歌では、

いかで我この世のほかの思い出に風を厭（いと）はで花眺めけむ
年を経（へ）て待つも惜しむも山桜心を春に尽くすなりけり

と詠じているのである。

出家前の作では「桜の花は華麗に爛漫と咲き誇る姿だけを観ていたい。桜の散る姿等見たくない。」と言う思いが強かったのに対して、出家後の歌では「絢爛と咲く桜の花びらを無情に散らす風さえも、さほど憎くは思わないし、散る花びらも惜しいとは思わない。ただありのままの花の姿を楽しみ堪能できればそれで良いのだ。」と言っているのである。

何と言う心の変わり様であろう。世間のしがらみや世のわずらわしさから脱却した西行の心は、我執が消え心に余裕ができたのであろう。出家前には満開の桜に執着し、散花する桜を疎んじさえしていた西行が、出家後には、満開の桜ばかりでなく、舞い散る花の姿も散った後も開花を待っている間でさえも眺めていると何か心楽しく浮き浮きした気分になると言っているのである。西行は、出家する事によって世の中のしがらみから脱却したばかりでなく我執からも脱却し、世の中の無常も自然のあり様もありのままに受けいれる事の出来る柔軟な心を会得する事ができたのである。

桜への憧憬と鎮魂

西行は、常に自然の中に自己を見つめ続けた詩人である。自然は西行にとって自分を見つめる為の触媒であった。故に西行にとって自然は、友であり恋人であり憧れの対象であり仏性の輝きでもあった。だから求道者西行にとって自然の代表であり象徴でもある桜は、信仰の花であり依代であり憧憬の対象でもあった故に、西行に多くの桜の歌を歌わせたのである。それ故、西行が歌った桜の歌は、祈りの歌であると共に桜への恋情を吐露したものであり、桜へのオマージュなのである。次に西行の桜への恋情溢れる歌をあげてみよう。

身を分けて見る梢なく尽くさばやよろづの山の花の盛りを

西行は、この世に咲き誇る桜は総て見つくそうと決意し、

吉野山梢の花を見し日より心は身にも添はずなりにき

花見ればそのいわれとはなけれども心のうちぞ苦しかりける

ここで西行は、「満開の桜の花を見てからは、私は身も心もそぞろになり、心は浮遊して生身の肉体から遊離し、何事も手につかず、なぜか心苦しい事ばかりだと嘆息しているのである。

桜の花に心を奪われ、身体から心が浮遊してしまうという現象は、恋情でなくて何であろう。人を恋した事のある人なら誰でも経験する事だが、恋人を思う心が強ければ強い程、心は内体から浮遊して自分では制御できなくなるし、恋心がつのればつのる程切なく苦しいものなのである。

西行にとって桜を観る事は至福の時であると同時に悩ましい時でもあるのである。

この様に熱烈に桜への思いを抱く一方で西行は、世を捨て出家した我が身を振り返り、桜への憧憬や煩悩を捨てきれない自分を自省し、まだまだ修行が足りないと反省する事も忘れないのである。

花にそむ心のいかで残りけむ捨てはててきと思ふわが身に

世の中の執着心と煩悩を捨て切れない西行は、桜の花に地上一寸の浄土を見、桜を讃美する歌を詠む事で己が煩悩を解放し、煩悩を静め己が心の救済を図ったのである。西行の歌の特徴は、月を歌ってもこの世の森羅万象を歌っても、その底には常に自省と鎮魂の思いが色濃く反映されている点にある。西行にとって歌を詠む事は、山野流浪と同様に修行であり信仰の証であり、悟りに近づく道だったのである。

生の歓びと世の無常

西行は、単に桜の花の美しさのみを歌った詩人ではない。西行は、桜の花を美的対象とは見ずに、桜の花の豊麗な姿や儚く散る花の無常から触発された己が心を・主観の奔出を歌った歌人なのである。

おぼつかないづれの山の峰よりか待たるる花の咲きはじむらむ

おぼつかな谷は桜のいかならむ嶺にはいまだかけぬ白雲

これらの歌は、桜の花を詠んでいるのではない。桜の花の開花を今や遅しと待ちわびている西行自身の心を歌っているのである。人間誰しも待つ事。待ちわびる心は不安なものであり落ちつかないものである。西行は、桜の開花を待ちわびる不安定な心を、まるで恋人でも待つ様な思いで、自省をも込めて〃おぼつかな〃と詠んでいるのである。それが証拠には、続けて次の様な歌を詠んでいる。

おぼつかな春は心の花にのみいづれの年かうかれそめけむ

西行がこれ程までに桜に執着し桜の花を詠んだのは、乱世の世ー無常の世の中を生きる西行にとって桜は、己がアイデンティティを確認する為の触媒であり、心と桜の同一化を図る事によってかろうじて己が精神を安定させる事ができたからである。それ故に西行は、繰り返し訪れる春ごとに桜の花を讃美し、無常の自覚に身をさらすのである。

惜しまれぬ身だにも世にはあるものをあなあや憎の花の心や

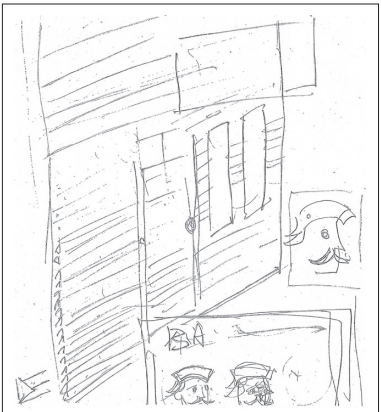
西行は、「人々から惜しまれもしない私でさえ、こうして生き永らえているのに、惜しまれながらも慌ただしく散って行く桜の花は何と憎らしい事よ。」と恨み言を言いながらも、生き永らえて散ろうともしない我が身よりも美しい盛りに多くの人々に惜しまれつつ散って行く桜の方こそ潔く優雅で美しい事よと讃美しているのである。

もろともに我をも具(ぐ)して散りね花憂き世を厭(いと)ふ心ある身ぞ

エドガー・アラン・ポー

森　羅一

逸見猶吉は昭和3年、学生の時、神楽坂に高級バーを経営する。店名は「ユレカ」（ユリイカ＝我発見せり）である。



▲ユリイカの外観
神楽坂中程左、現在は牛丼松屋がある

右記の画は実弟大野五郎氏が益子に来られた時（一九七〇）に描いて頂いた、バー「ユリイカ」の外観。凡そ奥行き5～6間×幅2・5～3間、壁は三角材、窓の上の看板・トランプの王様をデザイン、色彩は赤と黒。塗装は五郎氏が担当した。

「ユリイカ」と言う語彙はエドガー・アラン・ポー（＊1）（以下ポーと表記）の長編詩「ユリイカ」から採ったことが逸見の言動（「ポーが大好きだった」（緒方昇談）やエッセイでポーに言及している）から頷ける。

ポーを調べるとボードレールの象徴詩のルーツがポーにあることが衆目の事実であるとある。象徴詩がボードレールに始まるとあるが、『ポー詩集』の解説には「ポーがボードレールを生んだ」とある。この背景を探ってみたい。

ボードレールの「弁明ともとれる次のような資料がある。

「私はエドガー・ポーを模倣したという罪のために非難されている。（略）何故なら彼は私に似ていた。私が初めて彼の作品を開いた時、私は恐怖と歓喜の念に打たれて、私のすでに夢見ていた主題と、（略）私の考えていた、そして彼が20年も以前に書いている文章とをそこに見出したのだ。」※

ボートレールとポーの関わりは一八四六～四七年に始まり終世続けられた。ポー、ボートレール、ランボーの系譜は各人の修辞法によく表れている。「瞳、髪、飲むこと」※の語彙の使い方が三人の詩人に共通している。この他、一読しただけでもボードレールの代表作にポーの詩句と同類の修辞を確認できる。これを見てもボーに倣ったのは明らかである。

※（阿部保訳）『ポー詩集』新潮文庫

※（奥本大三郎）『ユリイカボードレール特集』青土社

以下、ポーの作品について紹介したい。

1詩篇「大鴉」・ポーの詩篇は難解とは言え叙情性が基底と言われている。作品の中に象徴性の表現について捜してみた。

ポーは次のように書いている。「汝の嘴をわが胸より抜けそして汝の姿をわが戸口より消せ　大鴉応えぬ。またとなし」「わが胸より」と言う言葉は、この詩の中で最初の隠喩的表現を含んでいるとある。この他に中程に「すると漆黒のこの鳥は」がある。この漆黒の鳥もまた象徴的表現である。この鳥が恋人あるいは自己なのか私には読み解けない。ややこしくなるが自己の中の他者、つまり他我である。こうなると哲学の主観・客観の世界となる。（詩篇「大鴉」一八四五年）

ポーは心的なものを喩とした。ボードレールは嗅覚や視覚の感覚を喩としたことが分かる。いずれも精神の深奥に根ざしたものであることが分かる。

ポーはこの「大鴉」に亡き恋人への寂寥感を象徴として表現したのであろうか。大鴉が他者なのか自己なのか判断つきかねるがいずれにしても大鴉がこの詩篇の核であることは間違いない。鴉の挙動は作者ポーの精神の有り様なのか。

ポーの象徴表現が米国ではあまり評価されず、フランスにおいてボードレール等がこの方法論に倣い象徴詩の祖となる。その後、この象徴主義はランボー、ヴェルレーヌ、マラルメ、ヴァレリーへと拡がった。ロートレアモンもこの時期に無名のままに早世している。

2長編詩「ユリイカ」・物理的宇宙ならびに精神的宇宙についての論考とサブタイトルがある。遠大無比なこの難解な論考は英字で4万語、翻訳和文で約10万語。散文詩としたロートレアモンの「マルドロールの歌」（翻訳和文で約20万語）に内容は異なるが膨大な散文詩と言う点で似ている。

物理学や天文学の真理の究明について演繹的方法論や帰納的方法論を否定し直観ないし想像力の第三の方法論を主張している。

ポーが語っていることは理解不可能だが私には宇宙論を語ること、即ち「真理」を究明することがこの書のテーマであるとシンプルに思った。

序に物語として一篇の詩として提供します、とある。そして「私が提供するのは真であります」とある。最後に「詩としてのみ評価されんことを切望してやみません」とも結んでいる。

ヴァレリー（＊2）はこの書を次のように書いている。

「ポーは数学的な問題を基礎として抽象的な詩を書いたのであって、物質的な精神的な自然を総体的に説明しようとした（略）一つの天地創成説なのである。（略）純粋な論理学はわれわれに虚偽が真実を意味することを教える。かくして精神の歴史は次の言葉で要約することができる。精神は求めることにおいて無稽であり、発見することにおいて偉大なのである。」この中で興味深いのは「虚偽が真実を意味する」である。多くの虚偽の決定はとりあえず決めた規範により定められている。このことの不確実性を指摘しているものと思う。正に通念化された規範を指している。詩はある面ではそれらの虚偽を撃破することにある。

ポーがこの書を詩として読んで貰いたいと書いたのは「無数にある非真実」を詩人は究明する役割を担っている。そんな思いがこめられていたのではと思える。バー「ユリイカ」も精神や真実のシンボルの意味だったのか、それとも九州に

赴任した緒方に書いた「あ！めっけた」位の洒落だったのだろうか。

3ポーの「暗号術」・ポーの著作の中に「暗号術」がある。言わば乱数表を基調にした種々の方法と解説である。何故この短いエッセイに興味をもったかと言うと、「暗号」とはつまり記号であり「割符」であり、象徴と密接に通底しているように見える。象徴の歴史的経緯をひもとくと次のようになる。

象徴symbole＝フランス語の訳語。語源ギリシャ語、シュンボロンは割符を意味する。一般的にはあるものと関わる別の物を指示する作用をいう。

これらの著作を読んで逸見の言動を考えるといちいち納得できる。1敬愛するボードレールの師として、象徴という喩の方法論として（大鴉）。2理論的哲学的に真理を究明する姿勢（ユリイカ）。3象徴性の喩と暗号の連接。と言った具合にそれぞれが逸見の軌跡に重なる。逸見の詩篇「ベエリング」や「ウルトラマリン」の括りにある19篇にポー、ボードレール、ランボーの詩の基底が逸見の作品に混合層のように沈積しているように私には見える。

ふと、逸見の詩篇や童話に表れる鴉はポーやゴッホから導かれたのかと考えた。何故なら「大鴉」の比喩的表現と大正13年に書いた「ゴッホ論」及び病床でよく「群舞する鴉の画」を見ていたとある。これもコードと読むべきなのだろうか。

＊1・エドガー・アラン・ポー（一八〇九～四九）アメリカ・ボストンに生まれる。雑誌編集をしながら詩、短編小説を書く。母国よりフランスで高く評価された。フランス象徴詩をはじめ短編小説に大きな影響を与えた。作品・詩集「大鴉」「ユリイカ」、小説「黄金虫」、モルグ街の殺人」他多数。

＊2・ヴァレリー（一八七一～一九四五）フランス・詩人、文名批評家。マラルメに師事して象徴派の伝統を継ぎ純粋詩の理論を確立した。

百年前の帝大生ノートから

柴田　裕巳

―はじめに―　本稿は、仮題『史料が語る　富樫兼治郎とその時代』の一翼を担うことになる一篇の素稿である。「海岸砂防の父」とも称される富樫兼治郎は、一八九六～一九六五年（明治二九～昭和四〇年）の生涯において、大正一〇年から昭和三〇年までの三三年間を、林野庁の中堅官吏として生きた。林学界最高の白澤賞受賞作『日本海北部沿岸地方に於ける砂防造林』（昭和一二年、林曹会刊）。その題名が、荒廃した砂丘にマツを植え続けた軌跡と場所を自ずから語っている。

標題の「百年前のノート」は大正七年（一九一八）、東京帝国大学農科大学林学実科一年次に始まる、富樫直筆のノートである。

古色を帯びた青い表紙には、日付も記名もない。冒頭に「森林植物学」。わずかに右下がりの正字旧カナ、英字はすべて流麗筆記体。行に乱れはない。筆記具は漱石の『三四郎』と同じく、「つけペン」であった。

筆跡の判定は梅津勘一氏による。氏は、山形県庄内総合支庁森林整備課時代の二〇〇四年三月、酒田森林管理センターの廃止に伴う引っ越し作業のさ中に駆けつけて、廃棄寸前の、富樫が収集した砂防関係資料やスクラップ帳や写真、自筆原稿など多くの資料を引き取っていた。ノートはその中にあった。解明は私一人に託された。

はじめに把握すべきは、明治日本の各分野で起きていた試行錯誤と改変に次ぐ改変である。学制もまた激動の中にあった。

長い前史の後に明治一〇年に創立なった東京大学は、以後も短期間に三度名称を変えた。すなわち①帝国大学農科大学、②東京帝国大学農科大学、③東京帝国大学農学部）である。

明治後期になって、学制はようやく6（尋常小学校）・5（旧制中学）・3（旧制高等学校）・3（大学）制に落ち着く。

富樫が大正四年に卒業した荘内中学は、当時庄内地方唯一の県立中学校であり、門戸は限られていた。その上の高等学校となれば同世代人口の一％といわれ、エリートの代名詞であった。

富樫はその高等学校に行くことなく、東京帝大に入学した。前掲②③の時代であった。

―実科とはなにか―　富樫自身の言葉があった。―その頃は専門学校と云っても林科のある学校は駒場の他に北大の実科、盛岡、鹿児島にわずか四校しかなかった―「砂と親しむ三十年」（『林業経済』八三号昭和三〇年九月）

駒場とは、東京帝国大学農科大学のこと。東京府荏原郡上目黒村駒場野の地に、明治一〇年農学校が設立されて以来、

「駒場」は「農学の駒場」として社会通念にさえなっていたのである。北大実科は北海道帝国大学農科大学付属、盛岡は高等農林学校（一般の呼称は「高農」）第一号の盛岡高等農林学校（宮澤賢治は大正四年に首席入学）、鹿児島は第二号の鹿児島高等農林学校である。

富樫は四校とも「専門学校」ととらえている。ともに中学校卒業で受験可、修業年限は三年であった。これら教育機関の目標は中堅官僚の育成で、高農においてはとくに農業指導者や教員の養成が期待された。

東京帝国大学「実科」の特異性は、名称に付属とつかず、専門学校にもならずに「林学科」（以降、実科と区別するため「本科」と呼ぶ）に附置される形で存在した点にある。「実科」の詳細な歴史を語れば紙幅が尽きる。割愛して次の三点だけをおさえておきたい。「実科」の名称は速成科→簡易科→別科と改称を重ねたこと。明治二三年（一八九〇）に、帝国大学に組み込まれて農科大学となった時点では「乙科」であったこと。明治三一年（一八九八）に「実科」となったこと。修業年限は途中で二年から三年になっていた。

学内での呼称は本科生は学生、実科生は生徒と厳格に定められ、実科生に学士の称号は与えられず、『東京帝国大学卒業生氏名録』（昭和二五年、東京大学刊）に実科卒者が載ることはなかった。

酒田市内には、昭和四十一年（一九六六）に建てられた富樫の顕彰碑がある。だが、富樫兼治郎翁顕彰会が傍らに設置した、顕彰の由縁を記した説明板に「東大農学部」とあり、これに新聞報道が追随したことで、誤った学歴が伝わることになった。碑文の揮毫者は安孫子藤吉山形県知事であった。

「富樫ノート」の解明作業が「林学実科」を正しく伝え、富樫の学問の原郷を明らかにすることで、人物像やその時代を伝えることにつながることを願う。以下、原則テーマ別日付順の記録とする。期間二〇二〇年二月～九月。

1．筆記年・在籍・科目を特定あるいは確認する

【二月】　日付も記名もないノートであったが三六頁、培養液の入ったガラス瓶に根付のイチョウをさした実験図の左に「東京帝国大学農科大学植物学教室　銀杏培養試験」とあり、その下に「大正七年十一月一日」の小さな字を発見。時代を特定する手がかりとなった。

当時の学期の始期は九月。『東京大学一覧』（東京帝国大学刊、従大正七年至大正八年）で林学実科一年の在籍者に、富樫兼治郎の名を確認する。

ノート冒頭の「森林植物学」の有無については、『東京大学百年史　部局史二農学部』には本科の学課科目しかなく、実科については官報第四四五九号・明治三一年（一八九八）五月一四日で確認した。

2．講義者（教授名）を特定する

はじめ「職員録」（印刷局刊）掲載の農科大学教授一覧から該当者の検索に入るが、教授周辺の情報不足で特定できず。

【三月】　●一八日　宇都宮大学付属図書館を通じて農学部大久保達弘教授のご紹介あり。東京大学大学院修士課程を修めておられた。ただちにもたらされた三つの貴重情報があった。①農科大学植物学教室が今なお、東京大学大学院農学生命科学研究科内に「森林植物学研究室」として存続していること。②その歴代講座担任のうちで時代が合い、講義した可能性が強いのは池野成一郎・草野俊助・三宅驥一（きいち）の三人であ

る。③「富樫ノート」の内容から、特定の教科書ではなく授業用のテキストだったかもしれない。当時は授業を聞いてひたすら書き取るという学び方だった。

【四月】●二日「富樫ノート」底本の一つに三好学『最新植物学講義』上・下巻（明治四四年刊）を発見（上巻＝二六五頁トウモロコシの維管束図、下巻＝九六五～九七八頁メンデル氏法則など）●五日『評伝　三好学』（酒井敏雄著、一九九八年刊）から、草野・三宅がともに三好門下生とわかる。●二四日「富樫ノート」二頁に『ストラスブルガー植物学』上巻（第一冊第二冊とも大正二年刊）からの引用を発見。他に論の展開に類似箇所あり。草野・三宅は共訳者であり、講義者はいずれかの可能性が高まる。●二八日『東京大学百年史　部局史二』八八四～八八五頁「森林植物学講座」の記述より、教官としての期間が明確で長い（明治四二年～大正一四年＊別資料からその前に講師時代有り、と八月に判明）草野俊助に絞る。●同日『母校独立記念号』（駒場交友会、昭和一一年刊）の第二編「駒場時代の思出を語る」に、講義者に関するもの二件あり。①三五頁「植物の教室で草野先生の講義を聞いたりした」②五四頁「スマートだが少しキザだった三宅驥一先生、ポストにあやまったと云う池野先生には遂に講義は聞かなかった」。草野俊助の可能性高まる。

3．草野講義の確証へ（自筆文や辞典などから）

【五月】●一〇日「富樫ノート」一頁の清書文作成（原文横書）

「草ト木」　Woody plant and Herb　（本文略）

「喬木・灌木・蔓」　Tree，Shrub and Lianes（Vine）（本文略）

「草木ノ器官」　Organ（原文五行を続けて掲載）

草木ノ体ハ根或ハ茎葉其他色々ノ部分ニ分タル。即チ種々ノ部分ヨリ成ル。其等ヲ器官　Organ　ト称ス。其等ニ固有ノ作用ヲ認ムルナリ。

Organ　ハ固有ノ作用ヲ有スレバ　其ノ構造ヲ知ルトキハ其ノ作用モ知レ両者相連関シテ離ルベキニアラザレバ　先ヅ其ノ作用ヲ研究スベシ。

●一三日　福井本（草野俊助述『植物学講義』（発行年不明）の数頁を画像入手。「富樫ノート」と展開法が似ており、同工異曲と見る。―福井本は第一章第一節「草木の體」での記述は、アブラナの発育→「器官」へ進み後章で「細胞」。「富樫ノート」は冒頭で「草ト木」→「喬木・灌木・蔓」→「器官」へ→次頁で「細胞」へと進む。

【七月】●一五日　草野俊助著『中等教科普通植物』全文入手（教育図書館蔵）　さらに富樫ノートに酷似していた。第一篇一課「植物體」の記述は「器官」から入り、続く第二篇「植物の器官と其作用」の第一課「植物體の構造」は「細胞」から始まる。●以後、大御所・三好学本や採用校の多かった藤井健次郎（三好門下生筆頭）本、三宅驥一他多数の教科書比較へ　●二二日草野だけの「導入と展開」と判明。●二六日　雑誌文「―学士になっても知らない―GrassとTreeとの譯字」（『学生』大正七年刊）を国会図書館より入手。要約すると―正しくは木（樹木）はWoody plant でTreeは喬木である。木＝Treeではない。草（普通の）はHerbでGrassは牧草である―。「富樫ノート」一頁はこの通りの書き分けであった。これで講義者の可能性は一段と確実になった。

【八月】●二日　『植物文化人物事典』（日外アソシエーツ）の草野俊助の頁に、「東京帝国大学理科大学大学院時代に農

科大学実科講師を嘱託され」を発見。改めて、理学部出が農学部の植物学講義を担っていた時代と知る。「講義者は草野では」というかなりの確信性を帯びた仮説は、あっけなく「確証を与えられた」といってよかった。

【九月&まとめ】●草野文に多用された「草木」について、随筆『我が植物観』他も援用して考察。その言葉には「人間と同じ自然界に生きる者」との眼差しがあり、器官もまた「生きて働く生命体」との視点があった。●『日本書紀』以来の日本人の草木観や、チミリヤーゼフ『植物の生活』の植物観との接点は別稿とする。●六月探究「授業と筆写の有り様」は膨大ゆえに別稿とした。●実科の講義は時代により諸相あるとも、草野は当時助教授であり、高いレベルだったと思われる。

かつて一三万九三七五坪を擁した駒場農学の地に昔日の面影を伝える建物はなにもない。昭和一〇年三月実科廃止、四月東京高等農林学校（後の東京農工大学）独立。七月には、一高と敷地交換した農学部が向ヶ丘弥生町へ移転する。翌一一年駒場農学碑が建つ。「実科」はその素朴で懐かしい言葉の底に、かすかな不安定さと異和感をひそませたまま、五〇年余りの短い歴史を閉じたのであった。

随　筆

安蘇の山川

小林　博

下野の国には大きな鬼怒川も那珂川もある。南部には渡良瀬川も流れている。なのに何故、万葉集では小さな秋山川の歌しか採り上げなかったのだろうか？

そんな小さな秋山川でも、令和元年の台風十九号によって牙を剥き、佐野市一帯に甚大な被害を与えてしまった。水害の情報に接するたびに、四十年も経ってしまったが、旧田沼町の「唐沢城址マラソン」に参加した日のことを思い出すから皮肉だ。

当日は四月初めの日曜日、会場の旧田沼高校で受付を済ませ、すぐ脇の河川敷公園で友人とウォーミングアップをしながら、身体をほぐしてスタート時刻を待った。

そのときチョロチョロ流れていた川が秋山川だったとは、今でも想像できない。

堤には八重桜が彩りを添え、傍らの案内板には万葉歌が記されてあった。

下つ毛野安蘇の川原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ

「下野の安蘇の川原の石も踏まずに飛んで来たんだよ。どうか本心を聞かせておくれ」と、恋しい乙女に思いを募らせる男子の歌だと、私は解した。

秋山川の源流は市の北部の群馬県境との山間で、そこから旧葛生町と旧田沼町を下り、佐野市街を流れて渡良瀬川に合流する。

ボランテアで水害の後始末に出かけた娘婿から、佐野市もだいぶ片付いたようだと聞いたので、不通になっていたＪＲ両毛線がようやく開通した十二月中旬、元の職場の友人を見舞いに訪ねて行った。

ＪＲ佐野駅前から乗ったタクシーの運転手が気を利かせてくれて、被害のひどかった地域を巡って市の郷土博物館に運んでくれた。その日は月曜日で博物館は休館であったが、運転手によれば、この建物も水害を受けて長い間閉鎖されていたという。

駅の西側の秋山川沿いは、氾濫から二か月も過ぎたのに、水を吸った畳が道端に積まれていて、被害の凄さを物語っていた。それを目にすると、友人宅を急に訪ねて世話を焼かせることに気が引けて、来た道をとって返した。

急きょ予定を変更して煮え切らないでいると、運転手は近くの名の通った佐野ラーメンの店を紹介したうえで、「水害に遭わなかった浅沼町に行くといいよ、安蘇の起源地らしいから」と小さな神社名を挙げて、私の気まぐれな散策にピッタリの行き場を勧めてくれた。

佐野市浅沼町は市街地のやや南東部に位置し、そこから三毳山は目と鼻の先、カタクリの花で知られ、今は「万葉自然かたくりの里」として整備されている。その里山の麓はアウトレットモールに接している。

万葉集の東歌で下野の国を歌ったものは、ほかに三毳山を詠んだ二首しか載っていない。

下つ毛野三毳の山のこ楢のすまぐはし子ろは誰が笥か持たむ

「三毳山のこ楢の葉のように瑞々しい乙女子は、将来、誰の笥を取って食事の世話をやくのだろうか」と歌われている。

二首とも安蘇の山川を巧みに詠み込んで、品のよい男女の爽やかな愛が漂っている。

運転手が口にした神社の名前はどこにもある簡単なものだったので、メモしなかったのが致命的であった。行き先があやふやでは人に尋ねることもできない。散々歩き回ったが見つけられずに脚が棒になり、お昼間近なので、近くのラーメン店で冷えた身体を温めた。腹が満たされてひと息つくと、素朴な疑問が湧きあがった。

今朝の電車から見た雪に光る日光男体山は神々しかった。ここ安蘇の平野からは遠く足尾山塊と日光連山に繋がっているのに、何故、万葉歌では高い山を詠み込まずに、低い三毳山だったのだろうか?

私は駅に戻る途中、見晴らしの良い観音山子供公園に登って周囲を眺めた。市街地の北側は、西から東にかけて唐沢山などの低い山にぐるっと囲まれて、その背後には目が届かない。

ここは南に開けた入野で、東側も三毳山に遮られてその先は望めない。

ことによると、ずっと昔の「安蘇地」は大和の国との往来も盛んで大和言葉に通じ、下野のどの地域よりも文化的で和歌の詠める雰囲気が漂っていたのではないだろうか。

市街地の北西部には、歌聖と言われる柿本人麻呂を祀った「人丸神社」が秋山川と旗川の扇状地の湧水池のほとりに美しい景観を誇っている。

旧田沼町と旧葛生町は、二〇〇五年に佐野市と合併し、「安蘇郡」の文字は行政区域からも地図上からも消えてしまった。

私の頭の中だけは仮説が浮かんで「安蘇」が駆けめぐっていた。

太宰を読むとき

大出　京子（たかこ）

ある方から自費出版の本を頂いた。太宰ファンの男性で、お薦めの太宰作品を七作、その一部を引用しながらの作品集である。

少なからず驚いた。好きだと言っても、引用は作品集の十二ページを占めている。認められるのだろうか。私が記憶する著作権の権限年数は、確か五十年だった。その後、年数に変更があったかどうかは、調べたことがないので分からない。変わったとしても、このように長い引用は、許されないのではないかと、気になった。

太宰治〈一九〇九（明治四二）年～一九四八（昭和二三）年〉は、近代文学史上、有名な作家である。私がその名前を知ったのは、新聞で太宰の遺体を捜索する写真を見た時だった。蓑傘姿で、竹竿を使って玉川の流れの中に太宰の姿を求める捜査員。玉川は水量が豊富だったのだ。入水したのは六月十三日、遺体が見つかったのは六月十九日。遺体の様子を報じる記事に衝撃を受けた。私は新制中学校の生徒で、大人の世界も太宰の作品も、まだよく解らない年齢だった。解らないから、どうして、このような死に方をするのだろうと、衝撃だけが強く残った。奇しくも六月十九日は、太宰四十歳の誕生日だった。

時代の趨勢というのだろうか、死後、作品集が相次いで出版され、太宰の作品は広く読まれた。逐一、出版年月日を調べたわけではないが、『太宰治全集』の出版は昭和五十二年、逆算して、頂いた本の引用は著作権に触れるぎりぎりの年数かと推測される。

世に太宰ファンは多い。それと同じくらい、太宰を嫌う人も多いようだ。生い立ちや様々な事件から、私はあまり、太宰を好きになれない。単なる偏見なのだろう。人間的に弱いように思えて、受け入れられない。嫌いではないが、読んでいると陰鬱な気分になるのが嫌なのだ。

中でも「斜陽」は、戦後、不在地主のため農地解放で不動産のほとんどを失った私の実家の姿と重なり、意識的に読むのを避けるきらいがあった。山林や田畑は仕方がない。でも、畑の畦道に植えてある柿の木は別扱いだと、伐り倒して貨車で那須村（当時の）から黒磯駅まで運んだ祖母の意地。黒磯駅横の空き地に、暫くの間積み上げてあった木材の山が記憶にある。後日、床柱（とこばしら）用にと、建築業者が買い取ったと聞いた。

歳を重ねた今、私は太宰の作品を読み返すことは殆どない。気が向くと好きな短篇を開くくらいである。ただ、芥川賞選考時期になると、第一回の受賞時のエピソードが浮んできて太宰を思い出す。ノミネートされていることを知り、川端康成に授賞懇願の手紙を出した件である。経済的に困窮してい

たのか、名誉が欲しかったのか。本心は知る由もない。

創設から数えて一六三回になる今年（令和二年）の芥川賞は、興味深かった。太宰の孫にあたる石原燃が話題になったからである。祖父と同じく、次席に終わったとは。作品は「赤い砂を蹴る」とあった。

過日、久しぶりで太宰の本を書棚から取り出した。まず、「富嶽百景」を開いた。読み返しながら、この作品が書かれたころ、太宰が石原美知子と結婚したことに思い当たった。「女生徒」「走れメロス」など、私が時折読み返す作品はこの時期に書かれたものであることにも。昭和十三年から十五年は、太宰の生活が穏便な時期であった。

生活を反映して、作品に暗いイメージのないのが好ましい。「富嶽百景」の中の一節、「富士には月見草がよく似合う」が、御坂峠に建っている文学碑に刻まれているとか。もう、私には訪ねることが出来そうにない。

この文にある月見草はオオマツヨイグサであることは、よく知られている。

そういえば、オオマツヨイグサを見かけなくなった。あの黄色が懐かしい。何年前のことだろうか、益子町の浜田先生宅をお訪ねした時、奥様が庭先を指さされ、「あれが月見草ですよ」と教えて下さった。黄色ではなく、白い花だった。群れ咲くハルジオンの中にポツンと咲いていた。都会から訪ねてきた女子大生達が、月見草ではなくハルジオンの方を、珍しい、と言って持ち帰ったとか。自然の風情に満ちていた浜田邸だった。

二、三年前、友人が三鷹市に越していった。「太宰のお墓があるところなのね」と言って別れた。六月十九日は「桜桃忌」。昭和の頃は、翌日の新聞に太宰のお墓を訪れる大勢の若い女性を写した写真が載ったものだ。平成が終わり、令和を迎えた今、「桜桃忌」は、あまり話題にならない。私も忘れたまま、六月を過した。三鷹市に越していった友人は、思い出しただろうか。

芥川賞を逃しても、その後、素晴らしい作品を書き、活躍した作家は何人もいる。私が好きな中島敦、山川方夫、島尾敏雄、吉村昭……。山川方夫を夢中で読んだ日は遠くなった。

私は受賞作品を『文芸春秋』で読むのが常である。小説に限らず、文芸作品はその時代を反映する。ここ数年、受賞作品に馴染めないのは、私が時代遅れのせいなのだろう。「コンビニ人間」に違和感を覚えたが、あの辺りから、すんなりと受賞作品を受け入れられなくなったような気がする。ドキュメントは好んで読むのだが。

石原燃の「赤い砂を蹴る」。太宰の作品と重ね合わせて読んでみようと楽しみにしている。

溶けたアイスクリーム

松林　厚子

この春、ウォーキングが日課になった。
夫と近くの沼地を歩いたり、友人と中央公園を周回する。夫とはあまり話さないが、友人と歩いているとコースを何周歩いたか忘れるほど話に夢中になる。
「とちぎの散歩道７７コース」という本を参考に、中でも人が少なそうな場所を選んで、夫と出かけるようになった。
白沢宿、栃木市の皆川城址、茂木町の桔梗城址など、「栃木県、やるじゃん」と気分爽快になる。出かけるときは、歩くだけでなく、何か、お楽しみも考える。白沢宿を歩いた後は、帰り道の高林堂でかりんとう饅頭を買った。皆川城址を歩けば、城址近くの娘の友達宅を、アポなしで訪問。一歳の男の子と妊娠中の、娘の友達に会っておしゃべりをしてきた。
その日は、市貝の湿地コースを歩こうと決めた。市貝の知人に届け物があり、郵送で用は足りるが、できれば顔を合わせたかった。優秀なナビの案内で迷うことなく知人のお宅にたどり着いた。広い庭に咲いているお花の話などして、知人と別れ、目的地に向かった。
真岡鉄道の多田羅駅は、無人駅で、人影もなく静まり返っていた。心もとなくなり夫の顔を見た。
「だーれもいないね。今日は日曜日だから、ＳＬが走る日だよね」
「今、ＳＬなんか、走るわけないじゃん」
そっけない態度にムッとして、
「はぁ。そんなのわかんないよ。さっき、線路の向こうでカメラを構えている男の人がいたもん」
口をとがらせて言い返した私の視線に、
『ＳＬの運行はしばらく中止します』
と書かれた張り紙が目に入った。
「ふーん。やっぱり、ＳＬ走らないってさ」
小声でつぶやいた私に夫は無言で頷いた。駅から湿地コースまでは、一般道を歩く。五月の日差しはそれなりに強く、汗ばんできた。車道を通る車が目に入ると、窓を閉めてエアコンを効かせた車内の人たちが恨めしくなる。十五分ほど歩いてたどり着いた憩いの森は、自然林に囲まれた快適な散歩コースだった。湿地帯の木道は、壊れかけていたが、あちこちで野鳥の鳴き声が聞こえて、気持ちよく歩けた。
ウォーキングの後は市貝の道の駅でおにぎりを買って昼食にする計画を立てていた。
道の駅の駐車場で車を降りると「蛍の光」が聞こえてきた。
「え、何で蛍の光なの」
農産物直売所の自動ドアが半分閉まったままで、外に並べられた野菜苗や花卉類を男性が黙々と室内に片付けている。

「新型コロナウイルスの関係で一時終了となります」
放送が耳に入り、時計を見ると一時にはあと七、八分しかない。夫に、
「時間ないよ」
と、声をかけ、小走りで総菜売り場に向かった。吟味する暇もなく、いなり寿司のパックと赤飯、山菜おこわをかごに入れた。デザートも欲しい。ぐるりと見まわすと、イチゴが目に入った。一パック三百円。安い。レジの女性に代金を支払いながら早口で尋ねた。
「栃木パスポートはここで押してもらえるの？」
「この建物を出て左の案内所になります」
私は栃木パスポートを持っていて、あちこちの施設で押印してもらっている。買った品物を夫に手渡して案内所に走ろうとしたら、夫が、
「アイスを買おうよ」
と言ってきた。ここのアイスは美味しい。散歩のあとでアイスは食べたいが、時間がないだろうとあきらめていた。
「わかった」
建物を出て、右を向いて走る。私は苺アイス、夫はバニラを選んだ。コーンに乗ったアイスを夫に二つとも手渡して、時計を見ると一時まで間がない。
「私、案内所に行くから」
農産物直売所の前を通り、案内所に飛び込んだ。
「パスポートにハンコを押してください」
買い物をした証拠のレシートを提示して、二冊の栃木パスポートをカウンターに差し出した。
はい、はい、と男性はゆっくりと押印して、日付を記入した。ホッとして、案内所を出ると、腕に白いレジ袋を提げて、両手にアイスを持った夫がイライラした様子で立っていた。
「アイスが溶けて、手がどろどろだよ」
口にはマスクをしていて両手がふさがっているため、舐めることもできなかった、という。
「ごめん、ごめん」
謝りながら、溶けかけたアイスを大急ぎで頬張った。
テーブルに買った品物を並べて二人で昼食を食べ始めると、周りには誰もいなくなった。静まり返った道の駅で私たちは、ゆっくりと食事を始めた。

赤いフィアット

柴崎　幸子

三十年前のその日は気分が浮かれていた。

一ヶ月計画のフィレンツェ滞在も二週間を過ぎて、当初の緊張もやわらぎ、街のシステムにも慣れてきた。

その日、街はずれの公園で休日だけ開かれる、蚤の市に出かける計画を立てた。ガイドブックには、古い道具だけでなく、日用品や食料品の店も出るとある。パンをかじりながら、土産物を探すのも悪くない。すっかり街にこなれた通を気取り、気分は高揚した。

その場所は観光客は見当たらず地元の生活者のための市場のようだった。端から端まで約二キロぐらい。道の両脇にテント張りの店が並ぶ。

何より私を興奮させたのは、値段の安さだった。街の中心にある有名ブランド店のウィンドーを見ては、プライスにあるゼロの数を数えてため息をついた。

ところがどっこい、ここでは靴が千五百円。ブラウスやエプロンも千円から手に入る。少々作りが雑で粗悪品であるような気もしたが、そこは目をつぶる。とにかく、この場で手に入ることに舞い上がっていた。

最終地点にたどり着いたときには、両手に下げた買い物袋がいっぱいで、パンをかじるどころではなかった。

この辺りで戻ろうと、勝利品を得た私は大満足して大通りを渡ろうとした。その時、つい習慣で右側を注意しながら歩き出した。当然、左から走ってきた物体は目に入らない。

気がついたときには、買い物袋は四方に散らばり、体は道路に倒れていた。慌てて、膝をつきながら飛び散った品々を集めて抱え込む。

自分に何が起きたのか解らず、地面に座り込んでキョロキョロしていると、男女の二人づれが近づいて来て、この車に乗れと指示をする。知らない人の車には乗れない。私がかたくなに首を振ると、女性のほうが自分の着ている紺色のベストを指さし、訴えている。

（〇〇〇〇　ＰＯＬＩＺＩＡ）と書かれている。

彼らは警察だというのか、それにしてもこの自家用車はなんだ、どこから見てもごく普通の一般車で、この人たちのアジトに連れて行かれるのではないかと警戒した。

しきりに話す彼らを観察して、とりあえず悪い人ではなさそうだと判断した。案内されるまま、大荷物を抱えて赤いフィアットの狭い後部座席に乗り込んだ。

車が走り出すと、助手席の女性は振り向いて、熱心に何かを訪ねてくる。何回目かでやっと質問の意味を理解した。

「日本人だ」と言うと、疑いの目を向けて

「中国人ではないのか」というようなことを言ってくる。

確かにそうだろう、そう思うのも無理もない、我々だってスペイン人とイタリア人の区別はつかない。ここは彼女の期待通り中国人でもいいような気もしてきたが、私は中国語は話せない。ごめんね。仕方なく再度「ジャポネーゼ」を繰り返した。

連れて来られた所は、ただの長方形でとても殺風景な建物だった。ガサガサと荷物を持って、案内された場所に入って行く。まだ私を中国人だと疑っていそうな女性は「ここで、さよなら」と手を振って去っていった。

一人で部屋の奥へ行くと、白衣を着た男性がこちらを向いて座っていた。彼は荷物を置くように指示をする。私を直立させ、両手を前に床と平行に上げるように、自分でやってみせてくれる。

彼と同じ動作を私もできることを確認すると、書類にサインして渡してくれた。続けて、もう帰っていいというようなことを言っている。

放り出されるようにして、建物の外へ出た。埃っぽい道路にやっと一台タクシーを見つけ、泊まっているホテルを告げると走り出す。

流れる景色をぼおっと眺めた。道路はまだ作業中かと思うほど上下にゆれた。建物もまばらで本当にここがイタリアなのかと疑った。たまに見えてくる四角い建築物はコンクリートがむき出しの味気ないアパート群だったりする。

物悲しい、淋しい、沈んだ気分で窓の外を見つめた。

ホテルに着いたときには、すっかり暗くなっていた。

フロントにいたスタッフに、時間に遅れた理由を単語をつないで説明し、さっき渡された書類を見せた。

すると、目に涙をためて「大丈夫か」「痛くないか」と早口のイタリアンシャワーを浴びせられる。

どうにか言葉を拾って考えた。「遠い」とか「病院」などと言っている。もしかしてあの真っ赤なフィアットは救急車だったのか。

どっこい生きてやるぞ

舘野ひろ子

抗がん剤の治療は今度で三度目になる。
最初は胃癌だった。癌といえば死病とささやかれた四十二年前で、検査の方法も治療法もだいぶ違っていた。次が悪性リンパ腫で脾臓の摘出をし、三度目が脊髄内に悪性リンパ腫が再発した時。
昔の薬は今のとはだいぶ違う。現在の抗がん剤も辛くないとは言えないが、最初のころは副作用が強烈で、死んでもいいからやめてほしいと思うくらいきつかったし、副作用から肺炎となり、癌そのものより副作用で命を落とす人も少なからずいたようだ。かろうじて私が助かったのは、奇跡だと医師が言っていた。
そのころわが家には、小中高と三人の子どもがいて大学と高校の進学を目指していた頃であり、下の子は反抗期に入っていた。
そんな中での十か月にわたる入院だった。信じられないほど治療代はかかり気苦労を夫にはずいぶんかけたと思う。
疼くような痛みが私を苦しめ、もしかしたら私は駄目かもしれない、という不安があって、精神状態が尋常ではなかった。痛み止めや鎮痛剤がなくてはいられなくなってきていた。看護師や医師をつかまえては「注射をしてください。お願いします」
物乞いのように哀れな声で頼み込む日が続いていた。
「この注射は、麻薬です。続けちゃいけないんです。私をはじめ医者、教師、坊さんは我慢に弱い。今に薬局から薬を盗むようになりますよ。泥棒になりますよ。しっかりしなさい」
泥棒になると言った、担当医の辛辣な言葉は、忘れかけた自尊心を逆なでして、私の理性を奮い立たせた。
当時九歳だった末息子は、面会謝絶の戸の前に唇を噛んで、じっと立ち続けていたそうだ。家に帰ると机の下にもぐりこみ、膝をかかえてすわりこみ、だれが呼んでも出て来ない。大声で、
「お母さん死なないでよー」と、泣いたという。
「あの時の声が、何年経っても耳から離れない」と夫が言った。
それを聞いたお陰で、負けん気の強い私は奮い立った。
学校帰りに、カバンを背負ったまま、末息子は、毎日私の病室を窓下から三階の私の部屋を見上げているのに気付いた。
私は、じっとこちらを見上げている息子と目を合わせた。思いがけない私の出現に、大きな目をもっと見開いてから両手を振り回した。なにか怒鳴っていた。
いつまでも手を振っていたが、やがて、振り返り振り返り帰って行くのだった。
私は、その姿が見えなくなるまで、見送った。この出来事は一枚の絵となって今でも鮮明に頭に残っている。
元日には近くに住む息子家族と、祝い膳を囲み、その後は

ゲームをする。これは我が家の恒例の行事である。五十代の娘や息子たちが幼稚園生の頃から続いている。トランプ、花札、ウノ、人生ゲームなど。八十歳代の私も夫も、結構夢中になれる時である。

今から四年前、暮れに脳出血で救急車のお世話になった。三週間ほどで一先ず退院したものの、私の脳は、何をしてもテンポを合わせてくれない。持ち前の溌剌ばあさんでなくなっていた。

新年早々に行う恒例のゲームで、私がみんなの乗りに追い付けないことが分かって愕然とした。ルーレットが回せない、じゃんけんのリズムが合わない。たまに合ってもチョキのつもりが人差し指一本を出しているのに気付かない。興奮すると口から出る言葉が見つからない。呂律が回らない。笑い声、同情の声と労りの声に殊更、惨めな気分になったものだ。

台所仕事が好きな私は食事ごとに張り切るのだが、それも適わなかった。台所は寒いからダメ、包丁は危ないからダメ。器を準備しようとすると落とさないで、と声が飛んでくる。

救急車で運ばれたあの日の朝は特別寒い日だった。起きたとき体にどことなく違和感を覚えた。間もなく吐き気があった。いつものとおり息子の介護。息子というのは四十六歳の我が家の末息子のことだ。三十歳の時に自転車で信号待ち停車中、前方から来た車にはねられてしまった。脳挫傷だった。助かったとはいえ自力で出来ることは一つもない。かつて「母さん死なないで」と机の下で泣いたあの息子だ。そんな息子の世話を終え、朝ドラを視ようとして夫との話が口の中で空回りをした。舌がもつれる。履いているスリッパが脱げないで畳の上までくっついてくる。

「お父さん、何だか変」訴える言葉の呂律が回らない。焦るが言葉にならない。夫が慌てて近くの医院に助けを求めに走った。これが救急車に乗るまでの顛末だ。

被殻出血、私の病名である。二年前にもそれに近いことで入院したがすぐ回復したので油断があった。化学治療を要する病ばかり気にしていた。点滴に次ぐ点滴。これが私には辛い。悪性リンパ腫に罹っている私は、血圧は高くないのに血管が脆い。点滴がもれやすい。ぶすぶす針を刺される回数が多かった。脆い割に血小板が異常なくらい多い。そのことで出血も大事に至らなかったらしい。皮肉なことに、血液腫瘍で血管管理する脾臓を切除した功罪らしい。

あれから十か月、話も早口で話さなければ、他の人にはわからないほどになった。自分が思うほど呂律のまわりは悪くないらしい

あの時点ではどうなるかと不安があったが、思いのほか快方に向かっている。焦るまい、くよくよするまい。車に乗らず歩く。座ったら字を書き新聞を声に出して読む。

話のできない息子に話しかけるこれが格好のリハビリだ。黙って聞いてくれる。わかっているのかいないのか分からないがやたらに頷いている。この息子の為にも私はまだまだ動ける人間でいなくちゃ。

そんなとき、海の向こうでコロナ騒動が起きた。

私は持病が再発した。

その最中にこんな私と息子を残して夫が突然他界した。

「なんと家族孝行な逝き方だこと。あやかりたい」周りの人が悔やみの言葉に加えていう慰めの言葉だ。そこで私は生に執着する余力と抗がん剤を味方にしようと心に決め、そして強がりを言う。

どっこい生きてやるぞ。

小さな旅

宮部　紀子

耳に馴染んだテーマー音楽がテレビから流れてきた。「小さな旅」が始まったようだ。

聞くともなしに聞いていたら、「こいさご」という言葉をとらえた。急いで画面を見たらあの小砂、那珂川町の日本で最も美しい村とされている小砂地区の風景が映し出されていた。

数年前、一緒に歩いた友人を思い出し電話をしようとしたが、日曜の朝八時はまだ早いと止めて、仕事の手を休めて懐かしく見終えた。

その夜だったか、友人から電話があって、「小さな旅」の話。友人は放映に気が付いたのが半分ほど過ぎてからだったので電話をしなかったと言う。

お互い相手を思い出しながら見ていたのだ。

「思い出を共有していたのね」と、うれしい会話になった。

訪れたのは春、家々の桜は咲き満ち、庭には色とりどりの花が咲いている。人影の見当たらない昼下がり、穏やかな春の日差しの中、車を止めて歩いてみた。

春休み中の小学校の校庭の桜に幼い日を懐かしんだり、道端の小さい花に目を止めて摘み取ってみたり、遠い記憶の田舎を思い出していた。

小砂焼の製陶所にも寄った。初めてこの焼き物を知った時のものと少しも変わらない湯飲みなどの食器が、若い後継者も育って脈々と受け継がれている。うれしかった。

帰り道、村を離れるとき振り返って、

「本当に美しいわね！」と、二人同時に口にし、笑いあった。幸せな時間を過ごした。

この「小さな旅」の放映があった日の午後、ＦＭを聴いていたら、「いわむらかずお絵本の丘美術館」の話。岩村和朗館長とネズミの研究者との対談。ネズミ一家の絵本『十四匹シリーズ』が話題だった。

友人とはその美術館へも一緒に行っているので、それも話した。

「干柿、おいしかったね！」と、返ってきた。

干柿が簾のようにずらっと干してあったのだから、小砂の村を訪ねた日とは別の日だったのだろう。

館内を観終えて、お茶を飲もうとティルームに寄った。そのベランダに出ると、軒先いっぱいに干柿が並んでいる。

「あゝ、おいしそう！」と、思わず口にした。

「よろしかったら、どうぞ！」スタッフの優しい声。

ベランダから那珂川の流れる風景を見やりながら、おいしくいただいた。

『干柿の暖簾が黒く甘くなる』　山口誓子

この句の通り黒く、大きく柔らかく甘い干柿だった。
この美術館の記憶には干柿がくっついている。

お互い齢を重ね、一年とは言えず行動範囲が狭くなり、一緒に行くことも会うことも少なくなった。そんな友人と共通の映像を見ながら楽しんだ時間を共有できたのだ。うれしい発見である。

こんなことに感激している方が驚かれる時代かもしれない。オンライン飲み会などオンライン〇〇ばやりの昨今、実際に会えなくても、行けなくてもその気分になれるらしい。

しかし、そのような中で本物に触れた実感、感触をどのように身につけてゆくのだろうか。目的以外なものについでに目が行くという余計なこともない。オンライン配信で美術品は見られても、干し柿を口にはできないように。

オンライン授業も先生の教えはよくわかるようだ。が、隣に座っている友達が、先生の授業より面白い漫画や、先生の似顔絵など描いているのをみることはできない。余計なことは不必要なことではないのに。

今、「不要不急なことは自粛しよう」は、どれほど気持ちを苛んでいるか、段々にわかってきた。心が狭くなり、不寛容になっている。

ゆとりをもって八十路を迎えようと、数年前から心掛けてきたつもりだった。しかし、コロナ禍のせいばかりではないが、八十代は七十代の延長線上にはなかった。

年明けとともに身体が騒がしく右往左往していた。自分との付き合い方がよくわからない。

親しくアドバイスをもらっている医院の看護師長さんは、
「そうよ、そんなに簡単にはわからないのよ」と。
何しろ八十代は未経験のこと、甘くはないことだけはたしかである。そうこうしているうちに気が付いた。
「身体の調子が悪いばかりではないのね。八十歳の身体がこうなのね」
と、看護師長さんに告げたら、
「そうよ。ようやく悟ったわね！」
と、笑いながら返ってきた。

どんな八十路を歩いてゆくのか。八十年も生きてきた自分が心底愛おしい。

焦らず、悲しまず歩いて行こう。楽しい記憶も蓄えてきてあるはず。忘れるということもあるだろう。が、記憶には力があるのだから。

コロナ禍が少し鎮まったら、小さな旅に出てみよう。

＊ＮＰＯ法人「日本で最も美しい村」連合推奨
人・もの・自然が融和し、みんなで手を取り合い元気を生み出す町
『那珂川町小砂地区』と
『いわむらかずお絵本の丘美術館』へ

お墓の引っ越し

高橋　暁美

秋のお彼岸直前、お墓の引っ越しをした。

墓の移動のための、魂抜き、骨壺の保管はご住職が懇ろに作法してくれ、寺の用意した新造成地に五十六基が移った。

移転は、現状維持ということだったが、改修を願い出た。我が家の墓は、石段を三段上がってお参りするのだが、濡れると滑る石材である。元気なうちはいいが、足腰が弱くなる日も近いので、一段上がれば供花、焼香できるようにし、段は滑り止めをしてもらった。

反り返っている石灯籠の屋根も顔や背中をぶつけないように角を削ってもらった。

石材屋さんがとても親切で図面を作成して、何度も話し合い工事してくれた。出来上がった墓は、段差がなく、杖をついても車いすでもお参りしやすくなった。

五年前の盂蘭盆の準備もととのった八月十日、菩提寺から住職と檀徒総代一同による文書が郵送された。件名は『西側擁護壁付近の墓石移転計画の説明会について』とある。

寺院の、道路をはさんで東側にある広い墓地の一角西側は、土砂流失や地盤沈下が激しいことは見聞きしていた。「ああ、よかった」と安堵して文章を読み進め、半ばまで来て目を疑った。『この計画に合わせて境内十六基の墓地も移転の計画を立てました』と記されているのだ。境内が狭く人の出入りで混雑するからという理由だ。墓守をしている檀徒には有無を言わせない通達で、晴天の霹靂である。境内十六基のことは文書の件名には明記されていない、ついでの事案で納得がいかない。

文書を受け取ってから一ヵ月後の九月中旬、お寺での説明会は抗う余地のない報告会だった。

ゆっくり手足を伸ばして安眠している、ご先祖様たちを揺り起こしていいのだろうか。

もし電話でもいいから前もってお寺の意向が聞ければ、むげに反対したりしなかったのにと、悲しかった。

ご住職は温和な方で、説法を伺うと気持ちが和らいだ。お声が良く、読経は明瞭でありがた味がある。

大奥様は慈悲深く、住職夫人は優しく明朗なお方である。尊敬し、心が通い合っていると頼り、信仰心を自負していたのは、私の思い上がりだったようだ。

お寺は心安らぐ場所で、お墓に額づき日常の幸せを感謝して話しかけることで亡き人とつながっていると感じる心のよりどころだった。

「人は死ねば無になる。死者に気持ちなどない」という考えは私の中にはない。亡き人々がたとえ千の風になっても、夜

ゆっくり眠る場所は墓所と思っている。月に一、二度のお墓参りは、朝夕、家の仏壇に語りかけ合掌するのとはまた別の安寧をもたらしてくれる。墓参は世事に汚れた心が洗われてすっきりできる、かけがえのない暮らしの一部なのだ。

夫の一周忌が済んだ平成三年、法要の後、親族の間で、無念の交通事故死をとげた夫のために昔からの古いお墓を、一回り大きな石塔にしてはどうかという話がもちあがった。

昔ながらの小ぶりなお墓には母方のご先祖と、母の姉夫婦が入っていて墓守をしていた母が亡くなってからは私が守っていた。

一緒に眠っている伯母の、長男にお墓を改修したいと話すと、予想もしなかった言葉がかえってきた。

「あそこは、うちの親父が買ってお宅に貸しておいたんだから、もっと立派なお墓にしたいんだったらどこか他に移ったら」

驚いてお寺に尋ねると過去帳が紛失しているのでわからないとのこと。お墓が建ったころを知る人はほとんど他界していて、一人だけ

「姑から聞いているから、お宅のだと証明してあげるよ」

と言う従姉がいたがお墓のことで争いたくなかった。夫の死からまだ一年後で、作り笑いをし、砂をかむような食事をしていて無気力だったが、墓地を捜して六人のご先祖様たちに引っ越してもらおうと思いたった。

境内に一ヵ所だけ空いているのを見つけて、お願いに日参し、先代ご住職さまに借地権をいただいた。

「門外にもまだ空きがありますから、どうしても境内にというのならそれ相当の金額を申し受けます」

懇願してやっと建立にこぎつけたのだから当然のことだ。感謝して、承諾した。

石塔に巻かれた晒を娘がはずし開眼供養が行われた。高橋家代々のご先祖様がゆったりと眠れ、益子姓から高橋姓になってくれた夫が安眠できると胸をなでおろした。新しいお墓は日当たりが良く、本堂でご住職がお唱えするお経も聞こえた。三十台ほど置ける駐車場に近く、通路も広かった。水場が近いこともありがたく、私もゆくゆくはここに眠れると安心し満足していた。

それが、唐突に引っ越しだなんて腑に落ちない。広い場所にそっくり移し、費用はすべてお寺持ちと言うのだから素直に従えばいいのが、現在あるお墓に思い入れがある、私には一大事だった。

しかし、たかがお墓の移動に思い煩い、意固地になることはないのかもしれない。不満を募らせていて困るのは、お墓の中のご先祖様の魂だと思い至った。今安らかに眠っている霊が、私が悶々とした日を送っているために、迷ってしまったら申し訳ない。常日頃、彼岸に在す皆さんの御加護をひしひしと感じ、穏やかにひとり暮らしを享受しているのだから静かに事態を受け入れ、ご先祖の皆さんにはお寺が新たに増設した墓地に移っていただこう。流れに逆らうことは無駄だ。この機に、別途料金で改修をしようと決め、心が軽くなった。

秋涼の朝、新墓所で厳かな開眼作法が執り行われた。

根尾谷の淡墨桜

大野比呂志

根尾川にかかった橋を渡ると、広い駐車場にたくさんのバスが肩を並べているのが見えた。名古屋から岐阜県の根尾谷までは、長い道のりだった。淡墨桜との対面に期待をふくらませていた乗客たちは、それぞれに大きく息を吐きながらバスを降りた。

駐車場から高台へ上る狭い道は、人の列が縄のようにもつれ合いながら行き交っている。左側に軒を並べている店を斜めに見て、わたしたちは、淡墨桜に合うべく時計と反対回りに坂道を上っていった。丘の上では歓心の眼差しを中空に漂わせている人たちで波打っている。

淡墨桜は、咲き初めは薄桃色、その花は日を追って白に変わり、花びらが散るころには淡い墨色に変わるという。

歩を進めて近くへ行くにつれて、その威厳に満ちたゆるぎない姿に圧倒された。年に一度の晴れ着を纏い、淡墨桜は根尾谷を訪れた者たちに何かを語りかけているように見えた。

カレンダーの淡墨桜の写真を見て楽しんでいた母の姿が思い出される。生前に母がこの地を訪ねていたなら、どんなことばで老桜と対面したであろうか。母のことだから、散っている花びらを拾い集め、ハンカチに包んで大事に持ち帰ってきたかもしれない。それをテーブルの上に広げ、小さな体に詰めこんできた感動を、張りだした枝ぶりや花の香りが感じられるように語り聞かせてくれたに違いない。

淡墨桜は、一五〇〇年余りの昔、男大迹王（おおどのおおきみ）（後の継体天皇）によってお手植えされたものであるという。

仁徳朝が終わり、皇位継承をめぐる争いは熾烈を極めていた。大泊瀬皇子（おおはつせのおおきみ）の迫害を恐れた彦主人王（ひこうしのおおきみ）は、生後五〇日の男大迹王を草平、兼平夫妻に託された。初めのころは、難を逃れて尾張一宮におられたが、さらに越前の山奥に移られて隠れ住まわれたという。

山里の根尾は、曲がりくねった道をバスで行くだけでも隔遠の地という印象を拭いきれないところである。その時代、それほどの道のりを徒歩で移動することがいかに過酷であったか、想像するに難くない。

男大迹王がこの地で立派に成長されるまでには、根尾家のひとかたならぬお世話があったことだろう。

五十七歳のとき、武烈天皇が崩御された。しかし、天皇には子供がなかったので、男大迹王が擁立されたという。

即位するため、この地を去ることになった男大迹王は、村人との別れを惜しんで一本の桜の苗木を植えられた。そのとき詠まれたのが、次の一首であった。

身の代と遺す桜は薄墨よ
千代にその名を栄盛り止むる

太い枝は、その重みに耐えられるように、四十四本もの支柱が据えられている。とはいうもののその堂々とした風格は、観る者の心を圧倒せずにはおかない。観光客は、一様に淡墨桜の威容さに口をつぐんで眺め入っていた。老桜は、ときおり吹いてくる草笛の音色に和するかのように、淡い墨色の花びらをいちめんに振りまいている。

男大迹王が村人や根尾家の人たちと結んでこられた親交と忘れ難い数々の思い出を、いま淡墨桜は、その分厚い幹の奥深くに封じ込めている。

麗しさを振りまいていた昔の面影を残す淡墨桜だが、今はやや小振りになった花を身いっぱいにまとっている。老木の薄化粧の風情は、気品を漂わせていて飽くことがない。

八十をとうに過ぎたと思われる老人が、たくさんの柱に支えられた老木をいたわるような眼差しで仰ぎ観ていた。二、三十メートルも歩いた辺りからも離れ難そうに振り返っては眺めていた。

ある老婦人は、大樹を囲っている柵ぎわで写真を撮り、次には距離を置いたところから、またカメラを構えて何度となくシャッターを切っていた。

淡墨桜の息づかいを間近に感じ取ろうとする観光客は、ひきも切らさず訪れている。わたしが、遠いこの地を再び訪れることはできないかもしれない。だから、さまざまに場所を替えては眺め、老桜の姿を目に焼きつけたかった。

二〇一三年に上梓した『木漏れ日の中を』に収録した「淡墨桜」をお読みくださった大阪在住の根尾様からお手紙をいただいた。「淡墨桜は、わたしの実家の墓地に植えられているのです」とあった。

根尾様は、大阪にお住まいの歌人で、歌集も上梓されておられる。書名は『淡墨桜』。後日、その歌集をお持ちの方からお借りして、読ませていただいた。詠まれた歌から、淡墨桜の横に祖先の墓が並んでいることがわかる。

歌集には、次の歌が収められている。

根尾谷の淡墨桜いま盛り
千歳の巨き樹のつよきかも

墓参の折には、淡墨桜が見事に花をさかせていることをご先祖様にお話しされているにちがいない。

「今年も、淡墨桜が満開のときに行ってきました」

と、根尾様は溌剌とした声でおっしゃった。

歴史の彼方の物語が、途切れることなく清冽に織り込まれて今に継がれていることに、深い感動を覚えたのだった。

空いっぱいに咲きほこる淡墨桜とこの谷に生きた古人に敬虔な祈りを捧げ、帰りぎわにもう一度振り返って、全容を目に焼きつけた。

旅から戻ったわたしは、仏壇の前に座った。妻が買い求めた「淡墨桜」と命名されている優しい香りの線香を手向け、根尾谷の淡墨桜に出合ってきたことを亡き母に告げた。

線香の白い煙が、かすかに揺れながら桜の香りを漂わせた。

ほころび

押久保千鶴子

十二月の初めの頃（令和元年）である。友人の快気祝いを兼ねて、高校時代の仲間四人でランチを楽しむことにした。

師走にしては暖かな日である。主婦の集まりとしては、少々リッチなレディスセットを堪能することに。運ばれてきた器に盛られている品々を眺めていると、一人が突然、

「私、この頃何となく寒さが身に堪えるのよ。みんなは、そんなことないかしら」

と、切り出してきた。そのことばに一瞬お互い顔を見合わせた。私達の中で一番の元気者であった彼女から聞くとは思わなかったからである。学生時代から運動部に所属して、存分に体を鍛えてきたはずなのに……。

「何でなのか、自分でもわからないのよ」

そう言っては、室内は十分暖かいというのに、今脱いだばかりの上着をまた羽織った。

「うーん。言われてみれば確かにあちらこちらに故障が出てきたように思うわ」

別の一人が話を繋ぐ。病み上がりの彼女は、ゆっくりと箸を動かしながら、

「ところであなたは、体のどこにも悪いところはないのかしら、どう？」

不意に私に水を向けてきた。

「そうね……。しいて言えば今は頭かしら」

言い終わるや否や、誰言うとなく、

「まあ、この歳になるといろいろ出てくるわよ。時々、物忘れもするものね」

みなそれぞれ自分の現在の様子を言いだした。このところ、頭の右半分に今まで感じたことのない不快感に襲われている。偏頭痛と思い薬を服用するが、一向に改善の様子がみられない。年末が近付くにつれ、横になる時間が増え正月の準備もままならず、気持ちばかりがあせり出した。夫は暖かい日には、窓のガラス拭きを一人で奮闘している。私は、インフルエンザが軽く済んだばかりというのに、今だに治りきらないこの症状に困り果てていた。

年をまたいでも病魔は確実に進んでいた。令和二年の正月を迎えても、頭痛は時をおかずに襲ってくる。特に起床時は強く、午前中いっぱい気分の悪い状態が続き、何も手につかない始末である。それを紛らす手段としてあれこれ試みるが、どれも焼け石に水である。

ある朝、連続テレビ小説が始まったので、画面に目を遣るが音が耳に入ってこない。確かめようと、ややボリュームを上げると、夫は、

「何でそんなに大きくするの？」

と、けげんそうな顔をした。このときはじめて、自分自身の体に起きている異変の個所は耳であると確信した。

医師の診断によると、浸出性中耳炎という病名で中耳の裏に水が溜まる状態であるとのこと。このため、偏頭痛や不快な症状に悩まされていたのである。それまでも、内科をはじめ何軒かの病院を訪れてはみたが、耳鼻科とは気づかずじまいであった。正体はわかったものの、知らないうちに進行する恐ろしさも合わせて知った。それは、一場合によっては、手術も覚悟するように—という一言によるものである。通院治療を続けるうちに不快な症状も徐々に回復し、約一ヵ月半で何とか全快を迎えることができた。

しかし、夫にも似たようなことがあった。

去年（平成三十一年）の正月明けのこと。日頃は健康で、病気といえば二十数年前に大腸の手術をしたくらいである。

三連休の朝、食事の用意ができたのに起きてこないので、様子を見にいくと、顔を真っ赤にして唸っていた。

「ごはんですよ。早く起きて」

声をかけるも、蚊の鳴くような声で、

「いらないよ」

「えっ！いらないって、どうしたの？」

「頭が割れそうに痛いし、体も痛いんだ」

「熱は？」

「うーん、計ってはいないけど……」

熱を計ると、軽く四十度を超えていた。関節の痛みと熱の具合から、私自身が以前に患った症状とよく似ているので、

「多分、インフルエンザかもしれないわ」

と、話すが、今回が人生において初めて感染したと思われる夫には、たとえようもないほどの辛さ、

「こんなに熱が出るなんて、俺はもう死ぬのかよ……」

乾いた口で呻くように言うばかり。熱だけでは死なないと話すも、聞く耳を持たない。水分を摂って熱を下げるように説得するが、「いらない」の一点張り。若い時から、少々具合が悪くても三度の食事を欠かしたことのない健啖家なのに何も口にしないのが、かえって心配になった。

翌日になっても熱が下がらないので、発熱外来のある休日診療所を受診したが、ここも満員であった。二ヵ月ほど前にインフルエンザのワクチンを接種していたにもかかわらず、診断はやはりインフルエンザであった。免疫力が低下すると、型の違うウイルスに感染するという。

誰にでも体の不調はあるが、それは歳とともに加速するような気がする。

今は亡き実家の母は、高齢になるにつれて、私に、

「明日、病院へ連れて行ってね」

が口ぐせであった。「分かったよ」と、返事するものの、あるとき、たまりかねて、

「あんまり、自分で病気を作らないでよ」

と、何げなく言ったことがある。母は、即座に、

「おまえ、何言ってんの。病気なんて自分で作ることなんかしないよ。向こうから勝手にやってくるんだから」

私は、このことばに負けた。去年は夫、今年は私と年明け早々病気に振り回された。気持ちだけは若くありたいと思っていても、体は確実に歳相応にほころびが出てくるものであると——。

冬の旅

古谷　耀子

今年の梅雨のなんと長いこと。久しぶりに太陽が顔を出した朝、庭仕事にとりかかろうとテラスに置いてあったゴム長靴に右足を入れたとたん、踵にズキンと鋭い痛みを感じた。

「痛いっ！」

すぐに足を抜いて長靴のなかを覗くと、一、三センチばかりの、まだ枯れてはいない薔薇の小枝が入っていた。

〈何これっ？　どうしてこんなものが私の長靴に入っているのよ〉

予期せぬアクシデントに出くわして、ムラムラと怒りが湧いてくる。

そういえば数日前、夫が木ばさみで花の咲き終わった薔薇の枝を切り落としていた。それを花ばさみでさらに細かくして、ゴミ袋に入れる作業をテラスでしている姿も見かけた。

そうか、そのとき近くにあった私のゴム長靴に小枝が飛び込んだのだなと推測して、近くにいた夫に聞いてみると、「そんなこと知るわけないだろ」と取り付くしまもない。

私は薔薇の花が好きで、庭先に数種類を仕立てて楽しんでいるが、棘を恐れて手入れには皮製の手袋を使用するほどに用心深い。長靴のなかに棘が潜んでいたとは……。とんだ落とし穴にハマったものだ。

棘にこれほど過敏になったのは、母の知人が薔薇の手入れ中に、手の指に棘を刺して破傷風で苦しんだようすを目の当たりにしたのが原因で、それから長い年月が過ぎているのにいまだに忘れることができない。

棘を刺した右足の踵は、ズキズキとした痛みがなかなか取れない。家の中に入って、消毒薬を何度も傷口に塗り重ねてじっとしていた。

リビングのガラス戸越しにぼんやりと庭木をながめていると、薔薇の棘と破傷風のことばかりが頭に浮かんでくる。

破傷風から、立原正秋の小説『冬の旅』へとつながっていった。

その晩、書棚から『冬の旅』を探し出して読み始めた。

『冬の旅』では、主人公となる十代の少年が、母親をかばって義兄を刺し、少年院へと送られる。少年院の日課で畑を耕しているとき、足に怪我を負い破傷風菌に侵されて命を落とすという筋書き。

以前に読んでいるのだから筋書きはわかっているのに、美しい文体と、ドキドキするシーンに引き込まれてなかなか本を閉じることができない。眠りについたのは、日を跨いでからとなった。

翌朝いつも通りの時間に起床すると、短い睡眠時間でぼん

やりとしている頭に昨日の棘の記憶がよみがえった。右足の踵に神経を集中して、おそるおそる立ち上がると痛みは昨日よりはだいぶん引いている。

〈小説の中の少年は、怪我をしたその晩に命をおとすのだから、いま息をしている私はもう大丈夫〉

そう思うと、がぜん元気が湧いてきた。そそくさと朝食を済ませて、少々痛む右足をかばいながら草取りの段取りをした。

長引いた梅雨で土はやわらかくなっているし、雑草はひょろひょろと丈だけが伸びている。鎌の刃先を根元にちょっと当てて持ち上げるとすぐに引き抜ける。作業が順調にはかどることから気持にも余裕がでる。手を動かしながら、昨晩読んだ小説『冬の旅』の余韻に浸った。

この小説には少なからず思い入れがある。三十代のころにテレビドラマ化されて、題名は小説と同じ『冬の旅』だった。主人公で正義感の強い少年役には「あおい輝彦」が、その母親役として「久我美子」が演じていた。

私は久我美子のくぐもるような声での落ち着いた話し方や、愁いを帯びた上品な面持ちに惹かれていた。

実家の母のふとした表情が、どこか久我美子の面持ちに似ているように思え、より親しみが増したのかも知れない。

東京で育った私は、結婚と同時に夫の実家の宇都宮で暮らし始めた。義父の起こした食品の加工業を手伝っていたが、新しい土地での生活になかなか馴染むことができないでいた。

実家の母に会いたい思いが募っても、仕事のやりくりや同居している婚家の両親に気兼ねしたりと、思うように行き来のできる状況ではなかった。

そんな事情もあって、テレビドラマのなかで母親役の久我美子と、実家の母親とが重なって、週に一度の放映の日を心待ちにしていた。

ドラマのＢＧＭには、ずばりシューベルトの歌曲『冬の旅』が流れていた。少年の若々しい正義感と、母親の息子を思う切なさとが哀愁を帯びた曲調によく合っていた。

草取りをした翌日から、また雨の日が続いた。所在なく家の中で過ごしているときに思いついて、長いあいだ聴くことのなかったシューベルトの歌曲集《冬の旅》のＬＰレコードをラックから取り出すと、直径三十センチもある大きな盤の上にそっと針を乗せた。

友の国で

藤田　香月

「さあ、降りましょう！水を持ってね。」
ランドクルーザーが止まると、モノラマさんは私を促した。
ああ、とうとうこの地に来ることができたのだ。
緊張しながら私は、長い間願っていたその地に立った。

一九九四年十二月二十九日の夕暮れ。そこはバングラデシュのモエナモティ（マイナマチ）にある英国兵士の墓地。その一角には日本兵士の方々も眠られているという。
このことを知ったのは、一九七七年（昭和五十二年）十一月二十五日（金）の朝日新聞からであった。
「インド亜大陸　アジアハイウエー二万五千キロ第二部」
偽りの名残して
枝葉を広げたネムの大木にやさしく抱かれるかのように、二十四人の日本兵が眠っていた。……と。

モノラマさんはバングラデシュの人で、私の初めての外国の友人。彼女はアジア学院の卒業生（第四期生一九七六年）で、竹工芸の八木澤啓造先生の紹介で知り合った。ご主人のデービットさんもアジア学院で学び、共にＮＧＯワールド・ビジョン・バングラデシュの職員として活動していた。
前の車からはデービットさんも降りていた。暮れかかった中、なだらかな丘には沢山の墓碑が、白っぽく整然と並び、所どころの大樹は太い幹と枝葉とが、影絵のように浮かんで見える。だが墓地にはフェンスがあり鍵がかかっていた。
着くのが遅かったと思った。前日から私たちはコミラ県に来ていて、デービットさんの故郷、バコイ村の開発プロジェクト（建設中の学校、ブリック《レンガ》工場での手作業による型取り、協同組合など）を見学。ワールド・ビジョン・ジャパンのチャイルド・スポンサーシップで支援の少女、ラベヤちゃんにも会うことができた。大きな遺跡や資料館にも立ち寄って来たのだった。他に三人の女性（ワールド・ビジョン・ジャパンの海外協力員、新川代利子先生《当時ダッカ在住》、小田原教会の藤波賜保さん、英国人ボランティアのベティさん）も同行していた。ダッカに戻る途中、私のために墓地に寄ってくれたのだったが。
フェンスの外から手を合わせて……と諦めかけたとき、アッサンが何か叫びながら走って来た。アッサンはその年のアジア学院研修生で、十二月の卒業式後に帰国していた。彼は墓守りの人を探し連れて来てくれたのだった。
「アッサンありがとう！ほんとうにありがとう。」
私はひとり墓地の中に入り、右手の一角にある日本兵一人一人の墓碑に、日本から持参した缶入りの水をそそぎ、指先

ほどの小さな石を傍らの土の中に忍ばせて、手を合わせた。
墓碑の刻字面は黒っぽく次第に見え難くなったが、確かに、ＡＳＯＬＤＩＥＲ（一兵士）と刻まれた数名の方々がおられた。今の世でも遠いこのベンガルの地に、名を伏せて眠る日本兵の方々がおられるのだった。

翌朝、ダッカのアパートで、デービットさんが墓守りの人にチップを渡してくれたことを知った。お礼を言うと彼は「郡司さんの願いが叶って私も嬉しい。墓守りもチップを貰って喜んだ。みんなハッピー！」と言ってくれたのだった。

バコイ村では他にも忘れられない思い出がある。
村に泊まった翌日の昼食時、テーブルにはモノラマさんと村人で料理された魚の大きなミンチボールが大皿に盛られていた。私はその一つを取り皿に移そうとしたのだが、どうしたことかミンチボールは土間に転がってしまった。すると、隣にいたアッサンは素早く手で拾い上げ、自分の皿に置き、私の皿には別のミンチボールをのせてくれたのだった。
ミンチボールのための魚は、その日の早朝、村の人たちがルンギ（男性の腰布）をまくり上げて、まだ冷たい沼の中に入り、網で捕ってくれたもの。網には沢山の魚やエビが掛かったが、その中から五、六十センチの魚二匹を残し、他は沼に戻したのだった。
私はアッサンの咄嗟の行動に驚き、同時にとっても救われた思いがした。またバコイに泊った夜、私たちの休む小屋の外には、寝ずに警護をしてくれた村人たちがいたということを後から知った。「今はこの村には、ひとりの物乞いもいなくなった。」と言うデービットさんの言葉も胸にしみた。
ダッカに向かう車の中では、英語もベンガル語にも堪能な新川先生から、十八年前、モノラマさんが帰国の折持ち帰った編み機は、今も大いに役立っていると知らされた。使わずにあった編み機を私がプレゼントしたのだったが、こちらで活かされていると知り嬉しく、またありがたくも思われた。
モノラマさんはバコイを訪ねるにあたり、毛布やフライパン、お皿や食用油、トイレットペーパーなどを車に積み込み、私たちの旅に備えてくれていた。ジャックフルーツを見たことがないと言うと、デービットさんはどこからか、五十センチもある大きなジャックフルーツを見つけてきて、生（な）り口から塩を入れ、二日間ベランダに置き熟してから味見させてくれたりもした。
友人たちに守られての旅であったと深く思う。

帰国のとき、ひとり飛行機の窓からバングラデシュの大地をみつめていた。
太陽がずっと後を追ってくる。目を横にやると、本物の太陽は別にあった。二つの太陽を観る。水面に映った太陽はずっとずっとついてくる。大河ジョムナ（ブラフマプトラ川）とガンガー（ガンジス川）とはバングラデシュで合流し、ベンガル湾に入る。二つの大河の水量が多い時、サイクロンに襲われると、国土の三分の一が水に浸ってしまうこともある。
友の国をお守りくださいと祈る。
アマル　ショナル　バングラ（我が黄金のベンガルよ）
アバール　デカホベ（また会いましょう）
アバール　デカホベ！

今年もまた、秋

国井　和子

庭先の白萩が満開になっている。上に伸びた細い枝垂れ枝が傘を開いたように広がって、純白の小花がぎっしりとひしめいている。今年は気候のせいか花落ちが早く、枝の下の地面は落ちた花びらで、ところどころ白く見える。

「今年も白萩が見られたな」

夫は外の縁台に座って去年と同じ言葉を言う。

この花は夫が会社の同僚から苗を分けてもらって大事に育て、今では二メートル近い高さになっている。

白萩が咲くころは、夏のきびしい暑さが少しやわらいで、老齢の身には、何とか夏を乗り越えられたという気持ちの落ち着きがある。

足腰が弱って簡単に旅行にも出かけられないから、花木の鮮やかな色彩や、草むらの中からいつの間にか芽を出している、可憐な花の発見が小さい楽しみになる。

今年は梅雨が長く、急にやってきた猛暑で雑草の伸びがすごい。草ばかりでなく、ツゲやドウダン、松なども、自由に枝葉を伸ばし放題である。庭を眺めるには、まずこれらの手入れが必須事項だ。

私は雑草取りに草刈り鎌を使う。地面に当たる刃の面積が小鎌よりは広いので、少しは能率がいいかな、などと思い、二、三挺手元に置いて、切れなくなると取り替えながら仕事をする。

少し前までは夫が鎌を研いでいた。かなりうまく研ぐ。しかしこのところ体力が無く、度々入院している身には力のいる仕事ができない。私がやってみたが、どうもうまくいかず切れ味が良くない。

二宮尊徳は「草を刈らんと欲する者は草に相談するに及ばず。己が鎌をよくとぐべし」、と言っているが、使う道具は、その目的を十分に果たせるように整備しておく必要がある。

最近は研ぎ屋さんがあまり無い。ホームセンターへ問い合わせると、刃物研ぎは扱っていないが、砥石のいいのが何種類もあるので、それを試してみてほしい、と言う。

困っていると近所の大工さんが、隣町にある刃物店を教えてくれた。

さっそく草刈鎌十挺ほど持って頼みに行くと、二、三日後にかなり切れる鎌になって戻ってきた。切れ味がいいとやはり仕事の調子がちがう。だが鎌は切れても、私の体力がそうは続かない。一日せいぜい二時間ぐらいである。毎日頑張っても草の伸びに追いつかない。疲れてしまって、除草剤をいっきに撒いてしまおう、と思ったりする。

しかし、庭のあちらこちらに芽を出す茗荷や青紫蘇、コスモス、小菊などの命を断ってしまうことになるので、それも

できない。
四月から五月にかけて、濃いピンク色が見事だった芝桜の群が数か所あるのだが、それらがいつの間にか葉草の中に隠れている。根をかき分けながら、芝桜の根を抜かないように注意して葉草を取る。根気がいる。
雑草類が無くなると、芝桜の緑がふわっと柔らかに、元気を見せたように思える。心がなごみ、首筋や背中に流れる汗の冷たさを一瞬忘れる。
畑の作物でも野の草花でも、人間の手が入るということは、想像以上に大切なことなのだとわかる。
山林なども、まったく手入れができないから、荒れ放題になっている。たけのこの季節になると山へ入るが、毎年何本かずつ大木の根元が腐って倒れている。下草刈りも小枝の伐採もしないから、根を張る力が無くなっているのだ。
こういう状態が、山崩れなどを起こす原因になるのだろう。

日中の暑さが少し凪いで、涼しい風が出てきた夕方の五時過ぎ、近くに住むAさんがやってきた。ちょうど食べごろに育ったから、と言いながら、黒い根土がごっそりとついた生姜を五、六株渡された。生姜特有の辛い香りが周りに広がる。
「だんなさんの調子はどうかね」
Aさんは見舞のことばを言った。夫とは五年位前までゴルフ仲間だった。
夫を呼んで玄関先で茶を飲んだ。夫はあまり話をしないので、もっぱら私が話し相手になる。
Aさんはコロナ予防のマスクを器用にずらしながら、茶菓子をうまそうに食べる。
「季節の変わり目は年寄りには鬼門だね。去年の今頃は、友達が二人も続いて逝っちまったから、いよいよ俺もか、と落ち着かなかったよ」
Aさんも夫も八十歳後半で、去年亡くなった人たちも、同じくらいの年齢だった。元気なころは私の家にもよく来ていて、病気や薬の話で盛りあがっていた。
「咲いた花は必ず散る、と言うしね。人間も生まれたらいつかは死んでいくんだから、仕方ないけどね」
Aさんは妙に無常を言う。
彼は電気工事の仕事を長く務め、定年後はシルバー人材センターで働いていた。がっしりした大柄な体格と、張りのある大声で話す様子からは、人生終末の話は似合わない。
「元気でいいね。私はこのごろ、目の前の物の名前さえなかなか出てこなくて」
夫はよく話すAさんに細い声で言う。そういえば、昨年も生姜の香りの中で、同じような会話をしたのを思い出した。その時は、白萩と薄ピンク色のコスモスが同じ方向に揺れるのを、外の縁台で見ていた。
Aさんが帰った後、細めの生姜を選んで味噌をつけて食べた。
「去年と同じ味だわな」
夫は安心したような口調で言った。
季節のめぐりがもたらす秋の味を、来年もまた無事に味わえることを願うばかりだ。

大きなもの

五反田キヨ

うらうらと穏やかな日差しがうれしい。それだけで気持は束の間の憂世脱出。

新型のウイルスとか、早朝から延々と報道され、まして高齢者は！　と付帯事項がつくと、身の置きどころがなくなる。

報道とは裏腹に目を転じると、赤や黄色、淡紅色と庭先や道端の草花が明るい光をともしてくれる。

「河原の流木あたりに人が集まっているよ。桜が咲いているらしい」。

玄関先から夫の声がした。近所のウォーキングから帰ってきたのだろう。

場所を聞かずとも、わたしにはすぐわかった。（待ちこがれたニュースだ。やっぱり今日はなんといい日だ）

黒川の西堤沿いは車道になっていて、大型のスーパーや美術館、市立図書館などが建てられている。人々の往来も多い。

花の季節には、美しいトンネルになる。河川敷には子供達の遊具、大きな花壇には花いっぱいの楽しい場所になる。

ところが、昨年の十月、台風19号の通過で護岸が崩壊し、堤沿いは被害を受けた。年代を経た見事な桜が根こそぎ濁流にさらわれてしまった。現在も崩れた個所は通行止めになっている。被害の少なかった建物は営みを復活できたが、濁流にさらわれた五本のソメイヨシノは育てられた土に帰ってこない。

その現場は、我家の食料品や日用品を調達するスーパーの前で、河川敷に流されたままの桜の木の姿や瓦礫や土砂の散在をいつも目にしている。

川風が強いと桜の枝が揺れ、五本のソメイヨシノは、少し離れたり、寄り添うように土砂に動かされたりと、まるで生きているようでハッとさせられる。昼下がりや夕暮れにその姿を目にすると、どうしようもない虚しさが、わたしの足を止めさせる。痛みが胸を突いてくる。

夫の声にわたしは河原に急いだ。

桜のまわりに数人の人影が動いている。だが、わたしは河川敷に降りられない。黄色のテープがどの階段にも張られ、禁止の札が下がっている。

傾きはじめた夕陽を受けて、桜の枝に白く淡いものが見えるだけ。こんなにも恋しいのに桜の花に会えないなんて――。

（そうだ！　明日は朝早く来よう。朝日の光の中に生きている花の姿に手を合わせたい）

けれど、侵入禁止のテープはしっかり巻き付けられていて河川敷にたどりつけない。入っている人もいたが、足元に不

安のあるわたしには無理ができない。
　毎日繰り返しているわたしに、ある方が下野新聞の記事を持ってきてくださった。
「流されても春忘れず　台風19号被災の桜開花」と見出しに河原に咲いたソメイヨシノの花のカラー写真である。
　二つの大きな橋の間にある数百メートルの河川敷、上流の橋をくぐり抜けたが、下流の橋はくぐれず動けなくなった。石と川風と星と冬の太陽の下で「いのち・生きる力」を守り通した紅色の花びら。瓦礫を超えた気品に満ちている。
　花の向こうに何か大きなものを感じた。

『とおいところ』　まど・みちお

ゆうがたの
ひさしの　そらを　みあげると
くものすに
カと　ならんで
ほしが　かかっている

ああ
ほしが
カと　まぎれるほどの
こんなに　とおい　ところで
わたしたちは　いきている

カや
クモや
その　ほかの
かぞえられないほどの
いきものたちと　いっしょに

大きいものを思うとじーんとなる。
こんな時はまど・みちおの作品を読みたい。

――世界の、宇宙のどの部分を切り取ってみても、そこには世界全体、宇宙全体、無限の時空がひそんでいる。一粒の砂に一つの世界を見、一輪の野の花に一つの天国を見、……――

オレ

お気に入りの席が塞がっていた。
二十代のカップルがおしゃべりに夢中になっている。
Yさんは仕方がなく入口のテーブルの席に腰を下ろす。
「オレの席に先客がいたんじゃ、しょうがないな」
テレビ前のテーブル席は彼女の指定席だ。
カップルに聞こえるように放った。カップルは全然気にする様子もなくひたすら二人の宇宙に浸っている。
Yさんは食事よりビールを飲みに来るのだ。
六十代の女性が付き添ってくる。二人は仕事仲間とか言っていたような気がする。彼女はグレーの作業着をきていた。職人のような格好だ。例えば植木職人とか。
ビールの栓を抜きながら、
「今日は仕事休みですか」
と振ってみた。
彼女は普段、茄子栽培の農家に手伝いに行っている。
「今日は雨降りおことだよ」
「そうですか。それにしても元気ですね」
「オレか、バカだから年を取らないんだよ」
きつい冗談が飛び交った。冗談にうっかり乗ると後でしっぺ返しが来るから冗談にのらないようにしている。
「オレは昭和八年生まれだよ」
「するととり年ですか」
「そうだよ。とりだから二、三歩動きだすと忘れてしまうんだよ」
「私の一番上の兄も昭和八年なんです。もう亡くなってしまったけど」
「いくつで」
「七十四歳かな。肝硬変だったんです」
「オレは今年で八十七歳になるんだよ」
と、長男が降りてきた。私とは十六も離れているから兄弟といっても実感がない。一緒に生活してないからかも。
記憶にある兄は小学生のころ正月に土産をいっぱい抱えてきた。一緒に都会の夢の匂いを運んできた。そして、一晩中、都会の夢の香りをまき散らした。その晩は都会の夢に酔い潰れた。
オレも卒業したら都会に出て、いっぱい稼いで親を楽にさせたい、と強く思った。兄に小遣いももらった。あの当時の金額だから百円ぐらいかも。
長男は父と反りが合わないのか、帰って来ても口を利くことはなかった。長男は農学校を卒業して直ぐに、都会に出て行ってしまった。本当は農学校で学んできた果樹園をやりたかったようだが、父の猛反対で断念したとか。

国母　仁

父が亡くなるまで蟠りは解けなかった。父の葬儀にも姿を見せなかった。

とうとう、二人の深い溝は埋まることはなかった。

すると、Yさんがいきなり吠えた。

「オレは今日、家の周囲の雑草をかってきたんだ。疲れたよ。だから一杯呑みに来たんだよ」

「何で刈ったんですか。鎌ですか」

「今時、鎌で刈る人はいないよ。草刈り機だよ」

「草刈り機ってかなり重いですよね」

「オレは何年もやっているから、ヘッチャラだよ」

まるで草刈り機に刈り取られるように、あっさり刈り取られてしまった。

「息子は会社に行っているから家のことなんか全然やらない。オレがやるしかなかんべ」

今度はグラスを手元に引き寄せ、口元にもってゆく。

「マスター飲めるんだろう。一杯やりなよ」

「いや、飲めないんですよ。飲むと眠くなってしまうんです」

「オレも四十歳ぐらいまでは飲めなかったが、兄弟会に出た時、兄貴に勧められてから飲めるようになったんだよ」

その点、私はいくら訓練しても飲むたびゲロを吐き続けた。

高卒後、銀座八丁目のレストランに就職し、初めて先輩に飲みに連れて行ってもらい、注がれるままに飲んでいるうち、気持ちが悪くなり、とうとうゲロを吐いてしまった。

やっと、寮に辿り着いても、ゲロを吐き続けた。胃の中に何もないのに吐き続けた。あの時の苦しさは忘れることができない。アルコールが体質に合わない人間もいるのだと認識させられた。

Yさんがほろ酔いになってから、気になっていたことをぶっつけてみた。

「Yさんはずっと、オレで通してきたんですか」

「そうだよ、子供の頃からだから、今更、わたしなんて恥ずかしくて言えねえよ」

そう言えば、子供の頃は女の子もオレと言っていた。

私なんてハイカラ言葉を使う人はいなかった。わたしなんて言ったらからかわれ友達に仲間外れにされたかも。

オレが堂々と市民権を得ていたのだ。

「マスター、オレは飲むとカラオケで歌いたくなるんだよ」

彼女のオレには昭和の匂いが纏わりついていた。

名前の由来

水野　弥彦

世界自然遺産に登録され、世界中の人々から敬愛される、その優美な姿は、まさしく日本人の誇りでもある、あの富士山。山好きの私には〝美しい〟と思う気持ちの反面『親父の命を奪った山』という特別な感情が常に頭の片隅をよぎることがしばしばだ。その嫌な思い出が脳裏から離れないのが、最大の理由であろうか。

その親父は四人兄弟の末っ子。明治三十四年生まれで静岡県藤枝市岡部町子持坂の実家で義務教育まで過ごし、その後は兄（三男・のちに日銀マン）と共に上京、「これからは語学力を身につけなくては……」と、働きながらＹＭＣＡ（語学学校）で英語力をマスターするなど、勉学に励んだ。その余暇を活用しては陸上競技、取り分けマラソンなど長距離に打ち込んだ。当時、マラソンの分野では〝日本のマラソンの父〟と呼ばれた金栗さんの右に出る者はなく、ほとんどの選手がこの人を常に目標にしていたそうだ。何しろ、その頃、マラソンで三時間の壁を破った記録を持つ者は、日本国内では、この人を置いて他には誰一人としてなく、まさに〝雲の上の人〟とは、親父から良く聞かされていた話だった。

親父も、それなりに一生懸命に努力を重ねたようで、それでも「どうしても三時間の壁は破れなかった」が、よく耳にした口癖。それでも三時間二～三分台の記録は出していたらしく、日本の上位グループにランクづけされていたそうだ。二十歳半ばを過ぎた頃、商売のノウハウを身につけて独立し、生活環境が大きく変化して、陸上競技から遠ざかっていく。そんな折、知り合いの医師から「これまでハードなスポーツを続けてきて、生活環境が変わったからと言って、急にそれを止めてしまうのは、健康上よくないから何か別のスポーツを探して続けなさい」との助言を受ける。

そして始めたのが、山登りだった。いわゆる登山である。当時の日本の登山界は、日本アルプスや奥秩父などに未知の領域も数多く、まだまだ〝黎明期〟の域を脱し切れていない時代。親父は仕事の合間を見つけ出しては、単独で半月ほどを費やして入山、未知の領域を好んで歩いていた。南アルプスの赤石沢や聖沢、奥秩父の谷などに好んで入り、現地でベテランの岩魚師を雇い、ルート案内に使ったようだ。雨露を凌ぐ程度の〝簡単な小屋〟は瞬く間に手作り。寝袋や雨具のほか、食料も米・味噌・塩・油・醤油などの最低限の品物以外は、ほとんど現地調達。まるで原始人のような生活をしながらの山行。今日のように何でも現地の情報が入手できる時代ではなく、交通の便も決して良くない。

現地の情報が乏しい時代、深い谷や山行を重ねるには「現地の谷など限無く歩き、その山域の事情を知り尽くしてい

る」そうした岩魚師の情報を頼りに彼らの経験と知識を大事に活用して歩くのが〝最善の策〟だったようだ。だから、中央線の列車内などで大きなザックを背負った登山者を見掛けると、お互いに声を掛け合って、知り得る限りの山の情報を交換し合い、それを次の山行時などに生かしていたらしい。

親父が、そんな風にして知己になった山仲間の一人、ジャーナリストで有名な登山家（元日本山岳協会会長、元日本山岳会副会長、早稲田大学山岳部ＯＢ）渡辺公平氏とは実に親しい間柄だった。当時、居住していた牛込（現在の新宿区）の自宅は、そんな若い山仲間が始終、訪ねてきては〝山談義〟に花を咲かせていたとは、お袋からよく聞かされていた話だった。そんな話の中で、よく出ていた話題の一つが「子供が生まれたら、男の子には、こんな山の名前を付けたら、どうだろうか」なんていう話題が飛び出したという。

実は、その折に話題に上がっていた山の名前を、いち早く男子が出生した、わが家の兄弟全員に山に因む名前が付けられた。親父が一人で考え付いたものではなく、山仲間のお知恵を拝借し、いわばその〝結晶〟が当家の兄弟に付いたという次第。因みに具体的に紹介すると、まず長男。日本で一番高い山、富士山に因んで「不二夫（ふじお）」、次男は北アルプスの盟主・穂高岳そのままに「穂高（ほたか）」、三男は南アルプスの聖岳登山で誰もがよく利用する幕営地・聖平（ひじりだいら）を拝借して「聖平（しょうへい）」、ここまでは日本百名山に名を連ねた三千㍍級の山々。

しかし四男の私の場合は、高度を極端に下げ一千㍍未満の山。新潟県は日本海に面した越後一ノ宮で知られた彌彦神社の境内から登る弥彦山（六三八㍍）、麓から山頂直下まではロープウェイも利用でき、歩いて登らなくとも一気に山頂近くまで到達できる便利の良さ。一般の観光客が目立つ山でもある。この山に因んで「弥彦（やひこ）」が付けられた。私の兄弟には、一人だけ妹がいる。これもやはり山に因んだ名前が付けられた。南アルプスは甲斐駒ヶ岳と鳳凰三山を結ぶ早川尾根の中間に位置する独立峰・アサヨ峰。これを「浅夜（あさよ）」と漢字に置き換えた。さらに親父は単に自分の子供達だけに山に因んだ名前を付けるだけでなく当時、自らが営んでいた会社名にも山に因んだ名前を付ける徹底ぶりだった。よく好んで歩いた奥秩父の山々、その中でも山頂に立派な五大岩を持つ、代表格の金峰山（二五九九㍍）に因んで、何と「金峰社（きんぽうしゃ）」と名付けてしまった。正に〝山キチ〟の誉れ高き登山家であったといえようか。

生前、お袋がある日、こんな言葉を口にした。「父さん、十月に単独で長野県の戸隠山（一九〇四㍍）に登ってきたでしょ。ところが岩場に掛かる長いクサリ場で、右肩の具合が悪くて危なかったみたい。そう言えば、父さんね、余り口にしたがらないけれど、どうも〝五十肩〟らしくて右手が十分上げにくいみたいなの。来月、また一人で冬の富士山に登っておきたいというのよ。その時には心配だから、お前、なんとか父さんの山行に同行し、サポートしてもらえないかね」

数日後、私の通う高校山岳部の先生に相談し、平日の三日間程の特別許可を貰い同行することになった。

その親父は、私と一緒に登った昭和三十一年十一月中旬の富士登山で、山頂にあと一歩という九合五勺付近で滑落し、二度と帰らぬ人となった。年間四、五十回の山行を重ねる私にとって、この経験は決して忘れることのできないものだ。

『エール』の背景

小島　延介

ＮＨＫの朝ドラ『エール』が帰ってきた。作曲家古関祐而の生涯を描いたドラマで、彼の作曲した曲がたっぷりとバックグラウンドに流れて懐かしい思いに浸っている。

四月から順調にスタートしたが、新コロナウイルスの感染拡大で休止となり、九月から再スタートとなった。ちょうどドラマは昭和の戦時体制を濃くしていった時代で、記憶の底に眠っていたラジオで覚えた数多くの曲が蘇ってくる。

彼の出身地福島市の中心部には古関裕而の偉業をたたえる「古関裕而記念館」が建っている。

昨年夏の一日、私はその記念館へ立ち寄った。耳に残る快いメロディーを聴きながら二階に上がると、夏の甲子園でお馴染みの「栄冠は君に輝く」や、早稲田・慶応両大学の大学のそれぞれの応援歌などに混じって、いわゆる軍歌までもが静かに流れていた。

題名こそ浮かばないまでも、自然と口ずさむことができる曲ばかりだった。

売店で自伝『鐘よ、鳴り響け』（一九八〇年四月刊）を買って読むと、戦中から戦後までの幾つかのエピソードが載っていた。

古関は一九四三年に「若鷲の歌」（西条八十作詞）などと日中戦争から太平洋戦争にかけて、出征兵士を送る歌や銃後の士気を鼓舞する歌を作曲し、ついには「撃ちてし止まむ」といった本土決戦を賛美するような歌まで手掛けていた。

自伝では、これらの作曲で「戦後は戦犯だなどとさわがれた」と書いているが、結局は何らの指弾も受けることなく、戦後も引き続いてヒット曲を量産している。

私はここで、「戦争画」を調べている友人の話を思い出した。太平洋戦争では多くの画家が従軍して最前線に派遣され、数多くの戦争画を描いた。それらの絵は敗戦と同時に占領軍に接収されて忽然と姿を消した。一九七〇年にようやく国立近代美術館に返還されたものの、今もって周辺各国への配慮や画家とその遺族の自責の念で大規模な公開は拒まれているという。

戦争を賛美したいわゆる軍歌も、それと同じような運命にあってもおかしくはないはずなのに、古関の歌はまったく不問に付されているかにみえる。私はこのあまりにもかけ離れた戦後処理が不思議に思えてならなかった。

古関も何度かカメラ持参で戦地や戦跡に出向いて悲惨な光景を目の当たりにし、

「私の作った歌によって、兵士が戦いの疲れをいやし、気持

ちが和み励まされていることを知って、作曲した甲斐があったとしみじみ感じた」と書いている。

この言葉からは、戦争へ協力したという意識はあまり感じられない。国民大衆の我慢や苦しみをやわらげ、戦場の兵士を慰めることに貢献したとの自負さえ感じられる。

戦争責任についての受け止め方や反省の濃淡は、このように画壇とはあまりにも違っている。この落差は大きい。

私は一つの仮説をたててみた。一つには絵と歌との基本的な違いが浮かぶ。

絵は立ち止まっているのに、歌は動き回っている。絵は視覚を通して静かに語りかけるのに、歌は聴覚を通じて遠慮なく侵入してくる。占領軍は、じっとしている絵は接収できたが、動き回る歌には手が付けられなかった。このことが戦争への介入という気持ちを、画壇では「罪を犯した」と固定化し、一方では大衆を「慰め励ました」と流動化したように思える。

権力が歌や絵や文を通して大衆を掌握しようとするのは、歴史が証明している。それでさえ権力の意図とは反対方向へ静かに浸透していくことだってある。

そのどちらの濃度も、歌は絵よりも、文よりも、明らかに濃い反面、大気中の浮遊物にも似ていつの間にかどこかへ流れ行く運命にさえある。

「軍歌も戦時中の流行歌と考えれば『歌は世につれ、世は歌につれ』、そんな深刻に考えるものではない」

館内に掲げてあった微笑みの古関の写真は、こう主張しているかのようだった。

お好み焼き

関根　喜久枝

夫が好きなお好み焼きは二人暮らしになった今でも良く食卓にのぼる。お好み焼きは結婚以来内容を変えながら作り続けてきた。夫は食事には余り文句を言わない。出された料理は大体黙って食べてくれる。但しお好み焼きだけは「今日は少し粉が多いなあ。え、かつおぶし買い忘れたの」と注文が多い。

子供の頃東京の下町に住んでいた。両親が営んでいた工場が休みの日に、お好み焼き屋に連れていってもらった。家族五人でめいめい好きなメニューを頼んだ。弟は「豚玉とイカ玉」、私は「ホタテとエビ」。

注文すると一人分の分量が小鉢に入れられて運ばれてくる鉄板の上にジュウジュウ音を立てながら焼いた。外は木枯しが吹いていたが、皆顔を真っ赤にしてほおばった。最後のしめは父と弟は焼ソバ、私はくろ百合とメニューに書いてある水溶き小麦粉に餡を混ぜたものを注文した。くろ百合を薄く焼いて黒みつをかけるとデザートのようになり好きだった。すっかり身体も暖かくなり満足して家路についた。

息子が中学に入学したのを機にアルバイトを始めた。小学生の時の学童野球やサッカーの試合の送り迎えがなくなっただけでも時間に余裕が出来た。仕事は主に土、日の朝九時から六時まで一日中立ち仕事だった。夕方疲れて帰宅する途中晩ご飯をどうしようかと悩み始めた。まずご飯を炊いて汁物を作り肉を焼いてサラダにして・・・。考えるだけで足取りが重くなった。お好み焼きなら粉を溶いて具材を混ぜれば出来上がり、何より夫が満足する。その日もアルバイトをした夜だった。台所で夕食の準備をしていると高校生の息子が帰宅した。

「おなかすいた。夕飯のおかずなあに。まさか今日もお好み焼きじゃないよね」

と言われた。いくら工夫して作ってももう飽き飽きしていたのだろう。それを聞いて自分でもにが笑いした。

その息子も就職し大学の同級生と結婚した。間もなく二人の子供に恵まれ賑やかに暮らしている。ある日電話があった。

「明日仕事が休みだからお好み焼きを作って皆に食べさせようと思って、作り方教えて」

「材料は長イモをすって、卵、牛乳、小麦粉を混ぜ、そこに豚肉、キャベツ、ネギ、かまぼこ、干エビ、イカを入れればいいのよ」

「判った。作ってみるよ」

電話はきれた。

もしおふくろの味はと聞かれたら、お好み焼きと答えるのだろうか。私としては少し不満ではあるが、でも嬉しい。

賑やかな封筒

鈴木　芳子

手持ちの郵便切手
1円が8枚
2円が8枚
10円で6枚を貼ったら
封筒のほとんどが満艦飾になってしまった

この賑やかな封筒で
いまは会えない
病むあなたに
想いの綴りを届けたい

「手をつないで
一緒に逝こうね
悲しいことなんてない」と
かって　あなたは言った

この賑やかな封筒は
お祭りのようでしょう
一緒に屋台を引いて行きましょう
沈黙の声を張りあげて
地球の外へ

信じられる雨

神山　暁美

風景の輪郭を曖昧にして
絶え間なく降る雨
野も山も　道端の紫陽花の群れも
おぼろな色あいで滲みあって

朝(とき)が明日への暦をめくれば
やがては来る乾いた季節
信じられる確かな巡りに
つゆほどの疑いももたず

だが　私の前に　雨はやまない
傘をさして　3密
疲れきった耳に慣れない言葉
闇の中の蝸牛(かたつむり)が目覚める

Go To　or　Stay Home
手探りの角(つの)に絡まる神経の糸
すき間だらけの脳には
解(ほど)けそうにない二重拘束

どちらを信じてよいのか
どこまで信じられるのか
「信じてる」そう思った瞬間には
もうすでに疑いを抱いているのだ

まだ　雨のあがる気配はない
色とりどりに咲いた傘の花
湿った風に揺れる紫陽花にさえ
不吉な形を重ねてしまって

飛行少年

高田　太郎

ゴムひもをとことんまでねじ巻き
プロペラをまわし飛ばす
竹と紙の模型飛行機を知っているだろうか
ぼくら少年飛行兵の夢をのせて
空に放ってたのしんだものだが
ある日の暮れ方
ぼくの一番機が
とつぜん行方不明になったことがある
探せば見つかるという子供の論理が
早くも消えた瞬間だった

その夜からぼくは夢の中で
空中遊泳の達人となった
胴体に巻きつけらられたものが
だんだん解けるにつれて快感が伴い
急転直下地に墜ちて
翌朝母に叱られたこともあったが
その鳥瞰の残像はあざやかだった
ぼくの抒情を先取りしたようなフレーズが広がる
湖の辺にゆらぐ黄水仙
牧場の泉でよろける仔牛

そして
見渡す限りの草原の輝き
夢でしか見られない現実は
実在をはるかに超えた美しさがある

七十年も過ぎた今宵
ぼくの分身だったあの白い機体が
どこからともなく現れ頭上をかすめる
あまりにも短くなった時間の所業か
過去に見たものは
もう二度と見ることはできない
この大人の論理を
確かめるようにぼくは二度寝返りをうつ

コロナ残酷物語

こやま　きお

コロナの嵐は収まらず
列島を吹き抜けていく
マスクが
フェイスシールドが取り乱し
祈りも願いも届かぬまま
此処かしこ
自粛・我慢の言葉が飛び交う

家族同僚友人濃厚接触
感染拡大自宅宿泊療養
重症患者増大医療崩壊

増え続けるコロナ感染症を呪っても
繁華な街は眠らない
陽性患者は増えるばかり
　東京には行かないで
　東京の人は来ないで
誰が迎え誰を追いやるGo　To
盆の帰省も規制される

弱者は救われるはずなのに
息を潜めてこっそり生きる
3・11後の繰返しではないか
正義という名の狂気が暴走し
コロナ感染者狩りがはじまる

朝と日中

村上　周司

朝は予告もなしにやってくる
朝は獣たちが
昨日の夜に遊びつかれた
獣たちの寝息が
聞こえてきそうな感じがする
日中太陽は
光の演奏をしているかのように
チカチカと音を響かせてゆれている
また日中
全世界は
天然色のようにオーラをだしているような
錯覚をおこさせる最近・・・
いつもそんなことを考えながら・・・

イノシシの田の草取り

貝塚津音魚

よしえちゃんの家で
今日は田の草取りだと思ってた
後で聞いたら
昨日はやってねえと言う
ほんじゃあそこで
田の草取りしていたのは
誰だんべ
ここらじゃあとは
イノシシしかいねえ
どおりででっけい尻しているとおもった
なんか　俺らたち年経(としと)って
仕事がままならねえから
イノシシも見かねて
山仕事を休んで
手伝いに来てくれたんだべか
イノシシもずいぶん変わったな
食べ物作っているのは農家だ
イノシシも共生と言う意味が
分かるようになったんだべか

絵ハガキ

松本ミチ子

自宅に送れなかった
旅先からの絵ハガキ

待ち合わせは
いつも本屋の片隅

未来をつくる言葉がなくて
見えない先に何が有るのか
思った

　これ
　プレゼントです
　三日後に開けて下さい

待ちきれなくて封を切った
絵ハガキが十枚
戻って来た

自死を選んだ彼
なぜ　どうして
あんなにうまく

寄り添って生きて来たのに

どんな時も
優しく包んでくれた彼
胸の中が
がらんと空洞になって
その底に
冷たいガラス玉になった
心が沈んでいく

巡りあいの悪戯
今
自分の影だけが動く

沼の回想

螺良　君枝

気がつくと　沼の縁に立っていた
思い出の青い風が　吹いて来たのに
枯れ蟷螂の斧のように
風に背いて　硬直するばかり
風に向かって　空を切るばかり

思い直し　全身で決意して歩きだす
萎えた服に　体温の鼓動を
一足　一足　封じ込めて
しっかりと歩きだす

木道の　優しい音に酔っている
赤黒い　心の傷を撫でてみる
そっと覗いた水面は
雲を映して　僅かに華やいでいた
咳きこむような
木々のざわめきに
かすかに　答えていた

がまずみの実が光っている
たおやかになびいている

むらさきしきぶ
山韮の花の吐息
蝮草の突き上げた
赤い実の意志

ざわざわと　葦は騒ぎ
冷えびえと　沼は沈んで
消えて行った

茸採り

戸井みちお

茸採りに誘われる
山は無理　平な所だってふうふうだ
大丈夫　茸採りは山登りではないから
言われるままについていく
車を山道に止め　籠を腰に
いざ出陣　山に入る

人は一歩踏み出す時
自分が行く道の前方はるか
みつめ　心急き　勇み踏み出す
ところが　彼は一歩ふみ出す前
右を見　左を見　つつと
谷側向って降りて行く
人の見ない方向を見て
彼はそこに人の見なかったものを見つける

谷側に倒れこんだ倒木
倒木を覆ってびっしりの椎茸
昨夜の雨を含んでずっしり重い
すでに籠いっぱい
よしときな　まだこれから別のキノコもあるから

慾はほどほど
イノチを捨てるかエモノを捨てるか
どちらかになっちまいますよ

人の歩いた道を歩いても茸はないです
歩かない所には道はないです
道のない所には危険があります
谷は行けば行く程深くなります
ひき返えしましょう
引っ帰りに近道はありません
来た道を忠実に
開らけた所に出てきたら
それからまた右左
自分の道を探しましよ

冬から秋へ

大島　孝子

マスク・マスク行き交ふ人の頭上にはただ静かなる冬空がある

コロナ禍に立入禁止の公園の遊具も淋し　春の曇天

自粛せよ出るな集ふな人心のいよよ鋭りてコロナ禍を生く

「何日も人間（ひと）とお話してないの」独り暮しの叔母より電話

六月は六月の風ふうはりと鉄線ひらくコロナ禍の中

風に乗り『山の郵便配達』届きたり旅する一冊友から友へ

なにごともなかりしごとくゆれてゐるのうぜんかづらは朱の花垂りて

蚊帳吊りし遠き昔の涼しさや　命にかかはる暑さとなりて

七夕も夏祭もなくなにもないコロナ禍の夏すぎて立秋

「特別の夏」がすぎたらきっぱりと普通の冬が来るのだらうか

卯月の風に

神谷　由里

思ふのみに月日経ちしと夫を誘ふわがふるさとの村の社へ

夫の持つハンドル軽く行く道に若葉がそよぐ卯月の風に

お祭りの太鼓の音が清々と青田渡りし山間ひの里

何処の土地に暮らしてゐてもその一生（ひとよ）護りくださる産土の神

県道の傍への杜の厳かな中を透りてうぐひすの声

幾十年ぶりのお参り杉の木は太く古木の風格に立つ

杜の木の木下明るし山つつじ花色やさしく並びて二本

歳永く里を御（み）守り鎮もれる神さぶ社山を背にして

赤き打掛け装ひお参りしたる日の遠き日思ふ本殿の前に

お護りのただありがたく本殿を下がれば清ら春の小雨が

鳥とマスク

唐澤るみ子

この青き水惑星にうまれしとふ生き物のひとつウイルスといふも
はるかからウイルスは来るこの空の星の数より多き仲間(とも)もゐて
ウイルスは公平なるゆゑ差別せず区別もせずに人に近寄る
ウイルスには音がないといふ恐怖にも拒否にもあらず音といふもの
視えぬ道をウイルスは来るその道に小さな鈴を並べ置かむか
このことは何かの罰か手を洗ひ手を洗ひ人は追はるるごとし
どこかで人はわかつてゐるのだこの世に棲むどの善悪もつながつてること
マスクしてなほ何をせむ何ゆゑに花やけものはマスクせず逝く
マスクくわえた鳥がゆく見ゆ夕空にいつしかマスクは赫く燃ゆるよ
コロナ後のちがふ世界も明滅し明滅しつづけその行辺なし

黄蝶ふたつ

神野　規子

蛍袋のかげに宿れる淋しさのありて七月母の忌ちかし

口うつしに飲ませし水がわが母の末期の水となりてかなしも

去年に逝きし友も坐るかほとけのざコロナの事は知らずゆきたり

なに恋ふとすぎしひと生か逝きし友偲びてわれは梅雨の日ををり

ひひらぎのとげなす葉にも日輪は光り優しくそそぐはつなつ

つくづくと人は時代に生かさると行き先見えぬ夏を耐えゐぬ

この夏の庭の芝生のときは色家こもる日のわが眼に沁みぬ

地獄絵の寺にかけある盂蘭盆会テレビは映す原爆の絵図

八月の炎天下にも咲きつげるもみぢ葵の緋色羨しむ

黄蝶ふたつもつれ翔びゆく秋の日や石蕗の黄にまぎれゆきたり

溝萩

佐藤　孝子

溝萩の咲きだしゐのころ草寂びて那須に早々秋が来てをり
ミソハギの小径ありけりこれの世の有縁無縁の人をつなぎて
群落のキツネノカミソリ精霊の森に危ふく紛れ込みさう
うつむける薄紫の円き花蓮華升麻を屈まりて見つ
かな　カナ　哉　ひぐらし鳴けば詠嘆の助動詞しんと哀しくなりぬ
精霊花　精霊飛蝗　精霊船　八月某日雲みて終はる
深夜ラジオに「誰か故郷を想わざる」反語さびしき日本のことば
千振の小花好みて咲かせゐし同級の男子若く死にたり
いわし雲とうろこ雲との違ひ言ふ声はそのまま若き死者なり
感情が歌語にならざる秋の夜は三十一文字を横書きにする

育てられて今

島内　美代

池の水ちよろちよろ流るる古里の小川にいく夜ほたる追ひにき
麦藁を継ぎつつ編みし蛍かご昭和のわれのいとしき玩具
水泳とふ言葉も知らず水浴びといひにし川に河骨の花
海も知らずプールも知らねばミヅスマシ追ひて遊びし古里の川
夏椿の花を仰ぎて祈りたる父の忌けふは白に縋りぬ
またの日に読むと約束したる父「人間の条件」形見となりぬ
酒も好き煙草も読書も大好きな明治生まれの父には娯楽
土も草も足裏にやさしこの庭に棲めぬか蜥蜴もどれよ蜥蜴
安らかな蚯蚓の住み処を崩しつつ草引くわれは罪人ならむ
草をひく手に蝶の憩ひたる今日は母の日もしや母さん

この夏は

鈴木　芳子

人ひとり通らぬ昼の寺庭に乾反葉（ひぞりは）は風に従い走る

ひっそりと人の往来もなき街路ステイホームにひと日暮れたり

ファッションの一つとなれるマスクなり華やかなりし雰囲気醸す

「三密」は心の距離まで離すまじ友と会いたる茶房の片隅

花瓶にさす紫陽花の紅深くして夏至の夕べの部屋の明るむ

プラタナスの広葉剪られて梅雨あけの舗道に真夏の光あまねし

絹糸の綾に交わるうす紅の手鞠のかくも華やかなれる

この夏は思い出つくることもなき路のカンナの赤赤と咲く

日常とう言葉のひびき温かしコロナに埋もれる日のあけくれは

控えめに咳（しわぶき）をするバスの中マスクつけても罪もつごとし

夫ならず

園部　恵子

あつけなく君の逝きたるのちのちを母のペースに旧暦に生く

遺されし旅の予定に標さるる井氷鹿（いびか）の里にたどり着けずに

霧雨は虹の匂ひと後姿が語りしかの日かの登山道

法名に「常光」を受け虹を着る弥陀来迎に未だ遇はざり

選べざる世に遇ひ訣れまた会はむわれが未踏の君待つ岸に

悪疫除けマスクが曇らすメガネより観る清明の落輝爛るる

疫神襲来　豪雨　猛暑　祭なき日本　天刑に処せらるるごと

つくづくと君の不在を知らさるる自粛に籠る日日日すがらに

夫ならずとことはの君　君の字にコロナの三文字潜む口惜しさ

すがるべき腕うしなひし右の手がショルダーバックの肩ひもに和す

猛虎の襖絵

高橋　淑乃

騒がしく明けの鴉が鳴き交す「どうしたコロナが心配なのか」
終息の気配もあらず日々殖(ふ)えるコロナに人類防戦一方
襖絵の猛虎威嚇の二條城・コロナウイルス一呑みにせよ
一人孫コロナに耐えて健気にも帰省せぬ夏人を断ちゐる
ひつそりと盂蘭盆迎へ帰り来し仏らとゐて密にはならず
連日の猛暑に人は萎えるともコロナの席巻侵食止まず
藪蚊さへ鳴りをひそむる猛暑の日衰へしらぬコロナ悍(おぞま)し
青き毬(いが)育てて栗林夏を越し秋立つひと日コロナを忘る
南西の空を今宵はよぎるとふ「希望」に宇宙の無事を祈りぬ
甲子園に変則高校野球開催コロナ打ちとれと拍手湧き立つ

一寸先は闇

滝口　節子

一寸先は闇とはこれぞ転倒の夫流血の額押さえて

新しき白地のタオルたちまちに赤く染まりぬ　救急車待つ

救急隊の処置に言葉に救われて向かうは宇都宮記念病院

額をば縫合十針念のため頭部ＣＴ検査もすると

駆けつけし息子に事の顛末を小声で話す夜の廊下に

珍しく夜に灯油を入れに出て躓き額をコンクリートの角に

ＣＴの検査結果は異状なし息子に送られ夜に帰宅す

平凡に一日が終わるそれだけで十分なこと今更ながら

赤黒き内出血の目のまわりそのうち消えると慰める今朝も

夫とわれ茶の間に座る位置ありて共に眺める空はみずいろ

憂き世川

田村世津子

いにしへも現（うつつ）もコロナにおののきぬ皆既日食ウイルスの闇

視界ゼロの闇の中より湧き出でしマスクマスクの無言の群像

憂き世川の流れはよどみ奪衣婆（だつえば）に剥がされゆくはわれかもしれぬ

自粛自粛と呼び合ふやうに街の灯の点滅つづく春の淡雪

三密を避けつつ巡る薔薇園にうづくまる白のけぞりし紅

ステイホーム解かれ仰ぎし竹林のさやぎ果てなき風を呑みこむ

敗将の鎧のごとき閉店のシャッターを染める落日のかげ

鬼百合はいろ濃くひらき感染者増加に揺るる小池百合子氏

一心にオンライン授業はげむ孫の未来の明暗是か非かいかに

月立ちて今宵ひさしき虫の音のいのちのしらべ　きりはたりちやう

五体ゆだねる

永島　道夫

通り雨の過ぎて日の差す大通り小さき虹をビルごしに見つ

缶ビール一缶のみにて足りてゐる薬のやうなるわれの晩酌

急発進防止装置をつけたるに思はぬところで警報の鳴る

舌にのせて湿らせて飲む粉薬なれてしまふに味はふごとし

堰(せき)を越ゆるときに真白き光(かげ)を持つ水のとどろき渓(たに)に谺す

理に当たる言葉に寄付を乞はるるに少し多めに気持をのせる

敷石の隙間に生える小さき草目障りなるも莟つけをり

年寄りは相身たがひと言はれても相手によりては逃げ腰になる

網の目の確(しっか)りしたるメロンなり強面(こはも)ての大きな一つを選ぶ

カードキーを差せば明るむ空間に旅につかれし五体ゆだねる

石井里佳師を悼む

野口もと子

歌詠みは歌詠みながら彼岸へと秋の七草誘ひそよぐ
詠みし歌厚き歌集の草原に四季折々の花は咲き充つ
はらはらと音ふるやうな日ぐれみち稲葉の里へと里佳師の影は

マスクの仮面

限りなき蒼海大空宇宙の中にナノの粒子の人とし生きる
天地の輪廻が醸す透き通るうまきこの水飲めるも縁
極暑の日ちから促す脳の中に芽吹きくるものミトコンドリア

悪霊もたじろぎ参る能舞台マスクの仮面威厳に在す

悪疫は何処ぞ狼煙を今あげる虎の尾高々花をかざせり

弱冠の冠つけし侍がスマホに俯く江ノ電座席

起重機のキリンの首は考へる破壊に構築いつまで続く

真夏の仙人掌（サボテン）

橋本　茂子

つきぬける夏空の碧雲の峰白昼夢のごときコロナ禍の拡散
サボテンの全身棘を研ぎ澄ませ明日の日常を伺ひてゐる
仙人掌の棘が威嚇する炎天下マスクを着けしホモサピエンスを
庭隅に鬼灯（ほほづき）の明かり灯りゐてコロナ禍収束の道しるべとなれ
水を欲す真夏の孔雀サボテンの紅の花王冠のごとくに
幼子が顔いっぱいにマスク着けカート押し行くスーパーの中
人類の英知を超えて繰り返すパンデミックの歴史果てなく
ブルーマウンテン珈琲の香に覚醒す自粛に弱りし脆き心は
黒揚羽はばたき止まず遅夏の百日草の花群ゆらし
凄まじき速さで歴史をぬり変へる神技の如きコロナウイルス

朝明けんとす

福澤　悦子

霧流れセキレイ翼を翻し那珂の川瀬に朝明けんとす
東のやまなみ一点明るむと息つめて目守る朝日出づるを
川淀のくらき水面にさざなみの光揺らぎて朝明けにけり
川風に吹かれやまなみ四方に見て昨日に次ぐ今日ある有難さ
対岸の浅瀬に遡上する魚のごと白波を立つる岩あり
道の辺の待宵草のあえかなる黄の花震ふ我を呼ぶがに
とき色にもみぢせる葉の美しさ身を屈め見る名知らぬ草を
今朝の散歩の小さき驚きうまごやしにも四つ葉のあるを見出でつ
ノーマスク互みに許し草の道礼(いや)し擦れ違ふ日々同じ人と
川霧の岸に佇む尽きるなく流るる水にこころ委ねて

如何なる未来を

星野　清

脈絡なき対応つづけ唐突に明日を最後に全国休校　二月二十七日

患者なき東北地方の隅々まで一斉休校は殿乱心か

待ち待ちしオペラの切符も使ふなく言はるるままに家籠りゐる

列車もだめホテルもだめとウイルスを避けて何せむ老いたる今に

今ならば体力あるにこの春は外出するなといふ世とはなる

家近き学校の桜見しのみにウイルス騒ぎに春は過ぎゆく

生きてゐて死なないだけが人生の目的となるかわが晩年は

子供らの勤務先ウイルスに汚染され孤独となりて義妹住めり

待ち待ちし入学式に近寄るな大声出すなと先生諭す

群るることを入学式に咎められ如何なる未来を児らは迎ふる

新型コロナウイルス

増田　律子

太陽のコロナに似たるが名の故か新型ウイルスまたも生ずる
この星のホモサピエンス七十億今ウイルスに怯えくらせり
ウイルスの飛沫を運ぶ風のむた十年前には鳥から人へ
人の智の及ばぬ場所を狙ひ撃つ見えざる敵に対処し難し
文明とふ御旗を盾に人間は弱者のいのちあまた奪ひき
口角に泡を飛ばして議論すをテレビに観つつマスクつけたり
映しだす全身防護服の人サーズのときもマーズのときも
清潔も度を越したれば近頃は蠅蚊ごきぶりお目にかからず
自然界の反発の如次つぎに新型ウイルス猛威を振ふ
罪ふかく進化の過程辿りつつコロナウイルス人から人へ

自粛とふ日々

増渕　弥生

笑ふことすこし思ひ出し解(ほど)けたる東雲草に秋茜来て
手をひろげ雨吸ひし庭に深呼吸二周めぐりて黄揚羽に遭ふ
老い等こもるこの町内も容赦なく狂ひし日輪隅なく射せり
子には子の思ひあるらむ水色の日傘左に傾けて行く
模索中見当中なる語の乱れ疑問符のはて慥かさは如何に
大雨も感染症も侮れぬ色に出にける野紺菊いとし
確執を見すごす晩夏の密けさの古民家カフェにマスクを外す
夕暮れを軋ませ解くキャベツの葉いちまい一枚自粛とふ日々
急かさるることなく月日流るるを際やかに夏の大三角(だいさんかく)見ゆ
月光を浴みし夜更けのこそばゆし黄薔薇ひとひら蜘蛛の巣にあり

この世なる間は

山崎緋紗江

ウイルスのパンデミックの原因の一つが地球の温暖化とは
シベリアの永久凍土溶けたればマンモスあらはる未知のウイルスも
ひそやかに変はりつつゆくわがめぐりかすかな風に耳傾けむ
籠り居が長くつづきて朝なさな沙羅の根方の苔に親しむ
ひとりゐを好む子どもでありしことときのふのごとく思う籠り居
夏休みの読書に昼寝・蝉しぐれ・とろり少女の蜜なる時間
旧かなの世界はあやに妖しくも少女ゆるりと馴染みてゆけり
父の本ルビをたよりに読みつげばひと夏森を彷徨ふごとし
百日紅（ひゃくじつこう）咲く炎昼にマスクして児ら黙々と集団下校す
コロナ禍に猛暑続けど旅人（たびと）詠みし「この世なる間は楽しくをあらな」

広き空

横山　岩男

千二百年前に村ありこの峡に住みたる人の裔なる吾か
九十の齢尊し君逝きてわれの廻りに年長者なく
平成と令和元年に十冊の著書を持ちたり勤めを辞めて
新しき機器明るき病棟はかつて見しものけふ入院す
窓広くとれる病室明るくて差す寒の日に額あたたかし
高岡に求めし『万葉集抄』を今夜（こよひ）は入院のベッドに読めり
転倒し頸椎損傷せし妻の手術を受くるは歩かむがため
子らなくば老老介護となれる身の幸せ思う妻に添ひつつ
かなしみの差し来て涙ぐむことありゆゑよしはなし初めてにして
道にまで枝広げゐし一つ木の欅伐られて空ひろがれり

日本の音

人見　靖子

打ち延ばす鉄のかたまり秋のてふ

パレットに二十四色鰯雲

雨蛙水を掛けられるのは嫌

紅葉山砺に名前呼ばれけり

指立てて真つ赤な蜻蛉ここへ来い

落葉籠背負ひ直してこぼしけり

人の世と熊の世隔て大花野

さやさやと日本の音竹の春

生前葬のかくもあつさり鵙日和

倒木に流れのめくれ鬼やんま

はなむぐり

石井　光

どんど焼き火の粉の数の星生まれ
木枯や振り絞るごとサキソフォン
空つ風吹き抜けてゆく神楽殿
天井の四隅の広さ春の風邪
寝床まで届く粥の香春の風邪
母の手を覗き込みをり夏帽子
おとうとは昆虫博士はなむぐり
紅花や隙間の目立つ時刻表
スケッチの筆止めさせる赤蜻蛉
山間の墓の葬列ゐのこづち

この世の時間

大須賀邦夫

コロナ禍の列を食み出す職蟻かな
百日紅の花鮮やかに空青し
甥も姪も還暦過ぎたり釣忍
はかなくも命清みたり糸蜻蛉
明け方のスクランブルや蛇の衣
鳴けるだけ鳴いて地面に墜ちる蝉
喜寿過ぎてこの世の時間の残暑かな
辟易のマスクの町の秋暑し
友が来て無数に見たよと秋茜
コロナ禍の巷の灯りやすがれ虫

シンキングタイム

石嵜　敬子

シンキングタイムは深く観覧車
ぬるま湯のぽかんと何もない時間
重力に逆らう五月草も木も
長靴に幼き頃の水たまり
黄昏の足を擽るダンゴムシ
遠雷を引き摺りやってくるゴジラ
手の平に感じた雨がいじらしい
幼馴染み同じ扉の鍵を持つ
曇り空見えない糸に手が届く
去る者はそれでいいのさ猫柳

日日是好日

善林　真琴

うれしくて走る哀しくても走る
いい国だ神も仏も鬼も棲む
雨の日にやりたいことがあるんです
素っぴんで欠席はがき出しに行く
レシートの重さレジ袋の軽さ
馬が合うらしい町医の聴診器
過去未来パチパチ爪を切りながら
トーストがポンスリッパも跳ねる
髪染めて午後は薄めのレモンティー
雨ポツリ降り出す午後の長電話

令和色

柳岡　睦子

虹色で明けた令和の落とし穴
三密は知らず咲き出す鬼アザミ
五分五分の未来へ結ぶ靴の紐
赤ベコの決してノウとは言わぬ主義
ありがとう言う度ぽっと開く花
ジョギングへくちなしの香が後を追い
父母が励む田んぼも黄昏る
グレージュの都会で生きる濃い白で
真っ白い紙が真っ赤な嘘をつく
濃い味で生きていこうとする小粒

ステイホーム

早見　千代

目が覚めて五体まあまあ深呼吸
朝が来た髪を結わえて「さあ」始動
さぼるけどルーティン化したモップ掛け
一杯の朝のコーヒー風を呼ぶ
白鷺が今朝も漁る用水路
コロナ禍も空いてはいないスーパーへ
オートバイ爆音がする暑い夏
人間が耐えられぬ夏拵える
バイブルを拾い読みする熱帯夜
オモイグサ芒の下で夢を見る

助け船

水上　義明

旅立に何より味方空の青
無派閥を蔭の力が背中押す
巣籠りに母のレシピが甦る
飛び賞に運の欠片が降り落ちる
言い合いを一時中断孫の笑み
下手なりに背中叩かれ歌い切る
直立で墓を見守る彼岸花
優男彼女に日傘差し出され
難聴に字幕流れる助け船
晩学に添える師の手が温かい

ミッション

野口　直子

とりあえず温かそうな人のそば
蝶蝶を夢に見ました団子虫
サヨナラを言われたＬＩＮＥ重くなる
手を抜かずその他大勢役を生き
どうしても許せない事ありまして
地球では謎は解けないかも知れず
待たないと決めても淋しさは残り
世の中に不幸自慢もあるみたい
来た道のサブタイトルは何としよ
ミッションを終えたら帰る予定です

ウィズコロナ

松本とまと

対岸の火事が我が身へ降るまさか
走り火になってコロナが世界中
パンデミック映画の中でないリアル
ステイホームじっと我慢のロスタイム
ありふれた街の景色へ人が消え
片仮名の海のソーシャルディスタンス
空気だけ乗せて電車や飛行機や
心してウィズコロナの新時代
世の中が変わる私も変わらねば
だいじょうぶ緑の風が吹いている

小糠雨

三上　博史

神様はどこにもいない進化論
今日も雨明日も雨のもの思い
虚しさに模様があって昼の月
広重の雨よ情けを突く勿れ
少子化へ仔犬はじゃれてじゃれまくり
雨だれのリズムへ過去が交差する
「我思う、故に我在り」悩む我
十月の空の青さは真正面
無精髭やっと自分を取り戻す
小糠雨老いは静かにやって来る

特集

コロナで考えたこと

コロナで考えたこと

祖母のトマトジュース

松林　厚子

外出自粛の状況の中、自宅で楽しみを見つけるとしたら何かと考えて、今年家庭菜園を始めた。まず、ミニトマトの苗を二本植えた。小さな苗が日ごとに成長し、青い実をつけてくると、他の野菜苗も植えたくなった。「失敗するのも経験」と自分自身に言い訳をしながら、何種類かの夏野菜の苗を買ってきた。ミニトマトの一種、アイコの苗も植えた。

次々と野菜の花が咲きだしたころ、アイコの苗にも花が咲き始めたが、数が少ない。「これ、本当にアイコかな」と納得できないまま毎日眺めていると、枝に三つの実がついた。どうみても、普通のトマトだ。夫に、

「ねえ、『みのり』で、アイコの苗を選んだよね」

と念を押したが、

「誰かがトマトの苗をアイコの売り場にいれちゃったんじゃないの」

と気のない返事が戻ってきた。

以前友人から、ミニトマトは素人でも割合簡単に栽培できるけど、トマトは難しいと聞いていた。友人は、「私は、苗が雨に当たらないようにビニール傘をさしかけて育てたよ」とも言っていた。そんな面倒なことは、ごめんだ。

たまに追肥をする程度だったが、トマトは順調に成長した。青い実が徐々に赤くなり、十分熟したところで、実をもいだ。水でさっと洗い、一センチほどにスライスして、皿にのせて塩を振りかけた。すっきりした味で、体にすうっと入っていく気がした。

子どもの頃はトマトが苦手だった。小学二年生の時に給食でトマトが出た。食べられないままずっとトマトとにらめっこしていた。昼休みの時間が始まり、友達が校庭で遊ぶ声が聞こえると、悲しくなった。掃除の時間になっても私のお盆は片付かないままで、泣き出したかった。あのトマトを最後に丸呑みしたのか、先生が許してくれたかは記憶にない。

小学生の高学年になって、母の実家に遊びに行った時、祖母が、「畑からトマトをとっておいで。ジュースを作ってあげるから」といってくれた。私は、「嫌いだからいらない」とにべもなく断った。祖母は、「今年のトマトは甘くて美味しいのに」と肩を落とした。実家はトマト農家で、その年の品評会で賞をとったと叔父が誇らしげに語っていた。その自慢のトマトで離れて住む孫の私を喜ばせようとした祖母の気持ちを踏みにじった。罪悪感が湧いたが従姉弟たちが飲む真っ赤なジュースを見て、絶対に無理、と顔をそむけた。

大人になってからトマトを好きになった。ジュースも好物の一つだ。祖母は亡くなり、母の実家の畑は宅地になった。あのトマトジュースを飲むことはもうできない。

「文芸ってなんだろう」を考えた

福冨　陽子

俳句は座の文芸ともいわれる。私の主催する自由俳句「風薫」は月に一度、メンバーが集まり各々の詠んだ句の背景を説明し感想を伝え合う簡素な形式であるが、作句の経緯や詠んだそのときの体験を伺うと、句がより豊かな輝きを孕み伝わる。そういったリアルな座会こそが句会の本質だと確信している。当然、久しく開催できなくなり、リモート句会も考えたが各々の環境にも事情があり実現には至らなかった。

以前、こんなことがあった。ある人が、「私は命と引き換えに小説を書いているんだ」と豪語した。私の文芸に対する態度がいかにも軽薄で安っぽく、そんな陳腐な輩と一緒にしないでくれと言いたかったのだろうが、そんなに重い意識で書くならきっとその人の作品には誰かを楽しませる術は無い。

私は小説を書くのに命と引き換えるほどのエネルギーを捧げるつもりはないし、どういった気持ちで執筆あるいは作句するかなどあえて明言する気はない。作品を生み出すまでの過程や対峙する思いを計る定規も私には要らない。

小説も俳句も、まず自分が面白がりたい。心がすさんでいたり、深い悩みを抱えているときはいい文章も句も生まれない。ささやかでもわくわく感がなければ何も始まらない。

文芸の良さは、たとえ現実の生活がどんなに辛く厳しくとも、ペン一本で現状を達観できる可能性があるといわれるがその下支えは当人の健全な前向きな気持ちではないか。思いひとつで壮大な夢や希望だって描ける。読んでくれる人の興味や共感を得られれば作品は生きる。

手前味噌になるが、私たちの句会には安心がある。互いに尊重し合う礼儀が自然に備わっている。いわば「句道」の以前に「人道」がある。武道の礼儀に近いものかもしれない。それは、句を通し自分の足もとを見、目の前の些細な発見に感情を高ぶらせる習慣が、ひいては他者を尊重する気持ちを成熟させているからではないか。安心な場だからこそ、心に残る句が生まれくるのではないか。

俳句や短歌、川柳を詠む方々に揺蕩う風の如き温かさを感じることが多いのはそのせいかもしれない。不要な言葉を削ぎ落し、限られた字数で凝縮される表現だからこそ、自らの使う言葉を見極める習慣が前提となる。少なくとも、言葉で表現することを生きがいとするならば、その言葉をひとつずつを大切に使って日常も過ごしたいものである。

人は一歩外に出れば嫌な体験をすることもある。だからこそ、せめて共有できる文芸という領域では、表現は違えど互いに尊重する気持ちや思いやりを携えていたい。

自粛的生活は新しい習慣をもたらしてくれた。庭にも頻繁に出るようになり、空を見上げる回数も増えた。忙しい中でも心に「楽しむスイッチ」さえ持っていればアイデアがひらめく僅かな振動も感じとれるだろう。その瞬間を見逃さないためにも簡素でいたい。文芸と真摯に向き合うためにも。

五十年前の予言

紙屋　里子

今年は新コロナウイルスが猛威をふるい、世界中を震撼させている。日本も例外ではない。私の住んでいる群馬県も報道された頃はゼロに近かったが、今はもう三百人を越える人が感染している。恐ろしい事である。

私が生まれる四年前に第二次世界大戦が終わった。私は戦争を経験せずに育った。それから二十数年後、学校を出て社会人になった。その頃読んだ本に書かれていた事を思いだしている。雑誌だったかも知れない。作者は誰だったかは覚えていないが。

その本に書かれていたことは、

『これからの時代は、世界中で戦うような世界戦争は、もう起きないだろう。もしも起きたら人類は絶滅してしまう。人類はそんな事はしないだろう。これからの時代に、世界中が巻きこまれるのは、小さな微生物との戦いだ。その戦いに勝てるかどうかが人類の生き残る鍵である』

世界中が巻きこまれる、つまり世界戦争は微生物との戦いなのだと予言をしていた。

これを読んだ時、微生物と戦う事がそんなに大変な事だろうか、大げさなことだと思った。

でも、今現在この予言は、的中したと言わざるを得ない。この予言をした人は生物学者だったのだろうか。五十年以上前にこんな予言をし、活字にまでなったのだから。よほどの研究をしていた人だと思う。

どんな時代であろうと、国であろうと、地域であろうと問題は常にあるが、今は新コロナウイルスとの世界戦争だということだ。

日本の対策は、三密をさけ、マスク、手洗い、うがいをしてウイルスを寄せ付けないようにする事が新コロナに勝つ手法のように言われている。なんと柔な事だろうか。でもこの柔な行いが、生き残る手法だとしたらそうして行くしかない。

それが人類の生き残る手法なのだろう。それにしても早く新コロナが収束して欲しいものだ。

明るい未来のために

神谷　由里

早咲きの梅が咲き初めた頃は新型コロナウイルスのニュースはまだ少なかったように思います。日が経つにつれて、私達の国、日本にも感染した方が増えて、学校の一斉休校の始まった頃から驚きの連続で、日毎に怖さの募る今年の春でした。

今、これを書いているのは七月の初旬です。第一波はなんとか過ぎて、第二波の心配の中です。亡くなられた方々のご冥福を祈ります。罹患されている方々が一日も早く、快くなられますように。この禍事が早く鎮まりますように。それから、医療に携っている方々に心より感謝申し上げます。

世界では様々な難儀が多い中、私達の国ではたくさんの方々のおかげで、大過なく日が過ぎていて、本当にありがたいことです。歴史の重みと、自然の恵みも思われます。

法的な強い力のものではない緊急事態宣言でも感染の拡大が収まってきて、それは世界でも稀なことだと報じられています。

東日本大震災の時もですが、この度の禍事も、一人一人の心と力が集まって、大きな力になっているのだと思います。この、小さな力が集まって、というのは遠く縄文のころから続いているのだと思います。自然に親しみ、自然を崇め皆で力を出し合って和やかに事に向かう。それが私達の中に自分では意識しなくても、脈々と受け継がれているのだと思います。

続きを書いている今は八月の下旬です。第二波のただ中と言ってもいいのかもしれません。これからどうなるのだろうと多くの人が思っていると思います。

地球の四十六億年の歴史の間には様々なことがあって、大きな流星の衝突、全球凍結、生物の五回もの大絶滅、他いろいろだそうです。今は、私達人類がどのようにするかということが大きな問題だと思います。

新型コロナウイルスは、世界のどの国にとっても、一人一人の個人にとっても、また、その集まりである人類全体にとっても、大切な学びなのだと思います。ここでいいことを学べたら、私達人類にも、この地球に私達と共に生きているたくさんの生命の仲間にも、明るい明日が来るのだと思います。

そして、すべてを生かし、育み、慈しんでいらっしゃる、目には見えない大いなるものの御心に思いを寄せることが大切だと感じました。

動かない

大出　京子（たかこ）

家族で、よく外食を楽しむ友人がいる。一人暮らしの私を気遣って、時折、誘ってくれる。

その友人が「当分、外食は控えるわ。コロナが怖いから」と電話をよこした。私も極力、外出の機会を少なくしていたので、頷けた。

実際、猛暑のせいもあって、この夏はいつもより外出の回数が少なかった。浜松市で四十・九度を記録、という数字を聞いただけで動くのが嫌になり、冷房の効いた部屋で過ごす日が多かった。

今日も日射しが強いなぁと、窓ガラスの先に広がる高い空に目を遣った。と、玄関をノックする音。チャイムがあるのだがーと、ドアを開ける。焼けつくような真昼時の玄関先に宅急便の配達員が立っていた。荷物を受け取った後、チャイムを押してみた。壊れたのかもしれないと思ったからだ。壊れてはいない。チャイムの賑やかな音を確認しながら、はたと気が付いた。新型コロナウィルスの感染を気遣っての行為だったか、と。そういえば、その若者は玄関の中に入ることなく、マスクをつけたまま、無言で荷物を手渡してくれた。

新型コロナウイルスの流行、猛暑、豪雨……。この夏は悪条件が重なった。それでも、配送物は届いた。先頃は、書留郵便の伝票に捺印しながら、思わず最敬礼をしてしまった。三十五度を超す日盛りの中、バイクでの配達であった。

高齢者の私は、出かけるのを避けることが出来る。でも、世の中、動かなければならない人はゴマンといる。人が動かなければ経済は停滞してしまう。マスクをしながら働く人の力の大きさを思わないではいられなかった。

八月二五日の某新聞に【コロナ新たな日常】の特集が載っていた。「玄関開けると洗面台」の見出しに、宅配の若者の姿を思い起こした。家の中にウイルスを持ち込まないためには家屋の構造も変えるべきなのか。コロナの影響力の大きさに驚かされた朝だった。

高齢者の私は動かない方が周りの人々に迷惑を掛けない。といっても、全く動かない訳にいかない。今、私が頼っているのは、パソコンと「生協」である。この二つがなかったら、暮らしに支障を来す。「コロナ」と「老い」が、私の生活を変えた。

怖いコロナ。煩わしいマスク。いつ収束するのだろう。

「コン、コン」と玄関のドアを叩く堅い音を聞き逃さないように気をつけながら、日を過している。

金魚のように

神山　暁美

小さな和風の庭の真ん中あたり、直径五〇㎝ほどの丸い縁を、ふくらはぎの高さまで地表に出して陶器の甕が埋め込んである。筧の先から水が常に二、三滴こぼれるようになっていて、中には七匹の大きな金魚が泳いでいる。夫が元気だった頃に、ペットショップの片隅「一匹三〇円」と値札が付いた水槽から買ってきた命だ。毎朝この金魚たちに餌をやることから私の一日は始まる。新型コロナウイルスの感染防止による自粛生活がもたらした、かつてない穏やかな日々である。

年明けから九月に至るまで県外に出たのはたった一度、一月二四日のペンクラブ電子文藝館委員会出席のための東京行き。既に中国武漢でのコロナウイルス感染症が騒がれていたが、クルーズ船プリンセスダイヤモンド号は、まだ横浜港に接岸してはいなかった。ペンの委員会は隔月あり、そのほかにも詩人の集まりや友人との会食など、昨年末までは毎月びっしり詰まっていた予定が、この日を境にすべて無くなった。

親族四人を看取り、介護歴三〇年。白寿の父とのふたり暮らしの外出は、内科、整形外科、歯科、皮膚科への通院と、週に一度の食材買出しのみ。それでもカレンダーには掃除、草取り、窓ふきなど、毎日なにがしかのメモが記され、相変わらず忙しくしている。ただ、他人さまを巻き込まない自分だけの予定ゆえ、どうにでもなる。自由なのだ。これまで、催事や旅行など他者との約束事があると、病人の様子をみながら当日まではビクビクして過ごさねばならなかった。実際その日になってお断りしたことも多々あった。その度に運命と諦めつつも「どうして私だけ……」と人生の選択を悔やんだことも一度や二度ではない。いつも苛立っている自分がいた。

このコロナ禍で世界中が不自由を強いられ、生活に困っている人々もいるという。不謹慎かもしれないが私は今までにない心のゆとりを感じている。「私だけじゃない」と素直に現状を受け入れられるのだ。そして、病人を抱えた日常に自分の人生を無理に割り込ませようとせず、介護だけの日々を送っていればこんなにも楽だったのかと今さらのように思う。

このままずっとこの状態が続けばいいと望んでいるわけではない。人々の心に歪みが出てきているのも理解している。いざ自分の身にコロナウイルスの魔の手が迫れば、こんな悠長には構えていられないのも分かっているが、今しばらく心の休息をと、身勝手な想いへの許しを密かに乞う毎日である。

金魚は今日も、水藻の間に紅色を見え隠れさせながら元気よく泳いでいる。稚魚の頃から選択できる自由はなく、甕の外の騒ぎなど知る由もない。また、それが不幸だとも思ってはいないはず。水槽の大きさに合わせて育つという金魚。私たちも今は、世界情勢に合わせ生きるしかないのだ。

人々が安心して自由に暮らせる日が早く来ることを切に願っている。私はそれまでの間、親孝行に専念させて頂こうと思う。間もなく十時、父に熱い緑茶を……いつものように。

白と黒グレーもあって コロナかな

石嵜　敬子

幸い今日までコロナウイルスに感染せず（していたかもしれないが）令和二年も終盤を迎えた。日頃からあまり人混みに出ないし、買い物も週末に一度、毎日の犬の散歩もまず人とすれ違うことがない。生活すること自体はさほど影響を受けなかった。

このような生活の中で大いに反省すべきはテレビを見る時間が増えたことだ。朝のニュースからワイドショー、夜の十一時のニュースまで情報の垂れ流し状態になってしまった。各番組のコメンテーターには、無難な意見を述べる人もいれば、奇をてらってか、人とは違う切り口で勝負する人もいる。そういう方の意見はだいたいスマートニュースに取り上げられるので、手元のスマホに通知が来る。ご丁寧にそれを又チェックするという、負の連鎖をしばらく続けていた。

どうして連鎖を断ち切れなかったのか。一つには自宅で学習塾を開いているため、常に子どもたちが出入りしていることがある。どのくらい対策をすればいいのか。学校の状況はどうなっているのか。自分一人で判断するのは正直怖かった。もう一つは漠然とした不安だろうか。緊急事態宣言が出されたときのように、大きな世の中の動きに取り残されてはいけないという不安。

緊急事態宣言が解除になり、どこよりも早く、ディズニーランドが再開するニュースが流れた。街角でチケットを購入しようとスマホをずっと操作している若者が映る。自宅で寝ずに奮闘する人も。園内のソーシャルディスタンスの安全対策も繰り返し映し出された。それでも私は「まだ早いんじゃない」と感じた。塾に通ってくるディズニー好きの子どもたちに聞いてもやはり「まだ行かない」と言う。それなのになぜ画面の中の人たちは全員で微笑ましくこのニュースを受け入れているのだろう。コメンテーターさん、ここ出番でしょう。一人くらい「もう少し落ち着いてからでもいいのでは」と言ってくださいよ。誰も言わないと、逆に大きな力が渦巻いていると疑ってしまいますよ。

コロナという病気は怖い。一方で操作された情報に流されるのも怖い。何が正しくて、誰が正しいのかなんて誰にもわからない。正解は一つとは限らない。では私はどうやって世の中を渡っていこうか。まず情報は鵜呑みにしない。次に聞いた話は一晩寝かしてから人に伝える。そして自分が白と思っても相手が黒と言ったら黒を受け入れる。どうしても譲れないとき以外は。

ウィズコロナの段階に

福澤　悦子

コロナの感染拡大が我々の心に重く伸し掛かるようになってから半年以上になる。その間にコロナのもたらした被害は今更ここに取り上げるまでもなく深刻なものである。

特に人の精神面への被害は大きく、人間とはかくもエゴイスティックで醜いものかと人間嫌いになる程に様々な事例が報道されている。コロナに感染した家が村八分に遇い、村から引越さざるを得なくなったとか、その家に東京から息子が帰省したという噂で訪問ヘルパーが来なくなったとか、医療関係の仕事に従事している人の子供を差別扱いするとか枚挙にいとまのない程に非人間的な事件が起きている。誹謗中傷分断除外。人々はかつて国がハンセン病患者に対してしたのと同じ過ちを繰り返そうとしているのではないだろうか。

コロナの感染拡大も七月段階に第二波がピークを越えた所で、第三、第四の波がいつ襲いかかって来るかは分からない状態だという。初めはただただコロナに脅え恐れていただけだが、もうこの辺で冷静さを取りもどし、コロナと賢明に付き合うウィズコロナの段階に入っても良いのではないだろうか。コロナについてはすでに各方面の専門家達による研究も進んでおり、コロナに対する対処法も種々とマスコミ等でも示されている。マスク着用、手洗い、うがい、三密を避ける等慎重になすべき事をしつつ、自分達の行動範囲を拡げてゆく工夫をしたら良いのではないかと思う。自粛自粛で萎縮してしまった日常生活をもっと活気あるものにすべき段階に来ていると思う。メンタル面へのケアにも力を注ぐべきである。

コロナの影響で親を思う心が深まったという記事が目に付いたが、親兄弟家族のみならず、すべての人に対し、その人の立場に立って物を考える思い遣りの心をもつべきであると思う。皆が苦しんでいる。自分も苦しいが自分の力で人の気持を明るくしてあげられることはないか、よくよく考えてみれば一つや二つ思いつくのではないだろうか。

我々の短歌会では、お互いにマスク着用など万全の備えをし歌会を再開することにした。私の謡曲仕舞の先生も安心できる個人稽古の場を用意してくださっている。日常生活から完全に離れた時間と空間、気分転換を図れる場所は、メンタルケアにとり必要不可欠なものと信じている。

ウィズコロナの時期がどこまで続くのかは分からない。用心しつつ、賢明に冷静にコロナと付き合いつつ収束を待つしかないと思う。ポストコロナの時代は必ずやって来る。その日の一日も早いことを神に念じつつ擱筆する。

クラスター

舘野ひろ子

終戦記念日、コロナ騒ぎの収束の気配は見えない。この日わが家では夫の初盆会が行われた。送られてきた花や初盆提灯などで賑やかな盆飾りとなったが、他県の親戚兄弟の参会を見合わせてもらっての寂しいものだった。体を壊して杖をついての夫の同僚が、一時間もかけて不自由になってしまった体で奥さんの運転する車に乗って、線香を手向けに来てくださったのには、胸が熱くなった。

世界中が混乱するばかりでなく、新型コロナウィルス騒動と並行して我が家では一大騒動が起きていた。

この騒ぎが海の向こうの出来事と、それほど緊迫感の無いころ、私が一〇年前にかかった悪性リンパ腫の再発をつげられた。六回の化学療法を余儀なくされた。

一回目の入院治療を終えて家に戻ったとき、夫の突然の他界という予想もしなかったことが起きた。肺気腫という病を持っていたが、家庭菜園も車の運転も、もうそろそろ無理かなとは言いながら「グラウンドゴルフでホールインワンだったぞ」の喜びの報告を聞いたばかりだった。一日の介護をすることもなくあっけないものであった。

悔やみの言葉はどの方も「なんと家族思いの人だったことか本人にとっても理想の逝き方でしょうね」だった。それでも私にしてみれば少しは看病させてよ、ひと言ぐらい言葉を残してよ、と切ない思いは大きい。

それでも私の病は待ったなしである。化学療法の為に病院通いは再開された。

コロナ騒ぎは大きく広がり，恐る恐るの病院通いであったが、六か月の辛い治療が終えたとき、コロナウィルスの二次感染が大きくひろがりはじめていた。

そんな中でクラスターという言葉をよく聞くようになった。コロナに関する特別用語とは思えなかった。昔から聞いていた言葉のような気がしていたが、どうしても思い出せなかった。

先日下野新聞のコラムを読んで、これだったんだ、ともやもやしていたものが消えた。はっきりした。

クラスター爆弾，クラスター焼夷弾について記されていた。大きな爆弾の中に30数発の小さな爆弾が組み込まれているのだという。

二十年七月二十九日、私の住んでいた横浜は、白昼一時間ほどで4百数十発の焼夷弾が落とされたという。驚いたことにB29五一七機が横浜の空を飛んだと聞く。短時間で我が家はもちろん横浜全土が焼野原になったことを、後に知った。

そんな地獄をよく生きられたものだ。同級生がずいぶんなくなったと聞く。仲良しの従姉妹たち家族五人もいまだに消息が分からない。三月一〇日東京大空襲の1．5倍の焼夷弾の数だったと資料に記してある。

八歳の私の記憶には、想像を絶する。

クラスターは思い出したくないことを思い出させた。

天国と地獄の紙一重

高杉　治憲

来年二〇二一年八月には私達夫婦が知り合って五十周年を迎え、その後間もなく金婚式ということになる。そこで、何か一つ妻の希望を叶えてあげたいと考えていた。昨年二月、テレビCMで『豪華客船の旅』の募集を目にして思わず「これだ」と決めて、妻にサプライズで喜んで貰うことが出来た。当初五月の予定が仕事の都合で九月末日からの十一日間コースに変更することになった。最上階のデラックスルームしか空いていないというので、予算オーバーを何とかやりくりして決めると妻は重なる幸運に大喜びだった。こうして夢が叶い豪華客船の旅は横浜港から最初の寄港地である北海道、そして秋田へと順調に進んでいた。しかし生憎、日本海を北陸に向かう日に台風が急接近し、船長の決断で金沢をキャンセルしてロシアに近い航路に迂回して次に寄港予定の韓国釜山港に直行することになった。台風回避で大揺れの長い一夜も船旅ならではのハプニングとして前向きに受けとめ、その後の快適な旅は生涯忘れ得ぬ想い出をのせて予定通り横浜港に戻ることが出来た。ところが、その二カ月後の年末に中国発新型ウィルス感染のニュースが飛び込んできた。当時は、人への感染の有無も分からず、まして日本国内にまで感染拡大する虞を感じる報道ではなかった為、私達を含む日本人の多くは「SARS」と同様に対岸の火事と捉えていた筈だった。

明けて令和初の正月は、東京オリンピック開催を目前にして、わくわく感に溢れていた。だが、その平和な幸福感を揺るがすほどの衝撃は、横浜港に停泊中の豪華客船内の新型ウィルス感染拡大の報道から始まった。以来、日本政府の迷走は、オリンピック開催と中国の習近平国家主席の日本訪問を重視し過ぎた事によって、後にクルーズ船内の感染者は七一二名と死者十三名を数えた上に三、五〇〇名の乗船者全員に地獄のような監禁生活を強いる結果を招いてしまったのだ。そして、コロナウィルスは僅か半年の間に全世界を席巻し、猛威を振るって人々を死の恐怖に陥れている。今や、世界中で三〇〇〇万人を越える感染者と一〇〇万人に及ぶ死者を出して尚、感染拡大を続けている。もし仮に、あの時、私達家族がクルージングに乗船するのが少し遅れたとすれば、帰港後、あの『ダイヤモンドプリンセス号』と同様に下船を許されず、新型ウィルスの感染に怯えながら狭い船室に閉じ込められたに違いなかった。我が身に置き換えて見ると、あの船内での苦悩と死への恐怖、絶望感、無念さは筆舌に尽し難く今でも身が震える思いがしてくる。正に『天国と地獄』は紙一重の差であることを痛感している。

このコロナ禍の後に変わるべき世界は、原点回帰を目指すべきか、今までにない未来志向になるのか、或いは、その融合を図るのか未だ見当もつかないでいる。只、私たち人類がこのコロナ禍を乗り越えた時、改めて平和と自由と人間愛に目覚めることが出来るかを試されるような気がしている。

Ｇｏ Ｔｏ チャーチ

早見　千代

自然災害と新型コロナウィルスの感染が同時に発生して、大変な事態となった。熊本県で豪雨災害が起きたとき、住民が避難所に入ろうとしたら、三密を避ける対策のため定員オーバーとして他所を捜して下さい、と受け入れて貰えなかった。切羽詰ったときにこんな仕打ちを受けるのは余りにも酷だ。複合災害の実態が報道された。

テレビを見て災害やコロナのような感染症が発生すると、決まって弱者が辛い思いをすると思った。シングルマザーが保育所で子供を預ってくれなくなったので仕事に行けない。仕事が減って家のローンが払えなくなって売却することになった家族、アルバイトが減って家賃が払えない学生、こういった話を聞くと胸が痛む。コロナが終息しないと中小零細企業の中には持ち堪えられない企業が続出するのではないかと心配になる。体の不自由な人や病気の人そしてその家族、これまで以上に心配と不安を抱えていることと思う。

コロナ禍の災害の発生でボランティアの受け入れを制限する県や自治体があった。被災者は途方に暮れるのみである。

我家も令和元年十月に水害にあった。ボランティアの方々に大変お世話になり、とても有難かった。半年近く経ってやっと大工さんが来てくれた。大工さんはコロナ禍の中、防塵マスクをして仕事をしていた。

梅雨に入って家にとじこもる日々が続いたとき、退屈と感じる日があった。水害に被災した時多くの物を失ったが、その中に書物があった。聖書、引照付聖書、旧約聖書略解、新約聖書略解、聖書辞典、コンコルダンス、カルヴァンキリスト教綱要全巻、カルヴァンキリスト教教育（これは久保義宣牧師を通して教会からいただいたもの）、木下順二牧師執筆のマルコによる福音書。ヨハネによる福音書（これらは斎藤達也牧師を通して教会からいただいたもの）これらの書物が泥水につかってしまった。これらの本はページがくっついてしまってとても使えそうになかった。

私は教会に二五年間通って、ある日からプツリと通わなくなって二二年が過ぎてしまった。これらの本はいつか手にするときがくるだろうと思って、しまっておいたものだった。

聖書とマイノートだけは捨てずに持っていた。聖書はどのページも二枚の頁がピタッとくっついてしまっている。それで退屈などしていないでこれをはがすことにした。全部はがすのに一週間位かかった。途中拾い読みをした。詩篇二三篇を読んでなぐさめられた。私はこの汚れた聖書とノートは生涯持っていようと思った。

ＧＯ ＴＯトラベル、ＧＯ ＴＯイート等と言われているが、私にはＧＯ ＴＯチャーチと聞こえてしまう。斎藤牧師がチャーチには冠詞は付かないと言われたことを記憶している。

私の心に届けられる言葉はＧＯ ＴＯチャーチ、ＧＯ ＴＯチャーチと響いてくるのである。

横文字・カタカナ言葉

髙橋　淑乃

新しい天皇陛下をいただいて希望の中にすべり出した令和二年でした。よもや新型コロナウイルスが全世界に蔓延して閉塞の一年を迎えるなどと誰が想像したでしょうか。

緊急事態宣言が出され、そして解除されましたが、七月以降もコロナは大小の波を繰り返しながら感染は終息しそうもありません。いろいろと対策は講じられています。先ず三密を避けるとてマスクの徹底が行き渡りました。

学校でも、病院でも、スーパーでも、公園でも、エチケットと言われて、ノーマスクでは顰蹙（ひんしゅく）を買います。

又、スーパー、病院、公共施設の受付にはいつの間にか透明なアクリル板や幕が下がっており、その素早い徹底ぶりには驚きました。そしてアルコール消毒剤がどこの受付にも、部屋の出入口にも置かれており、皆律儀に手を消毒しているのには感心します。日本人は潔癖なのだなあと思いました。

又レジに並ぶ時は間隔をきちんと取り、引かれた線の所で順番を待っているのです。几帳面で真面目です。こうやって今の所、人類はコロナウイルスには防戦一方です。

一方、私が興味深く感じたのは、にわか横文字カタカナ言葉の横行です。これは造語ですから外国人に通用するかどうかは別ですが、身振り手振りを添えればＯＫでしょう。

東京都の小池知事発信のウィズコロナ、ステイホーム、ソーシャルディスタンス等々、記者会見の度に口にされるカタカナ言葉には感心しました。

その後も、安倍元首相や政府発信のＧＯＴＯトラベルとかＧＯＴＯイート、ワーケーション等。スポーツ界ではリモート観戦、学校はオンライン授業、会社はテレワーク、ホームワークと次々にカタカナ言葉がデビューしました。

本来は「コロナ下」と言うべき所でしょうが、すべてはコロナ禍の産物です。今やコロナ禍の就活、コロナ禍の選挙と言われます。この難局に遭遇した学生は大変であると聞きました。リモート面接の機会急増と言った異例の状況の中での就活の難しさは、自宅を面接会場に作るために部屋の壁を白くする工夫もすると言うのです。

政局も大揺れとなり与野党のトップの選挙劇と重なり、これからの手腕が問われることになります。

それにしてもコロナワクチンの一日も早い完成が待たれるのですが、日本発、日本製のワクチンは出来ないのかと歯がゆい。ノーベル賞受賞者を出した京都大学の研究はどうなっているのか、世界製薬九社のワクチン開発への声明など進展はないのか。

新政権ではコロナ対策の大方針を示し終息への道筋を示すのが喫緊の仕事です。早くコロナに対する勝利宣言が聞きたいものです。

そして今後どの様なコロナ言葉が作られて行くのかも私の関心事であります。

人類は〝ウイルス〟から逃れることは出来ない

安西　悠子

悪魔のような〝新型コロナウイルス〟は、猛威を振っている。私達に苦しみを与えながら衰えをみせない。

しかし、この〝ウイルス〟は、〝世界の人類は一つである〟という事実を再認識させた。紛争の絶えないこの地球は一つであるということを人類につきつけた。民主主義でも社会主義でも〝ウイルス〟は区別しない。有色人種でも白色人種でも容赦はしない。等しく感染させる。今や、人類同士で血塗れになって戦争をしている時ではない。イデオロギーの違いや、人種の差別などで命を失ってはならない。

人類は、現在に致るまで、多くの〝ウイルス〟に襲われて来た。麻疹・ペスト・結核菌・マラリア・ポリオ・天然痘・白血病・エボラ出血熱・エイズ・ハンセン病・等、私達の先人、そして、私達が身を以って苦しみ治療し、沈静化させたが、多くの人々の生命が失われた。

現在では、今、流行の〝ウイルス〟のワクチンや治療薬も無い。もしも、〝コロナウイルス〟の特効薬がつくり出され、一時、患者たちが減っても、いつの日か、想像もつかない新型の〝ウイルス〟が発生する。過去の事実がこの事を証明している。人類が生存する限り、〝ウイルスたち〟との戦いは続くのである。

もしも、〝新型コロナウイルス〟のワクチンが製造され、治療薬（結核菌の場合のストレプトマイシンの様な）ができ、〝ウイルス〟が沈静化した様に見えても、この〝ウイルス〟は死滅したのではない。人体のどこかに眠っていて、人々の体力の弱った折に牙をむき出し命を奪うのだ。

過去に、その事実があるのだ。S先生は、定年まで教師をつとめられ、その後も社会教育の分野で大層、力を盡された。青年時代に、当時、日本全土に猛威をふるっていた結核菌に冒された。幸い全治したとの医者の診断で、教師の途を歩み、全くの健康体であった。八十歳を過ぎた或る日、老人特有の病気で入院した。間もなく、市中の病院から、宇都宮の岡本の病院に転院させられた。開放性の結核患者であると診断されたからだ。厳重な隔離の後、恢復することなく身罷られた。〝ウイルス〟は、六十年間も、先生の肺の中で眠っていたのだ。

〝ウイルス〟は、容赦なく、その時代の人々を悲惨な境遇に落しいれる。特に結核菌の猛威は凄まじかった。一家の主の肺を冒し死に致らせ、家族は路頭に迷う。若き女性の肺を蝕み、一生を淋しく過させる。幸い〝ＢＣＧ〟〝ストレプトマイシン〟がつくられ、結核菌は過去のものとなった。しかし、安心してはならない。S先生の事実通り〝ウイルス〟は生き続けているのだ。

〝ウイルス〟は、〝宿主〟無しには生存できない。〝宿主〟は人類である。人類は、生命のある限り〝ウイルス〟から逃れることは出来ないのだ。

コロナで足止め

古谷　耀子

二月中旬、東京に住んでいる次女が帰省するのでＪＲ宇都宮駅まで迎えに行った。到着した娘を車に乗せて運転をしながら、「お母さんは会社勤めで辛酸をなめたから、今はもう何も怖いものがないわ」と何気なく口にすると、彼女はぽそりと「コロナは?」と聞き返してきた。

次女は三月にも帰宅する予定になっていた。カレンダーのその日に大きく丸印を付けて待っていたところ、その三日前になって東京都知事が、「不要不急の外出自粛の要請」を発表した。

三月の帰省を自粛すべきかどうか、娘と何度も電話で話し合った。

彼女の住まいと職場は港区、宇都宮へは地下鉄と湘南新宿ラインに乗車することになる。迎える私たち両親も高年齢という不安材料を考慮すると、残念ながら帰宅は見合わせるべきと二人で決めた。

結論を出した日、「じゃあ、四月に待ってるからね」私はことさら声を明るくして電話を切った。

三月の中旬を過ぎてもコロナウイルス禍は収束の兆しをみせず、あちこちに拡散し始めた。テレビでは、どのチャンネルに合わせても競うようにしてコロナ情報を流し続ける。

どのような手段で忍び寄ってくるかわからない「見えざる敵」に、私は新情報を見逃すまいと長時間テレビにかじりついていた。

四月七日、ついに安倍首相が「緊急事態宣言」を出すと、職場や家庭、教育現場などいろいろな場所でさまざまな混乱が生じた。各地からの中継放送では、家籠りをするための食料品や雑貨の大量買いに、大きなカートいっぱいに商品を詰め込んでいる買い物客の姿と、売り切れて品物の並んでいない陳列棚が大仰に映し出された。

次女は、「緊急事態宣言」の解かれた六月十九日の翌日、四か月ぶりに大きなマスクをつけて、宇都宮の実家へ帰宅することができた。

緊急事態宣言の解除にほっと一息ついたのもつかの間、すぐに第二波ではと懸念される多数の感染者が発生すると、その数は日増しに上昇していった。

その状況は折しもお盆の帰省時期と重なり、移動を巡って「是」か「非」かと世論を賑わせた。

テレビに映る新幹線の車内は乗客がまばらで、ホームは閑散としている。空港ターミナルでも、出発案内板の備考欄にずらりと並ぶ「欠航」の文字が寒々しく見えて、旅のあてなど無い私まで虚しさを禁じ得なかった。

次女のお盆休み中の帰省は、またもやコロナで足止めとなった。

あえて詠う

横山　岩男

昨年六月奈良京都の旅を家族とした。友人に会うのが目的であったが、本年ではかなわぬことであった。

旅行中奈良でも京都でも思ったことは観光客の多いこと、それにしても日本人よりも外国人の多いことだった。唯一むかしのたたずまいは法隆寺だけだった。これも朝早いせいもあるが特別な感じがした。京都の清水寺の混みようは異状な感じであった。産寧坂からびっしり人人である。観光誘致、観光大国を目指しても得る物よりも失うものが多いのではないかと思った。

二月に入り新型コロナウイルスが話題になり、テレビでは連日朝から放送されるようになり、三月末の公木忌（松村英一を偲ぶ会）の中止が決定し、この頃から歌会の中止も相次いだ。三月に入ると他の結社では五月の大会が中止となり、いつ終息するか見通せない状態となった。

四月の編集にはいつも借りていた会館の会議室が閉鎖となり、一部自宅校正、編集など郵送によるとりまとめで、当分つづくようである。八月末に大会が予定されていたが、これも中止を決断せざるを得なくなった。

グローバル化、世界は一つとされてきたが、緊急事態宣言が三たび出され、三密を避け、行動も規制され、時代は逆行して古い時代に戻ったような感がある。他県の者は来るな、こちらも出て行かぬ。文明社会になって初めて経験することで観光地も閑散とし、街にも人影は少なく、自粛が求められている。

新型コロナの終息はむずかしいかもしれないが、新しい生活様式というものも生まれている。これもすべてを縮小しての生活なのでいつまで守られるであろうか。

コロナ禍により、われわれの生活も一変したが、みな不安定の中での生活で、何かあれば一たまりもなく崩れてゆくのを知った。これによって新しい秩序も生まれるであろうし、自分を見つめる機会でもある。コロナ禍で良い歌が生まれるとは思わないが、それでも自分を見つめるために、あえて詠って欲しいものである。

訪問先で学ぶ

島田トミ子

令和二年が明け今年ぜひやりたいことを考えた。

何といっても一番のもくろみは、お気に入りの温泉宿に連泊する。昼も夜も湯に浸かる。あがれば横になってテレビを観る。好きな本を読み時々書きものをする。私の好きなように過ごす四、五日間。もちろん食事は上げ膳据え膳だ。

それを想像しただけで、なんて贅沢で豪華な時間の使い方なのだろうと一人でにんまりしていたのに、新型コロナウイルスがやってきてすべてを無にした。

ウイルスや細菌はやっかいだ。病気に罹った人だけでなく周囲の生きものにまで感染を拡大させてしまう。宿主をとおして次々と自分の病原体の領域を拡げていく。まるで人間社会で領土を征服していった歴史上の将軍のように。

今回の新型コロナウイルスには未だ解明されない部分もあるらしい。治っても後遺症が残る場合もあるというから、予防も治療も難易度が高い感染症なのだろう。

昭和の時代、私は保健所で働いたことがありそこで家庭訪問をした。当時の感染症対策は肺結核が中心であった。赤痢や日本脳炎の発生もあったが、これらの患者は伝染病院へ入院となった。

結核の早期発見のために検診車が職場や地域へ出向き、盛んに胸部のX線検査をした。病気が見つかると病型により療養の場所が決まる。排菌している場合は原則療養所へ入所、軽い病型の方は在宅で服薬治療を受ける。家庭訪問は、家族内感染を防ぐための助言をしたり、療養に関する相談を受ける機会として位置づいていた。

訪問先への交通手段は昭和五十年代以前は、バスと徒歩、自転車や原付バイクである。その後、訪問用にも使える車が配備された。天候に左右されず、移動時間も短縮でき効率のよい家庭訪問ができ良いことづくめかと思えた。

ところが、私は予想外のことを体験した。

「すみません。わが家のそばには車を停めないでください」

聞くと、車の横に保健所名が記してあるので、近所の人に見られて、あとで何か言われると困るとの理由であった。

世間は感染症に対する差別や偏見が未だある、その仕事をしている保健所にも未だマイナスイメージが残っている。訪問先の方の心情まで思いやるレベルには達していない自身を恥じた。二十代の私の甘さを痛感した出来事である。

時々、テレビのニュースでコロナに感染した患者や家族、医療機関の従事者にまで人権を無視した言葉や行為があると報道される。三密に注意し懸命に消毒して感染予防に努めても罹ってしまう場合もある。コロナウイルスがどこからやってきて、どのように空間を漂っているのか。もし身近な人が感染したら、差別や偏見を持つなど考えられない。真っ先に回復のみを願うはず。憎むもの、それはヒトではなくコロナウイルスだ。無用な差別と偏見を持たないように願うばかり。

ヒトの進化はできるのか

国井　和子

今年は今までには無かったことが幾つかあった。

その一つは、毎年二十キロ以上は収穫できる梅の実が、まったくとれなかったことである。例年六月になると、三、四本ある梅の木からまだ熟さない小さい実が落ちて、地面を薄緑色にしていた。それが腐ると汚なく見えるので、三日に一度ぐらいずつ箒で掃いたりする。

それが今年は一個も落ちない。

どんなに実が生らなくとも、一個もないとは信じられない。しかし七月になっても、梅の実はまったく生らなかった。二月の花は変りなく咲いたように思うのだが、こんなことがあるのだろうか。

知人に話すと「うちも同じだよ。梅の木は十本以上あるのに、梅酒一壜だけ作る梅がやっと取れただけだよ」と言う。「気候がおかしいんだよ。人間には感じられない微妙な空気の変動があって、コロナみたいなウイルスが活動しやすい地球に変っているんじゃないの」

知人は感染症の流行した年の例をあげて、そんな年は、かならず農産物の収穫に変化があった、と言った。

インフルエンザが流行する時期には、体調管理など少しは意識していたが、感染症といわれる病気が、今まで数多くでていることを改めて知った。しかもワクチンがまだできていない感染症が、かなりあるというのだから恐ろしい。

マイコプラズマ肺炎というのがある。これはとても小さい細菌で、潜伏期間が長く、症状がでる前から周りの人に広めてしまうようだ。コロナウイルスと同じである。しかも予防するワクチンはまだ無いらしい。

感染症関係の本で調べると、コロナウイルスは、これまでに五十種類以上見つかっているとある。その中でも、二〇〇三年に中国で流行した「ＳＡＲＳ」と、二〇一二年からサウジアラビアで発生した「ＭＥＲＳ」は、肺炎などの重い症状になるのが特徴で、今回新たに「新型コロナウイルス」が出現して、ますますウイルスの恐ろしさを実感させられる。

ウイルスと戦うためには、それらに負けない免疫力をアップさせることが必要なのではないか。動植物が自分の生きる環境に適応できるよう進化していくように、人間もウイルスや細菌を寄せつけない身体に、変容していく方法はないものだろうか。

メディアのありがたみ

高橋　暁美

「三密」とは、人と仏が一体となれる僧侶の戒律だと、以前教わったことがある。手の組み方で仏の境地を表し、言葉自体に霊力がある梵語の聖句を理解し、仏の境地を心に浮かべることの三つである。

新型コロナウイルスでの「三密」は、避けなければならない重要な常套句になった。若い時から気管支が弱く、扁桃腺をはらしやすく、昨年肺炎を患ったことから、人一倍「三密」を避けなければならない。

感染し、高齢者のため重症化したらという不安、知らないうちに人にうつしたらという恐怖で、神経をとがらせた。知人、友人の中でも温度差を感じることもあったが、たとえ交友関係が壊れても仕方ないと用心に用心を重ねている。

インドア派で、一人暮らしの快適さに慣れているので、自粛生活は苦痛ではない。食事も好きなものを作り、自分のペースで食べられるから寂しさは感じない。

食料品の買い物とウォーキング以外は外出しないと、テレビ、電話、新聞、本のありがたみをしみじみと感じた。

若いころからミーハーでテレビは大好きだ。ドラマやクイズ番組をよく観て楽しんでいる。

電話は長電話が苦手で、「用件のみ」をモットーにしていたのだが、この時期、電話でテレビの話をすると意外に喜んで合わせてくれる人の多いことに気づいた。

Yさんとは、連続ドラマが次週どうなるのか予想し、Kさんとは若くして命を絶ったタレントを、受話器をとおして何度も悼んだ。Aさんとは朝ドラの主題歌や俳優の演技力のことなど。

歌好きのMさんとは、歌や歌手の話に興じる。若い彼女のおかげで最近の歌も進んで聴くようになり、音楽を理論的に掘り下げている深夜の番組を観て学び、共感している。

二種の新聞の歌壇は、短歌好きな友人と稚拙ながら批評を話し合い、Rさんとは連載小説の話に熱が入る。ひいきの女性論説員がコラムに執筆すると、Sさんから電話があり、歯切れのいいユーモアのある文章をたたえ、最近読んだ本の読後感も述べ合う。

今までこんなことは無かった。テレビは観ればそれっきり、新聞も斜め読みが多かった。電話は、安否確認、連絡事項と少々の世間話をするだけのものだったのに、気づけば、このごろは長電話になり、相手の「時間泥棒」をしてしまったかもしれないと反省することもある。

今私にできることは、規制が緩められても、節制に専念することだ。自分のため、大切な人々のため自分を律する節度と自己管理に力を尽くし、いざという時の覚悟も持ちたい。

コロナとたたかってくれている方々に感謝し、苦境にあってもがんばっている人々に敬意を表して、自分の思いを大切に、残りの人生を心豊かに生きていきたい。

たのしみは昼寝せしまに

山崎緋紗江

世界中に新型コロナウイルスが蔓延し、これまでの暮らしが大きく変わってしまった。今までは、会いたい人にはいつでも会って会話し食事ができたし、コンサートに美術館に旅行にと自由に外出ができた。だが、今はどうだろう。依然としてコロナ禍の終息は見えず、以前より少しは緩やかになってきたものの、今もって自粛状態である。

最初の頃は不要不急の外出は控えるようにとのことだった。高齢者の私にとってはほとんどが不要不急なので、それからは家籠る日々となり、今までの自由が当たり前の生活から、先の見えない不安なものになっていった。が、それも時間とともに徐々に落ちつき、家の中の整理をしたり庭の草木の手入れをしたりと、それなりに充実した時間が持てた。そんな時、小さな雑草の花の健気さや沙羅の根方の苔の繊細さなどが、今までになく美しく見え、以前読んだ『独楽吟』の世界が蘇ってきた。

作者の橘曙覧は幕末期の歌人、国学者。一二〇〇首以上の和歌を残したが、五十三歳頃詠んだ『独楽吟』と題された五十二首が、後に正岡子規に絶賛され、斎藤茂吉に大きな影響を与えたという。

どの歌も「たのしみは…」で始まり、「……する時」で終わっている。清貧の暮らしのなかから、小さな楽しみや喜びを見つけだし歌にし、また詠むことを楽しんでいるかのようでもあり、どの歌にも清々しさがある。

『独楽吟』から三首

たのしみは昼寝せしまに庭ぬらしふりたる雨をさめてしる時

たのしみは妻子むつまじくうちつどひ頭ならべて物を食ふ時

たのしみは朝おきいでて昨日まで無かりし花の咲ける見る時

コロナ禍の最中に再び『独楽吟』を読むと、より心に沁みるものがあった。豊かさ、便利さのなかであくせくしていた私に、〝楽しみは日常のなかに〟を気づかせてくれた。

家籠りの日々は、私にとって貴重な時間であった。

次の歌も私をおおらかな気分にしてくれる。

生ける者遂にも死ぬるものにあればこの世なる間は楽しくをあらな　大伴旅人

〈人間はいつかは死ぬのであるから
生きている間は楽しく生きなければ〉

元号の「令和」で脚光を浴びた大伴旅人の歌。同様なことを昔から多くの人が記しているが、短歌の力だろうか、この歌を口ずさむと調べが身内を流れ、爽やかな明るい気分になる。長引くコロナ禍を無事やり過ごしたいと思いながら、時々口ずさんでいる。

二〇年前のドイツ生活を思い描いて

橋本紀久子

3密を避けてステイホームをしてから六か月がすぎた。

朝目が覚めて「九月ってこんなに涼しかったんだ」と遠い昔に帰ってきたような感じだ。それほどこの夏は異常な暑さ、その上コロナとの戦いである。することは沢山あるのにやる気が失せている。夫婦の会話など「うん」と「そうね」で足りてしまう。隣の娘夫婦の庭が草ぼうぼうなのが気になってきた。留守を見計らって草取りをするうちに、花を植えたり野菜を育てたりの土いじりが、心を豊かにしてくれる。

便利でそれなりの豊かさの中に慣れて、動く歩道の上を歩いて来たような、空しい気持ちの中で、二〇年前ドイツで暮らした二年間の生活がどんなに、ゆったりしたものだったか思いを巡らせた。それ以前にも渡独生活はしたが、その頃と何も変わっていなかった。それにも私たちは驚いたものだ。

一つはスーパー百貨店すべてが土日は休み。レストランは休日を楽しむ夫婦。店の外テーブルや広場の噴水の周りには若者たちが群れ、賑わっている。一人だって外に出て眺めているだけでも、気はまぎれる。土曜は広場に市がたつが、野菜でもパンでも肉でも皆布袋やカバンを持って、それに入れる。じゃがいもやとまとなど、紙袋に入れてくれる。プラ製品は使わない。ゴミは徹底していた。家庭生ごみは容器で持ってきて大きな鉄の箱に空ける。日本ではようやくポリ有料になったが、それでポリが減るわけではない。ゴミ集積所にはビニール袋で出すのだから。本気で海洋汚染を考えるなら、ゴミ集積所を変える事だろう。議員さんは外国へ視察旅行に行かれるが、何を視てくるのだろうか。地球温暖化も早急に手を打たなければならないのに。

幸い我が家の周りは森や田畑があるので、マスクを外して散歩が出来る。空気も澄んでいて季節感が肌に沁みる。風にも心が揺さぶられる。でも、である。街中には庶民がとりわけ老人のやすらげる公園がない。車でなくては行けない。

まだ栃木県は良い方なのかも知れないが。

退屈な時、淋しいとき、話したいとき人が寄れるような公園や広場が身近にあったなら、と願うのは私だけだろうか。

政府が新しい生活とよく口にするが、なんのこっちゃあと思うばかりだ。それからもうひとつ、気になっていることは、コロナでテレワークが増え、都会に住む必要が無くなったのは、歓迎することだと思うが、何でもかんでも早いから、便利だからとか、紙の書類が無くなるからとか便利早いをうたい文句に、デジタル化が進み過ぎるのも、怖い気がする。それと言うのも私事で言うと、スマホを持ってから友達とのやりとりで、電話でやり取りするよりメールするほうが面倒でなくなっているからだ。会話をするにはある意味力もいる。喜怒哀楽の感情を失くしてはＡＩ人間になりかねないと、老婆心がそう思わせる。

「新しい生活」が日本の子供達の幸福度を高めるものであって欲しいと切に願っている。

検温ブース

国母　仁

「今、大丈夫」
直ぐ上の兄の声だ。兄は一日おきに携帯にかけてくる。普段は、携帯にかけてくるのだが、電話にかけてきた。
「いくら携帯にかけてもでないから」
と、言い訳を始める。
電話は商売に使っているから、用がある時は携帯にと伝えてある。
「今、散歩から帰ってきたの」
兄は毎日、散歩をしている。兄は還暦過ぎて数年して脳梗塞でたおれた。倒れる前はすし店を数店舗経営していて羽振りがよかった。
ベンツに乗り、鼻息が荒かった。
「お前も、こんな田舎で食堂なんかしてないで、横浜に来いよ」
確かに兄のいう通りに都会に出てゆこうと逸る時期もあった。
妻に大反対されて都会にでていく夢は、砕け散った。
諦め掛けてた頃、あっという間に景気はバブルとともに弾け飛んでしまった。
兄は、ほとんどの財産を一気に失った。
新たに店を開店して一からやり直そうとしていた矢先に、店で仕込み中に気持ちが悪いと、崩れるように斃れた。
店には従業員が居たので、直ぐ救急車で運ばれ一命をとりとめた。それでも左半身に麻痺が残った。言語障害にも見舞われたが懸命のリハビリで元のおしゃべりに戻った。
現在は、僅かな年金で夫婦仲良く余生を送っている。
一度斃れている経験から、兄はコロナには神経をとがらせている。それに、ヘビースモーカーだったので更にコロナには警戒している。
コロナは、高齢者や大病した人には危険なウイルスだ。
「とにかく、外出するときは必ずマスクをしろよ、それに帰ってきたら手洗いを、指の一本一本洗わなくちゃダメだよ」
まるで、小学一、二年生に諭すように繰り返す。
「あっ、一番大事な事を忘れていた。体温を毎日計ることだよ。検温ブースがいいな」
私は今まで自分の体温を計ったことがなかった。果たして何度あるのか少し興味が湧いてきた。
そこに、常連のKさんが飛び込んできた。
「やんなちゃうよな、一時間もかけて建築現場に行ったら監督に、『体温が三十八度あるから今日は帰って家で休んで下さい』と押し返しされてきたんだよ」
「三十八度でダメなの」
「オレは家を出るときは三十六度だったのだが」
Kさんの怒りなかなか収まらない。
数日後、検温ブースが送られてきた。

この大自然の深部

唐澤るみ子

コロナウイルスが世界を覆い、死に至ってしまった人々、仕事を失い収入を無くしてしまった人々の苦悩が、日々つらく察せられるなか、高齢である私自身にも感染が至れば、二度と家へは戻って来られない事態も起りうると、あれを片付け、これを仕末する日々を過ごしていることである。そんな或る日、ウイルスに関する次の事実を知らされて私は深く沈黙してしまったのであった。

この世には数千種類のコロナウイルスが生きていること、人間に感染するウイルスはその中の七種類に過ぎないこと。このウイルスは自力では繁殖できない為、人間のたんぱく質にとりついてそこに初めて自分のコピーを作るのだという。

こういうヤカラは世の中に山ほど居る何という事かと読み進めた私は次のような説明と出遭う事となったのである。

ウイルスの宿主となった時の人間のたんぱく質は、入って来たウイルスのたんぱく質と、強力に結合するのだという。それはまるで、よく知っているものを迎え入れるかのような強力な結合だという。だから、コロナウイルスは、もともとは人間の内部に居たものかもしれない、とも言われているそうだ。かつて家出したウイルスが、無事によく帰って来たかのような、強力な結合をする、というのだから。

生物学者の福岡伸一先生は更にこうも言っておられる。

「ウイルスの振る舞いをよく見ると、ウイルスは、自己複製だけをしている。利己的な存在、ではない。」「むしろ、ウイルスは利他的存在である。」と。

私は息を呑んだのだった。ウイルスが利他的な存在とは。それには次のような理由があるというのである。そもそも人間という種が、今日のこのような進化を実現できたのは、このように家出から戻ったかのようなウイルスが持ち込む、人間の外部にある水平情報を入手できたからであると。人間の内部だけだと、親から子へ伝えるタテの遺伝情報だけになっているが、人間外部の水平情報が入手できると、その読み取りを通してはじめて人間はここまでの進化を可能にも出来たのだと。

破壊だけがウイルスの仕事だと思っていた私は、ウイルスが持つもう一つの有益性に、呆然としてしまったのだった。何日も私は黙っていた。この世の全てが善と悪の混成なのだろうか。生きてみて私も又、どんな事象にもこの二つが混在していたことを視て来たのではなかったか。

福岡先生はこう言われている。「ウイルスは私たち生命の不可避的な一部であるがゆえに、それを根絶したり撲滅したりすることはできない。私たちはこれまでも、これからもウイルスを受け入れ共に動的平衡を生きていくしかない。」と。

この大自然の中に人間としてであれ、ウイルスとしてであれ「存在する」という事は何という「切実なる深さ」を持つことであろうか…。

貴重な経験を 今後に生かそう

水野　弥彦

中国は武漢を発生源とする今回、世界中に拡散した新型コロナウイルス。その感染者数は令和二年九月末現在で三千三百万人、死者数も百万人に迫る勢いで、今後さらに拡大傾向にあると、新聞報道は伝えている。第一波の際にはアメリカやヨーロッパ諸国が、拡大の中心だった。ところが第二波はトップのアメリカは変わらないが、南米のブラジル、コロンビア、ペルー、メキシコ、アルゼンチンなどの南半球に拡散。これに急速に拡大しているインド、ロシア、スペインなど感染者数と死者数が上位を占めている。

これに対し、九月二十八日現在の日本国内の感染者数は八万二千人（死者数も一千五百人）程度と極端に少ない。特に第二波では感染しても無症状だったり、軽症者が多いため警戒心が希薄となりがち。しかし未知のウイルスのため、有効なワクチンが世界各国で研究開発してはいるものの、未だウイルスを弱毒化したり死滅させたりする有効なワクチンは、依然として未開発で、予防接種に有効な免疫材料は見つかっていないのが実情。そのために大事なことは感染させない努力を怠らず、感染者をいち早く見つけ出し、隔離することだ。

日本の場合、初期段階の対応の拙さが指摘されるようにPCR検査の少なさ。空港などの水際対策や政府の対応の拙さなどに加え、関係法令の不備などが際立ち、当時の安倍内閣は右往左往し、感染防止の手立てに遅れを取ったとはいえないだろうか。また縦割り行政の欠陥を露呈し、有効な対策が後手後手に回り、感染症の医師らを集めた「専門家会議」を設置。そこに〝丸投げ〟し、その議論を見ながら、政府の対応策を打ち出す構図が国民の眼には映った。

民主党政権の時に作った特措法を改正し、具体的な対策を打ち出したが、その補正予算が実に膨大。特に「アベノマスク」に何百億円の予算を当てたが、各家庭に二枚組が配布されても、国民から非難され、誰もが使用されず終い。国家財政が一千兆円を超す〝借金〟の厳しい財政事情にある中で、何という無駄遣いかと非難ごうごう。その付けは国民に税金などの形で覆いかぶさって来ることは必至なのである。

全国民に緊急事態宣言が発せられ、自粛自粛の毎日だったが、ここに来て、ようやく徐々に緩和され出したが、まだまだ以前のような通常の生活に戻るには、かなりの時間を要しよう。大事なことは経済を建て直し、通常の商売ができるようになるのは、何時のことか。三密を避けて、マスクをすることが、今、求められている。勤勉な日本人だから、指示されたことには従うのが国民性。この経験を忘れずに日々の生活に生かしていくことが肝要ではなかろうか。

それにしても学校教育への影響は大きい。いろいろな工夫はされていようが、政府、学校、自治体関係者はこの点に十分留意し、明日の日本を背負っていく子供たちへの十分な配慮を望まずにはいられない。

不安と遊撃

戸井みちお

見えないものは怖い。暗闇の中じっとしとれば不安がつのるばかりである。先行きどうなることか。灯を求めて少しでも前へ進んでみようとする。先導者がいればうれしい。後に従いて進めばいい。いなければ手探りで進むしかない。遠くに明りが見えたりすればほっとする。

あちらこちらによくあるお寺さんのほらあな巡り。暗闇の中を進んで行くと灯りがあり仏さんがいる、そしてまた闇。出口にたどりつくとホッとする。戒壇廻り。長野善光寺のそれが有名である。人は不安の中から脱け出るとホッとする。そして少し素直になる。その「たわい無さ」を方便とする手段は随所に見られる。政治の世界には特に。

コロナウイルスは見えない。どこにいるかわからない。どのくらい怖いものかもわからないからなお怖い。

報道は毎日コロナ感染者数が報じられている。例えばこれを書いている九月二十六日の朝日新聞の一面見出し欄をみると、国内での感染確認例８万１２８７人、死者１５４４人、入院療養中５４６５人うち重症１６３人。世界では３２２３万５９３３人、死者９８万３０６５人。コロナ禍が始まってから約九ヶ月、その間のこの数字、他の病気の数と比してどうなのか?交通事故者や自殺者の数と比べてこの数はどうなのか。危機を煽って危機作り、危機を収めて手柄顔、ではないのか。しばしば見られる数字の魔術。

口を開けばコロナ対策。先ず第一にコロナ対策。有難や有難や、マスク二枚の無償配布に十万円の贈りもの。そしてそれから英語でしゃれてのＧＯ ＴＯトラベルＧＯ ＴＯイート。ＧＯ ＴＯイベントにＧＯ ＴＯデパート。お金はどこから出るのでしょ。大丈夫だそうです。予備費はいっぱい獲ってあります。日本銀行、お札はいっぱい刷ります。刷らせます。

昔むかしのその昔の話ではありません。七十五年前、忘れもしません。買わされた弾丸切手に国債に株券までも――一夜明れば紙屑同然の無価値。営営貯めた汗の結晶も出し入れ禁止で新円切替。値打ち半減涙の結晶、――戦費の尻拭い。

コロナ禍はやがて一年。マスクでかくされた顔はまだかくされたまま。三密は人の和を蝕み排他の論理を産み続け、咳一つ憎悪の視線が降り注ぐ。行き場失い年寄りは、家に閉塞。ＧＯ ＴＯの手形くれても、足無し金なし連れはなし。使わなければ唯の紙切れ。使っているのは金持ち暇持ち力持ち、ばかり。コロナ禍は益々差別を産みだして、その果ては…?

明けぬ夜はないと言う。コロナに勝って――と新首相は言っています。五輪へ。芳醇な言葉は人を酔わせます。しかし行為はしばしば雑草を足蹴に進みます。

既に煙幕は張られています。「自助、共助、公助」美しい言葉です。自分のことは自分で頑張って下さい。お互い助け合って。つまりは自己責任に共同責任。最後の始末は国がしましょう。――か。

日本の世間と空気

相馬　龍久

新型コロナウイルス対策に対して日本では諸外国のように法律の強制力を持たなかった。ロックダウンを強制的に行わなくても政府や自治体のお願いだけで人々は自主的に行動制限をした。またマスクの着用率もかなり高く、猛暑の屋外でも付けている人がほとんどだった。日本人のこれらの行動は賛美されると同時に疑問も呈された。同調圧力が作用しているとの意見だ。同調圧力とは聞きなれない言葉だが、英訳で集団の意思決定や行動を決定するときの少数意見に対する多数派の暗黙の圧力らしい。つまり少数意見に対して、そうだよね、そうだよね、と多数派が無言のプレッシャーをかける事なのだ。そうだとすれば少々疑問がわく。私は同調圧力というよりも空気や世間という言葉のほうが適切ではないかと思った。マスコミはこの言葉を避けていた。日本人にとってあまりにも自虐的だが的を得た言葉であるからだろう。同調圧力が作用するには少数だろうが多数だろうが意見の対立がなければならない。だから少数派が耐えられなくなった時にデモが起きる。マスクなんかしなくていい、自由に行動させろとはっきりと意見を言う。日本にはそもそも対立する意見がなかった。もちろん個人の中には多様な意見はあるのだが、表に出てくる前にある空気ができてしまう。そうなると世の中の空気や流れに逆らうと世間体が悪いということになってしまう。この世間の外にはじかれる事を日本人は最も恐れる。とにかく日本人はこの空気や世間と付き合っていかなければならない。日本人の自主的行動制限は良い空気の作用だったと思う。これが行き過ぎた結果が自粛警察だろう。何ともおかしな現象だった。日本では古来対立する意見を戦わせて結論を導くような事は少なかったようである。それとは別のシステムで動いているような気がしてきた。

新しき日常

橋本　茂子

留まることを知らないコロナウイルス感染は、じわじわと我々の心と身体を追いつめ、生き方までも変えようとしている。現代の日常は非日常となり、価値観は大きく変わろうとしている。人間にとって「命を守ること」が一番大切なことに変わりはないが、そのためのウイルス感染予防の対策方法はかつてない程徹底してきている。世界的にも清潔を重んじる国民と言われてきた我々日本人でさえ忘れかけていた清潔習慣を見直し、実行している。うがい、手洗い、消毒を徹底し、マスク着用は国民の義務とし、ソーシャルディスタンスはメジャーを使って測り、列に並ぶ時は立ち位置のマークに従って行動する。飲食店での食事、遠方への旅行、スポーツ観戦等の集団行動は制限され、自粛という名の日々に耐えた。これら全てがコロナ感染予防のためである。これらの徹底のおかげで、日本はどうにかウイルス感染拡大を抑えられているのだと思う。しかし、反面、この理路整然と実施されている方策の徹底ぶりは、一見恐ろしく不気味でもある。

ポストコロナはいつか必ずやって来る。半年後か一年後か二年後か、あるいはある日突然か、ウイルスは力を失い、深く静かに潜行してしまうだろう。その時まで、我々が日常的に行い続けたものは習慣化され、簡単に直すことはできなくなる。習慣化されたものが望ましいものであれば問題はないが、度を越してしまうとそれが脅威となる。一年中マスクなしでは外出できなくなったり、人と接触することに異状に神経質になったり、娯楽もスポーツ観戦も集団行動にも違和感を持ったりすることだ。そうなる前に、徐々に、新しい日常に慣れていくことが大切になると思う。ポストコロナの時代には、新しい日常が待ち構えているはずだ。家族を中心にしての小さな世界での密接な関係を大切にし、外面のぜいたくより内面の本質的な喜びに満足する人間性豊かな生活を求めていくようになる。それは働き方に対する考え方を変え、今回のコロナ禍で大きな流れを作り出したリモート会議やリモート授業の新しい波につながっていく。産業の形態を変え、農業・漁業を中心とした第一次産業の躍進を促すようになってくるであろう。

パンデミックの歴史を遡ると、欧米の歴史を塗り変えた産業革命を引き起こし、ルネッサンスの文明にもたどりつく。ポストコロナの時代を生き〳〵と生き抜くためにも、今から心身の準備をしておかなくてはならないと思っている。

手さぐりで新しき日常を模索する二〇二〇コロナ禍の中

亡国論としての新しい日常

三上　博史

「新しい日常」…、何という詩的な響きのある表現なのだろう。詩人ならこのタイトルで一編の詩が書けるだろうか。小説家でも何か短編ぐらいは書けるだろう。十七音短詩型の川柳だと、このフレーズだけで九音を取られてしまうので詠み込むことは難しいかもしれない。でも一応詠んでみた。

「新しい日常」思慮もなく響く　博史

少なくとも文芸に携っている者なら、この表現に鈍感ではいられない。そんな輩がいたら、言葉とその表現に対して大したセンスがないと切り捨ててもいいだろう。

昭和三〇年代、「女子大生亡国論」というのがマスメディアを賑わせた。今時、そんなことを宣う大学教授がいたら即刻解雇されるのではないか。女子を排除したら、日本の大学のほとんどは潰れてしまうだろう。何年か前に、女子を排除しようとした医学部不正入試がいくつもの大学で発覚したが、医学部でさえ、そんなことをやっていたら世間の顰蹙を買うご時世である。

「新しい日常」の中で言われている、マスク・フェイスシールドの着用、手指消毒、アクリル板を挟んだ会話・応対、ソーシャルディスタンスなど、内心そんな馬鹿らしいことなんてやってられるかと思っている方は多いと思う。こんなことをしていたら日本という国が亡びるのではないか、そう真剣に危惧しているかもしれない。

しかしこれから先、そのように馬鹿にしている人間はいい死に方をしないだろう。必ず淘汰されるはずだ。

何故なら、半世紀以上前の「女子大生亡国論」が今や完膚なきまでに否定されたように、「新しい日常」がこの先何年かして完全に定着して、新しくも何でもない、「当たり前の日常」に成り代わっているだろうからである。

令和生まれの人達は物心ついた時には「新しい日常」にどっぷり浸かって、「当たり前の日常」として育っていくことだろう。令和生まれでなくとも、今の若い世代は柔軟に物事の変化へ対応できるから安心かもしれない。問題は、人生のピークをとうに過ぎた私のような人間達はどう対処したらいいのか、ということだ。

「新しい日常」は理屈ではない。科学的な根拠が疑わしいと反論しても医学的に肩透かしを食らうだけである。それはモラルということになる。モラルが古くなった、時代にそぐわなくなったからといって、簡単に新しいモラルに飛びつくことなんてできない。しかし、着実に時代は変化している。

古い世代はどうしろというのだ。パソコンもスマホもできないデジタルデバイドの典型みたいな老人に、マイナポイントのメリットを説いてみても全くの無駄である。でもそういう老人は無視して開き直れるからいい。

「新しい日常」に対しては、誰も開き直れないのが悲しい。もし開き直ったら自粛警察に逮捕されてしまう。